平成20年度

こどもみらい館研究プロジェクト報告書

― 平成 16 年度～20 年度 ―

乳幼児子育て支援研究プロジェクト

地域と結ばれた事例研究プロジェクト

就学前教育研究プロジェクト

京都市子育て支援総合センター
こどもみらい館

ご あ い さ つ

こどもみらい館は，本年 12 月，開館 10 周年を迎えます。

日頃から，京都市子育て支援総合センターこどもみらい館の様々な事業等に，深い御理解，多大なる御支援御協力を賜り，誠にありがとうございます。

このたび，平成 20 年 12 月 8 日に「こどもみらい館研究プロジェクト報告会」を開催することができましたこと，またそのまとめの冊子である「こどもみらい館研究プロジェクト報告書　―平成 16 年度～20 年度―」を発行し，御手元にお届けすることができますことは，このうえなく喜ばしいことと思っております。何分初めての試み，また取組であり，お目だるいところもあるやも知れませんが，お目通しいただいたうえで，どうぞ率直な御批評，御教示を賜りますようよろしくお願いいたします。

報告会には，多数の方々が熱心に御参加頂き，また遠方からの御参加もあり心から感謝しております。発表担当者にとりましても少しの緊張とともに大きな励みとなりましたことでしょう。

3 つの研究プロジェクトの立ち上げから 5 年間，社会背景の変化，人事異動，助言者の転勤，参加メンバーの交代等々幾多の試練と試行錯誤の中で，創意工夫と継続そして発展を重ね，一つの業績としての形を残すことができたことは，関わりを持たせていただいた全ての方々への感謝とともに誇りに思います。

「乳幼児子育て支援研究プロジェクト」は，NPO 等の方々とともに知恵を出し合いながら歩んだ証しとして，「地域と結ばれた事例研究プロジェクト」は，地域の中の保育園(所)・幼稚園の在り方の実践例の検証として，「就学前教育研究プロジェクト」は，監督省庁や歴史の異なる保育園(所)・幼稚園からのメンバーにより，共通する保育の未来を見据え，地道な議論をまとめた証しとして，それぞれの報告書をお読みいただければ幸いに存じます。

各研究プロジェクトのまとめと考察は，今後の研究のテーマの方向性や展開すべき内容を大いに示唆していると考えられます。

京都市の「みらいの子どもたち」のために，こどもみらい館の研究プロジェクトは今後も更なる努力をし，新しい時代に即した研究を進めてまいりたいと考えておりますので，それぞれの御立場での御支援御協力を賜りますよう重ねてお願い申し上げます。

平成 21 年 3 月

京都市子育て支援総合センターこどもみらい館

館長　　浅　野　　明　美

目　次

第１　研究プロジェクトの発足 ……1

第２　各研究プロジェクトの取組とまとめ ……3

【乳幼児子育て支援研究プロジェクト】 ……4

１　目的 ……4

２　これまでの取組の概要 ……4

３　ワークショップ「親のニーズから見る子育て支援の方向性」について ……6

４　乳幼児子育て支援研究プロジェクトの考察と今後の課題 ……14

５　研究プロジェクトに参加した実行委員の所感と今後の展望 ……17

〔参考〕　乳幼児子育て支援研究プロジェクト構成団体・指導助言者 ……21

〔参考〕　報告会配布資料 ……22

【地域と結ばれた事例研究プロジェクト】 ……28

１　目的 ……28

２　これまでの取組の概要 ……28

３　平成 19～20 年度の取組 ……31

４　地域と結ばれた事例研究プロジェクトの考察と今後の課題 ……52

〔参考〕　報告会配布資料 ……54

【就学前教育研究プロジェクト】 ……62

１　目的 ……62

２　これまでの取組の概要 ……62

３　平成 20 年度における事例研究の方法 ……64

４　平成 19，20 年度を通して見えてきた保育の視点 ……65

５　就学前教育研究プロジェクトの考察と今後の課題 ……68

６　就学前教育研究プロジェクトに参加して ……70

〔参考〕　報告会配布資料（エピソードと討議シート含む） ……80

第３　研究プロジェクトのまとめ ……93

１　研究プロジェクト報告会の総括 ……94

２　3 つの研究プロジェクトの総括 ……95

〔参考〕　研究プロジェクト報告会の次第と参加アンケート ……97

第１　研究プロジェクトの発足

第１　研究プロジェクトの発足

平成 11 年 12 月，保育園(所)・幼稚園，私立・国公立の垣根を越えた「共同機構」として，相談・研究・研修・情報発信等の多彩な取組を進めることを目的に，乳幼児の子育て支援の中核施設である京都市子育て支援総合センターこどもみらい館（以下「こどもみらい館」）は開館しました。

時あたかも，少子化の進行や世帯構造の変化，地域コミュニティの弱体化等，子どもと家庭を取巻く社会環境が大きく変容するなか，子育てのウェートがその保護者，特に母親に大きく置かれる「孤育て」が進行し，子育てに対する楽しさや喜びよりも，不安や悩みが増大する傾向にありました。また，基本的生活習慣の乱れやコミュニケーション能力，自制心・規範意識の低下等，子どもたちの発達・成長過程における課題の深刻化が懸念されてきました。

このような状況の下，乳幼児期における保育の質の充実はもとより，家庭の養育・教育力の向上と，それを支援する地域における子育て力の向上が喫緊の課題となり，平成 15 年 7 月には「次世代育成支援対策推進法」が成立（17 年度施行）し，本市においても，「京都で子育てをしてほんとうに良かった」と実感できる「子育て支援都市・京都」の充実・発展を目指し，平成 17 年 1 月に新「京・子どもいきいきプラン」が策定されました。

こどもみらい館におきましても，屋内型の大型遊具を備えた「こども元気ランド」や子育て図書館の運営，各種子育て講座や保護者の井戸端会議，保育園(所)・幼稚園（以下「園(所)」）の保育者を対象にした共同研修，電話や対面による相談等を展開し，年間の来館者は 40 万人を超えるようになりました。

同時に，「共同機構」として「保育の質の向上」「子育て支援の充実」「子育て力の向上に果たす園(所)の役割」のために求められている研究について，「こどもみらい館企画推進会議（研究・研究会含む)」で検討を重ねてきました。

その際の基軸が，「京都市幼児教育センター（仮称）基本構想策定委員会答申」（平成 8 年 8 月，以下「答申」）における，「教育・保育内容の向上を図り（中略）実践に結び付ける視点に立ち，調査・研究を行うことが重要」「幼稚園と保育所等が共通するテーマについて共同して研究を行うことを志向」「乳幼児期の子育て支援に関わりのある教育・児童福祉関係者等についても対象」とするという 3 つの視点であります。

「乳幼児子育て支援研究プロジェクト」，「地域と結ばれた事例研究プロジェクト」，「就学前教育研究プロジェクト」の 3 つの研究プロジェクトは，それぞれの目的や発足に至る過程・時期は異にしておりますが，以上のような背景と経過の下，こどもみらい館が開館 5 周年を迎え，第二創業期と位置付けた平成 16 年度とその翌年度にかけて次々と産声をあげました。

第2　各研究プロジェクトの取組とまとめ

【乳幼児子育て支援研究プロジェクト】P. 4～P. 27

子育て支援に取り組むNPO団体等の参画の下，子育て当事者のニーズを反映し，子育て力を引き出す支援の在り方について研究するため，子育て支援に関わる人々や関係機関，市民が参加するワークショップやトークショップを開催してきた。また，こうしたなかで，子育て当事者の思いや参加者の意見を盛り込んで，子育て当事者や支援者に伝えたい子育てに関する情報や実践例を 5 つのリーフレットにまとめて発行した。

【地域と結ばれた事例研究プロジェクト】P. 28～P. 61

子どもや子育て家庭をめぐる環境が大きく変動している社会状況を踏まえ，「保育園(所)・幼稚園が地域の核となり，全ての乳幼児の育ちと子育てを社会全体で支援していくことの重要性を発信する」ことを目的として発足。園(所)が，地域と連携している実態を把握するための 2 度のアンケート調査とともに視察調査を行い，地域の教育関係機関や福祉関係機関と連携した保育事例や，地域の文化・行事に触れる保育事例等，地域と結びついた保育実践が，子どもの育ちや地域の子育て支援に及ぼす効果等についての研究を行った。

【就学前教育研究プロジェクト】P. 62～P. 92

保育園(所)・幼稚園，私立・市立・国立の垣根を越えて，保育士・幼稚園教諭が一堂に集い，「乳幼児期にこそ大切に育んでいきたいもの，そのために保育者が何を大切にしていくか」について研究するために発足。乳幼児期の保育・教育の相互理解を図りながら，遊びを中心とした生活の中での学びについて調査し，保育事例や公開保育の視察等，子どもの姿を通した考察を積み重ね，これまでにも 2 回のレポートを発信してきた。

第２　各研究プロジェクトの取組とまとめ

【乳幼児子育て支援研究プロジェクト】

１　目的

NPO 法人京都子どもセンターの呼び掛けで，こどもみらい館と他 6 団体が実行委員会を組織し，子育てに関わる団体・NPO の指導者研修事業「子育てでつながろう in KYOTO（こども未来財団，厚生労働省主催)」を，こどもみらい館を会場として，平成 16 年 1 月に開催しました。

このことを機に，実行委員同士のつながりをその時限りのものに終わらせることなく，子育て支援の更なる取組へと高めていくことを目指し，平成 16 年 5 月に「親育ち・子育ちと子育て支援ー今，なぜ親支援が必要なのかー」と題する市民参加のワークショップを行いました。また，同年 6 月に「子どもが心豊かに育つための環境作り等，乳幼児の子育て支援の在り方について考え，研究する」ことを目的として下記の団体からなる「乳幼児子育て支援研究プロジェクト」が発足しました。

京都子育てネットワーク，京都市私立幼稚園協会 PTA 連合会 OB 会はのんの会，社会福祉法人京都市社会福祉協議会（平成17年4月より)，NPO法人京都子どもセンター，NPO法人山科醍醐こどもの広場，京都市子育て支援総合センターこどもみらい館

（＊各団体からの参加者を，以下実行委員という）

２　これまでの取組の概要

(1)　16 年度

子育て支援の現状と課題を探る市民参加のワークショップや意見交換の場作りに取り組みました。また，京都市の次世代育成支援行動計画の新「京・子どもいきいきプラン」の中間まとめに対する本研究プロジェクトとしての意見をまとめ，提出しました。

開催日	テーマと内容
6 月 26 日(土)	「はじめの一歩」のあつまり(課題の整理と進め方について)　意見交換
7 月 17 日(土)	「子育て家庭の支援」－子育て家庭は何に困っているのか　グループ討議
8 月 28 日(土)	「地域の子育て支援ネットワーク」－役割分担と連携　グループ討議
9 月 18 日(土)	「働き方の見直し等」－社会全体で行う子育て支援　グループ討議
10 月　9 日(土)	「子育てを共に支え合う家庭・職場・地域社会づくり」　ワークショップ
12 月 11 日(土)	新「京・子どもいきいきプラン」について　グループ討議
1 月 22 日(土)	「子育て環境づくりのためのパートナーシップ」 講師：杉山千佳さん(子育て環境研究所)　講演
3 月 26 日(土)	「つながるワークショップと今後の取組」 子どもをみんなで育もうー親も支援者もともに　ワークショップ

(2) 17 年度

親や支援者に伝えたい口コミ情報や実践例をリーフレットにまとめ発信することを計画し，市民参加のワークショップを 3 回実施し，親のニーズを把握しながら「京都のママの声を集めて作ったリーフレット『ほっこり子育て』」の作成に取り組みました。

開催日	テーマ
7 月 30 日(土)	「みんなで作ろう 手に取って！みたい！リーフレットづくり」 ー親と支援者の実践につながる情報をー
11 月 12 日(土)	「みんなで作ろう 手に取って！みたい！リーフレットづくり」 ー乳幼児の保護者に必要な情報や実践例をー
3 月 11 日(土)	「京都のママの声を集めて作るリーフレットーほっこり子育てー」

リーフレット:「授乳編」「トイレトレーニング編」「イライラしたとき編」
「0，1，2 歳の遊び編ーお外でー」「0，1，2 歳の遊び編ー室内でー」

(3) 18 年度

母親たちがリーフレットを題材として話し合うなかで，子育てで大切なことに気付き実感できる場として，トークショップを 4 回開催しました。また，京都市社会福祉協議会「子育て支援 推進モデル事業」助成金を受けリーフレットを他言語(ハングル，英語，中国語，タガログ語)に翻訳し，外国籍市民への子育て支援用冊子として 1 冊にまとめた「京都発 子育てヒント集」を作成しました。

開催日	テーマ	開催日	テーマ
8 月 28 日(月)	トイレトレーニング	11 月 3 日(金)	あそび
9 月 25 日(月)	授乳	11 月 29 日(水)	イライラ

(4) 19 年度・20 年度

「親のニーズから見る子育て支援の方向性」をメインテーマに，子育て当事者，NPO 等の団体，保育園(所)・幼稚園，行政機関などに参加を呼び掛け，4 回のワークショップを実施し，親のニーズからみえてくるよりよい子育て支援の方向性を共に考える協働の場としました。また，外国籍市民向けの子育て支援用冊子「京都発 子育てヒント集」をハングル，英語，中国語，タガログ語に分冊しました。

	開催日時	テーマ
第 1 回	平成 19 年 10 月 25 日(木)	「産後ママの求めていること」
第 2 回	平成 20 年 2 月 7 日(木)	「育てにくさを感じている親への子育て支援」
第 3 回	3 月 12 日(木)	「多文化の家庭への子育て支援」
第 4 回	8 月 20 日(水)	「父親が話す子育て・地域」

(「京都発 子育てヒント集」の分冊と 3 月 12 日のワークショップは，生命保険協会からの助成を受けて実施)

３　ワークショップ「親のニーズから見る子育て支援の方向性」について

第１回　「産後ママの求めていること」

(1)　概要

子育てに関わる「SLINPA」「布おむつの会」「産後の女子力向上委員会」の 3 団体の代表者がパネラーになり，それぞれの団体を発足させた経過と活動を報告していただきました。その後，指導助言者の津止正敏立命館大学教授のコメントをいただき，グループ討議を行いました。

パネラー所属団体

SLINPA (http://slinpa.xrea.jp/)	ベビースリング（新生児から 3 歳ぐらいまでの子どもを抱っこできる布状の抱っこ紐）の講座と交流会を開催している。
布おむつの会 (http://www.dreamnappies.com)	できるだけ自然に子どもを育てたいという思いから，おむつ育児をより楽しむためのあらゆる活動を行っている。
産後の女子力向上委員会 (http://sangojoshi.exblog.jp/)	産後の女性の身体の回復と健康の増進を目的とし，母親が美しく健康に，満足できる生き方ができるようにサポートするため，産後のリハビリ・セルフケア講座や教室を開催している。

(2)　パネラーの報告趣旨

- 子どもがよく泣いてずっと抱いてばかりであったことや産前･産後の体の不調，分かっていたつもりでも実際は戸惑うことばかりで不安であったこと等，子育てがしんどい，つらいと感じていました。
- そうしたなかで，人との出会い等を通して，自分自身が一歩踏み出し，今は同じような不安や悩みを持つ母親に寄り添い，子育てを楽しみ前向きに生活していけるようにという思いで活動をしています。
- また，参加者の変化を感じたり見たりすることを通して，子育て支援の場に参加していた者が子育て支援をする側になっていることに気付き，自分自身の励みにもなっています。

(3)　津止教授のコメント趣旨

今は，子育て当事者の力や知恵に注目した子育て支援の取組が展開される時期です。ですから，これからの子育て支援の現場では，子育て支援者がその専門家として培ってきた

知識や技能だけに頼るのではなく，子育て当事者の蓄積した力や経験した取組を反映していくことがより重要になります。また，子育て支援者が，支援の方向や内容を型にはめてしまうのではなく，ニーズに即しその人の価値観等を尊重した子育て支援が求められています。

(4)　グループ討議の様子

報告を聞いて「なるほど」と思ったこと，親が望んでいることや困っていること，実践していることや今後必要だと思うこと等を付箋に書いて模造紙に貼り，7人位のグループに分かれて話し合いました。

(5)　まとめ

報告とその後のグループ討議を通し，子育て当事者は，自らが主体となって行動することで子育て支援者にもなり得ることが，共通認識できました。また，他の子育て当事者との日常的なつながりの中でも，相互にエンパワーメントしているので，この意味において，子育て当事者はすでに子育て支援者であると考えられます。

このため，子育て支援者（子育て当事者から子育て支援者となった人も含む）に求められている今日的な役割は，子育ての知恵や工夫を伝えるだけではなく，子育て当事者が主体となって活動し，そのつながりの輪を広げていけるようにコーディネートすることです。

以前は，子育て支援の主体は専門職と考えられてきましたが，そうとは限らないのです。子育て支援を通し，される側がする側へと変わっていくような子育て支援者の関わりや取組が必要になってくるのではないでしょうか。また，子育て支援の在り方として，困ったことが起きたときに，子育て当事者がそれにきちんと向き合い，一歩踏み出せるものであることが大事になると思われます。

第 2 回「育てにくさを感じている親への子育て支援」

(1) 概要

「アレルギーネットワーク京都ぴいちゃんねっと」「双子の会」の代表者と発達障害のある子どもの保護者がパネラーとなり，それぞれの子育て経験についてお話いただいた後，グループ討議を行いました。

パネラー所属団体

アレルギーネットワーク 京都ぴいちゃんねっと (http://peechannet.ojaru.jp/index.html)	食物アレルギーの子どもを持つ家族への情報提供や，食物アレルギーそのものについてと，その子どもを持つ親の思いを全ての人に知ってもらうための活動等を行っている。
双子の会 (http://www.f3.dion.ne.jp/~koginkai/futago/)	多胎児ファミリー交流の会。子育てに関する意見や情報の交換，遠足等の企画や新聞の発行等を行っている。

(2) パネラーの報告要旨

① [アレルギーネットワーク京都ぴいちゃんねっと]

- 湿疹ができてかゆみで眠れない不機嫌なわが子に困惑し悩み，いくつかの病院を訪ねて食物アレルギーと分かり除去食を始めました。除去食を始めると食べられない物がたくさんあり，原因となる食べ物は，人によっていろいろであることも知りました。
- アレルギー対応の食材を見つけても，夫婦関係や祖父母との関係，友だち付き合い，園(所)・学校のこと等悩みはつきません。アレルギーの子どもを持つ親には，共感できる場や思いをはき出せる場がとても必要です。
- 「頑張ったね。」「頑張ってきたね。」という言葉は嬉しかったのですが，「かわいそう。」「頑張りや。」と言われるのは前向きになれずつらかったです。何よりも嬉しかったのは「アレルギー食は健康な子どもにも良い，選択食ですね。」という保育園の先生の言葉です。
- 旬の物，安全な物を選んで食事やおやつを作るということは，アレルギーでなくても大切なこと，体に良いことではないでしょうか。食物アレルギーと出会って，食生活を見直すきっかけになり，食べることの大切さや家庭の食事の大切さを教わりました。

② [双子の会]

- 多胎児の子育ては，そうではない子育てと比べ身体的な苦痛が大きく時間的な束縛も強くなります。また，3 割ぐらいの子どもに身体的障害があります。私自身も妊娠中の体の負担は大変大きく，出産後は二人同時に泣かれることが頻繁にありました。一人を十分抱きしめられないなど，一人ずつにかける時間が足りないのではと感じ，発育発達に影響するのではないかととても不安でした。

・　双子の子育てから逃げたい自分がいましたが，他の人からしんどいと思われること自体がつらくて，無理をしてでも頑張ってきました。「でも，あのとき私は精一杯だったのよ。」と自分が言ったことに「それでいいのです。それで十分。」と言ってもらったことが，何より嬉しく，温かい言葉でした。

・「一度にすむからいいね。」と言われて「双子で良かった。」と本当に実感できたのは子どもたちが小学校に入学してからのことです。子どもの成長とともに自分も成長することができた実感と喜び，そして自信が今やっとできました。「あのときを乗り越えたのだからもう大丈夫。」「よくやった。」と言える自分になったことに気付きました。

③ [発達障害のある子どもの保護者]

・　私の子どもは発達が少しゆっくりでした。母親が見えないと不安で，友だちとのコミュニケーションがうまくいかず，ルールが理解できませんでした。年齢が上がるほど，友だちとの間で楽しいと思えること等のずれが大きくなってきました。

・　私は診断を聞き大変動揺しましたが，その診断を夫に伝えるときの私の動揺はもっと大きいものでした。そして，厳しく育てないといけないという夫と，子どもへの対応にずれが生じてきました。医師から「大人がその子を理解すればいいのだ。」と言われ，子どもへの対応に夫婦の間でずれがあっても，そのどちらかで子どもが救われたらよいと思えるようになりました。

・　初めは「どうして分からへんの。」と子どもにきつく言っていましたが，子ども自身も理由が分からないのだと気付き「どうして分からへんのやろうね。」と子どもの目線で話せるようになりました。子どもへの対応が分かり，診断していただいて良かったと思います。そして，今は，発達障害の子どもだけでなく，その子がその子らしく受け止められる社会であれば嬉しいと思っています。

(3)　まとめ

子育て当事者は，教わる，指導を受けるといった一方通行の支援だけではなく，話を聴いてもらい，受け止めてもらう経験を通して，孤独感から解放されて子育ての主体者として自立する基盤を作ることができます。

このため，子育て支援者は，子育て当事者の話を聴いて思いにしっかり寄り添うことが大切です。また，子育て当事者が投げ掛けてくる悩みや課題を一人で抱え込むのではなく，当事者にあったグループの紹介（当事者団体の紹介）や場合によっては専門機関などにつなげていくことも必要です。

共感し受け止めることができる地域社会の環境作りも大切です。それには，子育て支援者が正しい情報を知って周囲に伝える努力と，共感し受け止めることができる人材の育成が必要になります。

第 3 回「多文化家庭への子育て支援」

(1) 概要

NPO 法人多文化共生センターきょうと重野亜久里代表をコーディネーターとして，京都で子育てを経験している外国籍市民（ブラジル籍でパートナーは日本人，ブラジル籍でパートナーは中国人，中国籍でパートナーは日本人）3 人がパネラーとなり，パネルディスカッションを行いました。その後，グループ討議をし，津止正敏立命館大学教授にまとめていただきました。

NPO 法人 多文化共生センターきょうと (http://www.tabunka-kyoto.org/)	国籍・言語・文化や性等の違いを認め尊重し合う「多文化共生社会」の実現のための活動を行っている。

(2) パネラーの報告

① [困ったこと・解決できた方法]

- 数年に 1 回ビザの更新が必要です。日本では外国人同士の夫婦は日本国籍をとれないので，子どもはブラジル籍か中国籍を選ばなければなりませんでした。
- 異文化ということがあるので，どうしたら人と仲良くできるのかを考えて，日本のことを受け入れるようにしました。日本人である義母にも相談をしました。
- 妊娠を知ったとき，日本語の読み書きができないなど，いろいろなことが不安でした。「日本の奥さんにならなくてもよい。」という夫の言葉で自信が湧いてきたこともあり，夫のサポートは重要でした。夫や家族と仲良くすることが大事だと思います。
- 出産後は，同じ月齢の子どもを持つ友だちがいなくて落ち込みました。私が外国籍だからというわけではなく，日本人の母親にも同じことがあると思います。

② [習慣・価値観・考え方の違いで戸惑ったこと]

- 中国では，頭は冷やした方がよいということで夏でも蒸れるから帽子はかぶらず，反対に足は冷やしてはいけないので夏でも靴下を履きます。日本では帽子をかぶり，園(所)などでは冬でも裸足で遊んでいるところもあるので驚きました。
- 中国では，夏でも冷たい物は食べません。お弁当も温めて食べます。
- 日本の本で離乳食を見て，食材が豊富でメニューもたくさんあり驚きました。保健所などで教えてもらって作りました。日本は，いろいろな食材をアレンジして食べさせているので素晴らしいと思います。
- ブラジルや中国では日本と違い，出産はほとんどが帝王切開です。

③ [保育園(所)・幼稚園に入って困ったこと・子どもが日本語を話していくこと]

- 園(所)で「お弁当を持ってきてください。いつも食べている物を持ってきてくださいね。」と言われましたが，お弁当という習慣がなかったので，想像できずに困りました。そして，お弁当を包むかわいい布袋があることも知りませんでした。

日本の母親なら知っていることが，分からなかったのです。

・　園(所)等で，子どもの持ち物の全てに名前を書かなくてはならないのですが，ブラジルでは全くそういうことはしないし，それが必要であることが理解できず，違和感があります。

・　夫婦の共通の言葉が日本語なので，日本語を使うことが多いです。子どもは日本にいたら日本語で話せたらよいと思っています。他の言語も話せたらよいのですが難しいと思っています。

・　子どもは今は日本語で話しています。2 つの国の文化を持つことは良いことだと思いますが，子どもたちは周りの友だちと違うことが不安で，皆と同じようにしたいのです。親が子どもに無理やり自分の国の文化を押し付けるのは良くないと思っています。

④ [こんなサポートがあればよいと思うこと・「京都発 子育てヒント集」について]

・　母親の心のケアが必要だと思います。子どもはすぐに馴染んでいきますが，母親は難しいので，居場所が必要だと思います。

・　どこにどんな情報があり，どこでどんなサポートが受けられるかを総合的に提供してもらえるところがあるとよいと思います。

・　日本の良いところや，行政や福祉制度等を外国人に理解してもらうことが必要だと思います。

・　言葉が分からないととても不安です。子育てヒント集では，母国語がなくても自分の分かる言葉で書かれているので安心です。

(3)　津止教授のまとめ要旨

外国籍の方と意見交流することによって，日本の子育て事情がより明らかになり，見直す機会になるのではないでしょうか。また，お互いが聞いたり教えたりしてコミュニケーションを深めていくことは，日本の社会でも重要になっていると思います。制度や環境には違いがあり，その中で培われてきた子育ての文化があることを踏まえたうえで，子育てについて話し合われていくことが大切です。

(4)　まとめ

子育て中の母親の悩みは，日本人であろうと外国籍の方であろうとほとんど違いはなく，外国籍市民への支援の在り方を考えることは，日本人の支援にも通じます。子育て支援者には，多様な文化や生活習慣，価値観があることを理解し受け入れて，柔軟に対応する姿勢とコミュニケーション力が求められます。

子育て支援者は，知っていて当然，分かっているはずといった既成概念を持って関わるのではなく，外国籍市民に日本の生活習慣や価値観を理解してもらうためにも，丁寧に話を聴き，伝えることが大切です。

第 4 回「父親が話す子育て・地域」

(1)　概要

NPO 法人京都子どもセンター小西浩嗣理事をコーディネーターとして，父親のサークル代表，私立幼稚園園長，こどもみらい館職員の 3 人がパネラーとなり，それぞれの活動内容や活動を通して見えてきた父親の姿等について報告をした後，グループ討議を行いました。

子育てサークルたんぽぽひろば「たんパパ」	おとうさんのサークル，「たんパパ」を立ち上げた経過や活動と思い等
夢窓幼稚園	幼稚園で 20 年継続する「おやじの会」や保護者の姿から
京都市子育て支援総合センターこどもみらい館	「おとうさんの井戸端会議」等の事業から

小西 浩嗣
NPO 法人京都子どもセンター理事
帝塚山大学心理福祉学部非常勤講師

(2)　グループ討議での参加者の発言要旨

① [父親の現状]

- 土，日曜日も出勤している父親が多い。
- 子どもに関わりたいと思っていても帰宅が遅くて関われない父親が多い。
- 父親は仕事を優先しているので，子育てに関わっていく始めの一歩を踏み出してもらうのが難しい。
- 園(所)の送迎や入園式等で父親の姿を見るようになった。
- 公園等で子どもと遊びに来ている父親は増えてきたが，子どもを連れて遊んでいる父親同士が，話をしているような姿はあまり見かけない。
- 子育て家庭では，母親だけでなく父親も孤立しているのではないか。
- 子育て中の母親は自分の話を聞いてほしいという思いが強く，父親は聞き手にまわり，父親自身の話は聞いてもらえていないことが多いのではないか。

② [自分たちが実践していること]

- 園庭開放で「お父さんデー」を設定し，父親のつながりを広げようとしている。
- 運動会や祭りなどの行事を手伝ってもらうよう声を掛け，その後，茶話会やお疲れ様会等を行っている。
- 懇談会を夜に開き，仕事が終わってから参加してもらえるようにしている。

③ [父親に参加してもらうには]

・ 父親に役割を持ってもらい，感謝やねぎらいの言葉掛けをする。

・ 参加を義務付けることで，参加のきっかけを作る。一度参加することで楽しさを知ってもらうと，次から来やすくなる。

・ 参加している父親に他の父親に声を掛けてもらうなど，働き掛けてもらう。

・ 母親に後押しをしてもらうなどきっかけ作りが大事である。

④ [その他]

・ 父親に話し掛けるときには子どものことを聞くよりも，趣味や近況等父親自身のことを聞く方がよいと思う。あなたのことを知りたいというメッセージが大事だと思う。

・ 親子や親同士の接点を地域で作っていくことが必要だと感じる。

・ 家族ぐるみの付き合いが地域でできると子育てが楽になる。

(3) まとめ

家庭や地域の子育てに関わりたいと思っている父親は増えてきていると思われます。しかし現実には，男女の固定的な役割分担意識が残っていることや，就労時間等の理由で子育てに参加しにくいという父親もいます。

まずは，父親の思いを引き出せるような配慮，父親が話せる場所作りや参加へのきっかけ作りが必要です。「○○ちゃんのお父さん」ではなく，その人個人としてみることと，その人自身を知るという姿勢で接していくことが大切です。

父親に何かやってもらう，具体的な役割を持ってもらうことが，自分は必要とされているという自覚を高めることになり，継続的な活動や子育て参加へとつながっていくのではないかと思われます。

また，父親の現状や父親たちが実践していること等を地域に伝え広げ，多くの人を巻き込む取組へと高めていくことが必要です。

４　乳幼児子育て支援研究プロジェクトの考察と今後の課題

(1)　研究プロジェクトの取組を通しての３つの視点

本研究プロジェクトでは，「リーフレット」等の有形の成果が残せたこともありますが，研究を進めるなかでワークショップやトークショップ等を積み重ね，人と人とのつながりの場を築いてきたことが成果であります。プロジェクトの実行委員はもとより，子育て当事者とともに，園(所)や保健所，子ども支援センター等の子育て支援者が集うことにより，子育て支援を進めていくうえで大事にしていかねばならない多くのことを皆で確認できました。

その確認事項を整理すれば，次の３点に集約できます。

１つ目は「子育て当事者の尊重」です。これは「子育て支援者側の基本姿勢」とも言えます。それだけに，日常の取組の中で常にその在りようを振り返りながら，信頼感と安心感に満ちた子育て支援を進めるための「基軸」とすることが大切です。

２つ目は「子育て支援者と子育て当事者が共に集う場の創造」です。自分のフィールドを越え，子育て支援者と子育て当事者との新たな出会いとつながりを構築する機会であると同時に，子育て当事者の尊重のためにも大きな役割を果たします。

３ つ目は「地域と結びついた子育て支援の促進」です。「子育て支援は，子育て当事者同士の支援を含め日常的なものでなければならない」という問題意識を基調とした，今後の子育て支援の在り方の重要なキーワードであると位置付けています。人と人とのつながり，人の顔が見える子育て支援が地域で更に広く，深く，強く展開されていくため，一人一人が新たな一歩を踏み出すことが求められています。

ア　子育て当事者の尊重

全ての人の価値観には多様性があり，その背景には，生まれ育った国や地域，家庭の文化や環境の違いがあります。子育て支援においても，その違いを尊重することが大切です。また，悩みの大きい子育て当事者にはなおさらですが，子育て支援者が掛ける一言が，子育て当事者の心に及ぼす影響等は非常に大きいものです。このことは，第２回のワークショップでの３人のパネラーが，子育て支援者から掛けられた「頑張ってきたね。」「それでいい，それで十分。」等の言葉が嬉しかったということからも伺えます。同じ目線で支え，進みたい方向性を尊重できる支援でありたいと思います。

子育て支援者には，子育て当事者のニーズを知ることはもちろんのこと，親や子どものありのままを受け止め背景をよく理解すること，伝え合う，聞き合う，

教え合うという双方向の関係を深めるコミュニケーション力と共感力が必要です。

イ　子育て支援者と子育て当事者が共に集う場の創造

本研究プロジェクトにおいては，子育て当事者と子育て支援者が共に集う場を通して，活動に関わる悩みや不安，活動に至った経緯，現在の活動等について共感を得たり，その意義を認め合うことで，双方の自己肯定感と意欲が高まりました。子育て支援に関わる機関・施設・団体の職員が，自分の活動を通してでは出会えない子育て当事者の気持ちや，他の支援者の活動状況を聞くことにより，子育て支援者自身の振返りと意欲の向上につながったのです。また，子育て支援者も孤立しないことが大切であるという共通認識を持ちました。

そして，子育て支援者には，子育て当事者が持つ知恵や力を地域につなげていく取組や関わりが求められます。このことを通し，子育て当事者は一歩踏み出すことができ，子育て支援者にもなり得るのです。

こうしたことから，今，改めて，人と人とのつながりの大切さを強く感じます。本研究プロジェクトの取組を通しても，多くの関係機関や多くの人々との新たなつながりや出会いがありました。人と人とがつながらなければ，何も始まらないのではないでしょうか。

ウ　地域と結びついた子育て支援の促進

参加者の多くから，子育て当事者の声を直接じっくりと聞くことができ，思いもよく伝わり良かったという感想がありました。多くの子育て機関の専門職に子育て当事者の声を届けるとともに，地域の人々にも知ってもらうことが必要です。どのような思いをして子育てをしているのかを知ってもらえることで，子育て当事者が孤立せずに安心して地域に出て行きやすくなり，虐待防止にもつながっていくのではないでしょうか。

ある子育て講座の中で，講師がお母さんたちに言われた言葉があります。それは，優しく「お母さん，一人はだめだよ。」そして，はっきりした口調で「絶対一人はだめ。」という言葉です。講座の時間，楽しく過ごされていたお母さんたちの表情が少し違ったように感じました。お母さんたちの心にとても響く言葉だったようです。子育て当事者のつながりを深め，支え合える環境を作ることが，日常的で肩肘の張らない支援につながっていきます。

また，子育て当事者同士や子育て当事者と地域とのつながりを広げ，深めていくためのきっかけとなる場やその情報提供等が必要です。そのためにも，地域に根ざし，地域の核として活動を展開していく子育てネットワークの構築が不可欠だと思います。子育てをキーワードに，地域のつながりと助け合いの再生ができ，安心して暮らせる地域作りが求められています。

(2) 指導助言者からの提言

〈コミット感・自己肯定感に満ち溢れた子育て支援プログラムの必要性〉

＊＊＊ 立命館大学 津止 正敏 ＊＊

私たちの研究プロジェクトの特徴は一言で言えば，子育て当事者からの発信ということでした。子育て当事者がコミット感・自己肯定感を実感するようなものとして新しい子育て支援プログラムを構想してきたように思います。

現役の母親・父親が，子育てに参画しているというコミット感，子どものことを愚痴ったり褒め合ったり成長を共に喜んだりする応答感を，至る所でつくり出していく作業が必要ではないかという問題意識もありました。保育園(所)や幼稚園のイベントや話し合いの最中に親同士のおしゃべりで騒然となる事態を「近頃の親たちは…」と顔をしかめるよりも，むしろコミット感を求めている欲求の発露と見た場合がより生産的ではないか，という気持ちもありました。

また，子育ての困難さや戸惑いを越えて，子育てに自信と自己肯定感を膨らましていくことを可能とするプログラムの必要性も痛感してきました。自己肯定感は思春期を乗り越えていく際に大事な課題としてよく語られることが多いのですが，自分自身を大切に思ったり，自分が信頼されている，愛されているという感覚を持ち続けることは幾つになっても必要な課題です。

子育てという生活行為や家族イベントを通して「社会にコミットしていく内容と方法」を作り出していくことに視点を置いたプログラムとは，結局のところ，ヒトが社会に支えられ，かつヒトが社会を支える，ということを実感する仕組み作りに外なりません。それは安心と希望を持って子どもを産み育て，次世代にバトンタッチすることを可能とする仕組みです。親も子も，「助け合う」というこの星の固有の営みの中で繁栄してきたヒトとして成長していくことをサポートすること，これこそが本来の子育て支援が発揮し得る社会性です。

５　研究プロジェクトに参加した実行委員の所感と今後の展望

＊＊＊　京都子育てネットワーク　　藤本　明美　＊＊

この研究プロジェクトは，専門家のすでに持ち得る知識，技術，経験をもって子育て支援を語るのではなく，子育て当事者自身が体験したつらく困難な出来事をどのようにして解決をしていったのか，そのことにスポットを当てることで専門性を高めていったことが大きな特徴でした。

また，子育て支援という大きな枠組みの中で，様々な得意分野を持つ NPO 団体・社会福祉協議会・こどもみらい館が実行委員として一丸となり，研究プロジェクトの内容に応じて，子育て当事者・子育てサークルやグループに関わっている人・保育士・幼稚園教諭・保健師・助産師・児童館厚生員・支援センター職員・子育てに関心がある市民，「ほっこり子育て」のリーフレットの設置ではデパート・大型スーパー等の企業等幅広い組織・団体との連携，協力を得ながら歩んだ５年間であったことも特徴でした。

これらの特徴を生かして，当事者ならではが持つ子育ての体験や知恵を次の世代に伝えるためのリーフレット「ほっこり子育て」を作成したり，それを基に子育て真っ最中の保護者がトークショップを行いました。最後の 1 年では当事者のニーズがリソースへと変わりゆくプロセスを，支援者たちとともに学ぶワークショップを行いました。このようなつながりや機会を多くの方々と得ることができ，豊かな蓄積となったことに心から感謝しています。

この研究プロジェクトで，子育て支援の一つの在り方として，当事者の力や知恵に注目し，その力を地域・社会につなげていくことが重要だということが明らかになりました。今後，京都子育てネットワークで行っている「子育てサークル助け隊」のシステムのように，支援の受け手から担い手となる，持ちつ持たれつの循環型の子育て支援社会を構成していくことに合意を得ながら，仕組み作りを進めていきたいと思います。

＊＊＊　京都市私立幼稚園 PTA 連合会 OB 会はのんの会　　長谷川　ユリ　＊＊

私の所属しておりますはのんの会は，子育ての当事者性が色濃い，乳幼児から大学生までの子どもを持つ親の，相互支援，情報交換を目的としたグループです。

このプロジェクトに参加した当初は，私自身，支援者としての自覚はなく，他の幹事の方の使命感ある熱心な発言や行動に感心し，子育てや子どもに関する知識や情報，ネットワークの深さにただただ敬服，ひたすらついて行き，教えていただくといった姿勢でした。

自分が支援者と名乗るには，何もかもがまだまだだし，おこがましい。当事者の視線で社会に向かって発言していくことが，私の役割と考えていました。また子育てのちょっと先輩として，自分の体験や，子育ての中で得た確かな情報，知恵を，後から来る人たちに丁寧に語り伝えていくこと，そして社会全体で子どもたちの未来を豊かにする知恵や情報を語り伝えていくことの重要性を訴えていくことが，自分のできることと考えていましたが，積極性でいくと少し腰の引けた状態であり，「誰かがどうにかしてくれる」といった，どこか人頼りの感でおりました。しかし，この研究プロジェクトで5年間たくさんの方々とお会いし，学ぶ機会を頂くことで，子育ての当事者が支援者となり得る，当事者性という専門性を持つことができるという報告や，自分自身の実感から，真の子育て支援者を目指していけるのだと気付きました。

支援者と名乗るには，様々な知識やスキルを磨いていくことが求められます。また自分自身の言動に責任が伴うことをひしひしと感じ，事の重みが，畏怖の念としても存在します。その反面，その立場にいるには，ますます学び，自分を磨いていくことの必要性があり，自分自身の人生の今後の目標としていけると思うようになりました。老体に鞭打ちながらも新しいことに出会っていける楽しみとして，豊かな未来が広がっているとも感じています。

子育てが一段落した今，これまでの経験を生かしながら新たな挑戦の機会を示してくださったこの研究プロジェクトに感謝し，真の支援者を目指すスタートラインに立てた喜びとともに，子育ての多くの知恵が集まり，共に考えていけるこの素晴しい研究機構が存続し続けることを強く望んでいます。

＊＊＊　社会福祉法人京都市社会福祉協議会　　永田　潤平　＊＊

平成17年4月から本研究プロジェクトの実行委員として参加させていただきました。実際に参加してみると，連携・協働の重要性が言われながらも社会福祉協議会の職員として，他のグループや団体と同じ目線・立場で事業や取組を作り上げる経験はまだまだ乏しいなと実感させられました。同時に研究プロジェクトのメンバーの方々の人間的な魅力と個性，そして様々な事業の中で見聞きする当事者や支援者の声を聞き，京都での子育ての実態を垣間見る機会となったことは成果であったと思います。

特にこの実行委員会では，行政，社協，ネットワーク団体，NPOがお互いの強みを出し合って企画運営ができました。ワークショップに参加いただいた支援者からは自分たちの実践の中では発見できない新たな気付きがあり，当事者の人にとっても現在の活動をより広げるきっかけになったと確信します。取組を通じて全般的に共通するテーマとしては，当事者，支援者にとって，より生の意見や素朴な悩み，互いの「こえ」が聴ける場作りが今

後も継続して持ち続けることが大切であると感じました。

ここで得られた教訓や学びを個人や団体だけのものに留めるのではなく，更に広げていくために参加，協力いただいたグループや団体，専門職の方々と京都でのゆるやかなつながりを持ち続け，それぞれの事業や取組に生かしていくことが何よりも重要であると感じています。

研究プロジェクトに 4 年間参加させていただくうちに，自身も結婚し子どもに恵まれ，現在進行形で子育てに取り組むことになりました。見聞きしたことを糧に，そして子育て当事者としての意見を持ちながら，本研究プロジェクトで培ったネットワークを更に生かして子育て支援の取組を充実させていきたいと思います。

＊＊＊　NPO 法人京都子どもセンター　　竹内　香織　＊＊

平成 20 年 12 月 6・7 日の両日，NPO 法人京都子どもセンターと財団法人こども未来財団が主催して「NPO 法成立 10 周年　子ども・子育て NPO フォーラ ム」を開催しました。丁度翌日が「こどもみらい館研究プロジェクト報告会」でしたので，当研究プロジェクトの経過や成果について発表内容を追いながら，実行委員会発足の契機となった平成 15 年度のフォーラム実施や，その前年からの実行委員メンバーのつながりがあってこそ，延べ 300 人を超える参加を得て「それぞれが地域で取り組む事例を大切にしながら更につながり・広げていきましょう」という呼び掛けに対して，大きな共感を得ることができたのだと感慨を新たにしました。

「当事者とは誰か　気持ちはどこにあるか　思いを受け止める場をどう作るか」について，そのときできること（できそうなこと）・関心を持ってもらえそうなテーマや方法を探しながら，一つ一つ取り組んだ 5 年でした。

まずは「出会う場」「自分の言葉で語り合う機会」をたくさん拓くこと。そして，支援に関わる人が日常の現場以外で「当事者の声」をたくさん聴く経験が望まれています。「きっかけさえあれば」ということですが，その「きっかけの場」が安心できるものであること，繰り返し保証されることとなると，一定の仕掛けやファシリテーションが必要です。

それから，今更何を…とご指摘をいただくかも知れませんが，私個人は「子育て支援」「居場所作り」「当事者・支援者」という言葉に，今も違和感を持っています。大上段に構えることなく，子育ても含めて「自分のことは，自分で決める」が，当たり前に，しかも確かな知恵や知識と豊かな選択肢に基づいてできる。そういう社会がいいなぁと思います。「乳幼児子育て支援研究」に学びながら，「人権」や「次世代の『性』」にもつながっていく課題を感じているところです。

＊＊＊　NPO 法人山科醍醐こどものひろば　　朱　まり子　＊＊

この研究プロジェクトは，こども未来財団の助成を受け実施した，子育て支援研修会「子育てでつながろう」が出発点。

現在も参加の 6 団体と宇治子育てを楽しむ会が実行委員を引き受けてくださり，実施しました。委託を引っ張り，事務局長となりながら，実はノウハウも分らず，右往左往の日々。そこで見えたのは「人のつながりの中で，殆どのことは解決できる」ということ。「あふれんばかりの人間浴を！」と日々言っているように，多様な人や団体が関わり・つながることで多くのことを学び，改めて，資源の社会化の重要性を実感したのでした。

この気持ちが土台となり，人がつながることで完成した【京都のママの声を集めて作ったリーフレット「ほっこり子育て」 】。スーパーの売り場で，新種の野菜についてのリーフレットを見て，「子育て支援に応用したい！」と思ったのが契機で，5 つのリーフレットができあがりました。専門職ばかりでなく，親の立場を大切にし，大勢の意見を聞き作成した内容は，正に，人のつながりのなせる技でした。

次に作成した「京都発 子育てヒント集」は，外国の方へ向けた 5 言語の子育てお助けブック。これも近所のスーパーでの体験からの発想。私の住む山科は，いろんな言語の方がお住いです。背中越しに聞こえる外国語の中に，赤ちゃんの泣き声が混じるとき，言葉が通じないなかでの子育てのしんどさを感じ，少しでも軽減してあげたいと考えました。京都で暮らす外国の方への一助にとの思いが，多くの方々の力で，ハングル・英語・中国語・タガログ語・日本語の冊子となりました。

子育ては，しんどくなる一方。それに対し，いろんな人・団体がつながり，長いスパンで，多くの力を結集し，何とか立ち向かいたい。「役に立つ」という基準を忘れず，子育てが楽しくなることを目指し，今後も研究を進めていきたいものです。

乳幼児子育て支援研究プロジェクト構成団体

京都子育てネットワーク (http://www.geocities.jp/kk_net1997/)	仲間づくり・子育てサークル・サークル助け隊活動等，循環型の子育て相互支援活動の応援を行っている。
京都私立幼稚園 PTA 連合会 OB 会 はのんの会	子育ての知恵を伝え合い，互いの子育てを支え合うネットワークづくりを行っている。
社会福祉法人京都市社会福祉協議会 (http://www.syakyo-kyoto.net/)	地域福祉を推進する中核的な団体として，「住民主体を原則に誰もが地域の中で安心して暮らすことのできる人が輝く福祉のまちづくり」のための活動を行っている。
NPO 法人京都子どもセンター (http://www.kodomo-doki.org/)	のびやかで豊かな子ども時代を保証する社会を目指して，体験や鑑賞活動，チャイルドライン等を行っている。
NPO 法人山科醍醐こどもひろば (http://www.kodohiro.com/)	地域の子どもに向けた鑑賞活動，創造活動の支援，子育て支援やボランティアサポート，各団体との連携等を行っている。
京都市子育て支援総合センター こどもみらい館 (http://www.kodomomirai.or.jp)	保育園(所)・幼稚園，私立・市立・国立の垣根を越えて，京都市における子育て支援の中核施設としての取組を行っている。

指導助言者

立命館大学産業社会学部 津止 正敏 教授	〔 専門分野 〕 社会福祉，地域福祉，ボランティア

平成 20 年 12 月８日　報告会配布資料

乳幼児子育て支援研究プロジェクト

こどもみらい館
報告者：主任主事　林　麻里

1

目　的

子どもが心豊かに育つための環境づくりなど，乳幼児の子育て支援のあり方について考え，研究する。

2

乳幼児子育て支援研究プロジェクト実行委員

京都子育てネットワーク
京都市私立幼稚園PTA連合会OB会はのんの会
京都市社会福祉協議会
NPO法人京都子どもセンター
NPO法人山科醍醐こどもひろば
京都市子育て支援総合センターこどもみらい館

指導・助言
津止 正敏 立命館大学産業社会学部教授
（専門分野：社会福祉，地域福祉，ボランティア）

3

取　組　み

16年度　市民参加のワークショップや意見交換の場
17年度　伝えたい口コミ情報や実践例のリーフレット作成
18年度　リーフレットをもとに，トークショップを開催
「京都発 子育てヒント集」を作成
19・20年度　ワークショップの開催
「京都発 子育てヒント集」の分冊

4

平成16年度

● 市民参加のワークショップや意見交換の場

テーマ
「はじめの一歩」のあつまり
「子育て家庭の支援」
「地域の子育て支援ネットワーク」
「働き方の見直し等」
「子育てを共に支えあう家庭・職場・地域づくり」
新「京・子どもいきいきプラン」について
「子育て環境づくりのためのパートナーシップ」
「つながるワークショップと今後の取組」

5

平成17年度

● 伝えたい口コミ情報や実践例のリーフレット作成

＜作成のためのワークショップを実施＞

6

ワークショップ

テーマ

「みんなで作ろう 手に取って！みたい！リーフレット作り」
親と支援者の実践につながる情報を

「みんなで作ろう 手に取って！みたい！リーフレット作り」
乳幼児保護者に必要な情報や実践例を

「京都のママの声を集めて作るリーフレット
ーほっこり子育てー」

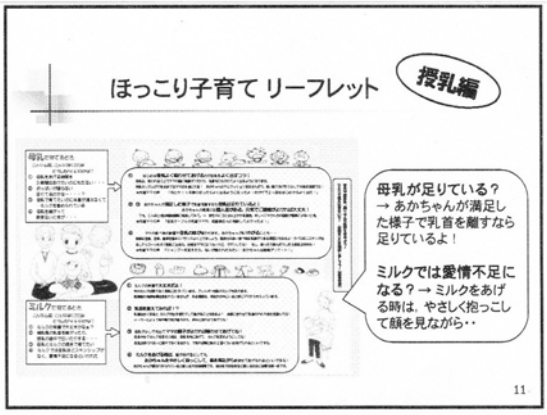
7

ほっこり子育て リーフレット

8

ほっこり子育て リーフレット
なるほど
これでいいんだ
百貨店
授乳室前
リーフレットなら
お父さんも
読んでくれる
9

ほっこり子育て リーフレット
授乳編
こんなところで
情報をゲット
～答えは一つじゃないよ
ひとりで悩まないで～
お母さん同士で
情報交換できる場所
や授乳に関して相談
できる所を紹介
10

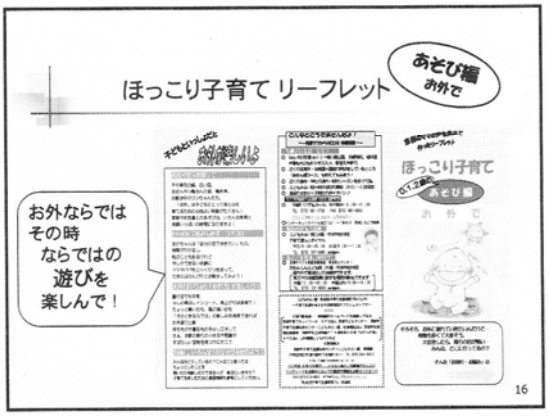

ほっこり子育て リーフレット
授乳編
母乳が足りている？
→ あかちゃんが満足した様子で乳首を離すなら足りているよ！
ミルクでは愛情不足になる？→ ミルクをあげる時は，やさしく抱っこして顔を見ながら‥
11

ほっこり子育て リーフレット
トイレトレーニング編
こんなことも
知って
おいてね
☆ 周りの声を聞きすぎないでね
☆ やり直しもできるよ
ほっこり子育て
トイレトレーニング編
12

ほっこり子育て リーフレット
トイレトレーニング編
ママの
見つけた
うんち，
おしっこ
のサインを紹介
うんち・おしっこのサインって？
うん ち の時
おしっこの時
13

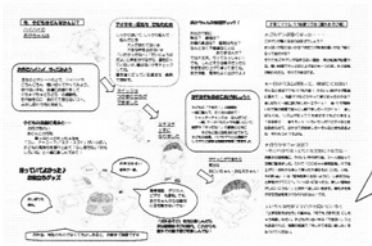
ほっこり子育て リーフレット
イライラしたとき編
自分を
大切にして
心身共に
元気で
おだやかで
いられますよ
うに‥‥
ほっこり子育て
イライラしたとき編
14

ほっこり子育て リーフレット
イライラしたとき編
イライラするのはどんなとき
イライラ するのは どんなとき
イライラするのはどんなとき？
‥‥場面にあわせて情報が得られるところを番号で掲示
裏面の同じ番号のところを見てね
15


ほっこり子育て リーフレット
あそび編
お外で
お外ならではの
その時
ならではの
遊びを
楽しんで！
ほっこり子育て
あそび編
お外で
16

ほっこり子育て リーフレット

あそび編 お外で



上手な遊び方の基本は，何でも遊びにしちゃう発想‥

17

ほっこり子育て リーフレット

あそび編 室内で

楽しい！と思うことが何でも遊びに子どもは遊びで育つ

18

ほっこり子育て リーフレット

あそび編 室内で

おかたづけ大作戦

危ないものチェック

かんたんおもちゃ

19

平成18年度

●リーフレットをもとに，トークショップを開催

テーマ

「トイレトレーニング」
「授乳」
「あそび」
「イライラ」

●「京都発 子育てヒント集」を作成

リーフレットをハングル，英語，中国語，タガログ語に翻訳し1冊にまとめる。

20

5言語で紹介する
京都発 子育てヒント集

21

平成19・20年度

●ワークショップの開催

テーマ

親のニーズから見る子育て支援の方向性
第1回 「産後ママの求めていること」
第2回 「育てにくさを感じている親への子育て支援」
第3回 「多文化家庭への子育て支援」
第4回 「父親が話す子育て・地域」

●京都発 子育てヒント集の分冊

ハングル　英語　中国語　タガログ語

22

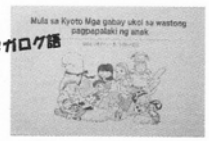
京都発 子育てヒント集 を分冊

ハングル

英語

中国語

タガログ語



23

第1回 「産後ママの求めていること」

実際に活動している方の話を聞き，親のニーズの本質や等身大の姿を知ることから，親子が楽しく共に成長していける支援のあり方について，一緒に考えていきましょう。

と き／10月25日(木) 13:30～16:30
次 第／コーディネーター　津止 正敏 氏（立命館大学教授）
13:30～13:40　開会・説明
13:40～14:30　パネラー報告
14:30～14:50　討議の前に
～ 津止 正敏 氏 ～
14:50～16:00　グループ討議
16:00～16:30　まとめ

24

パネラー

スリンパ

ベビースリングの講座と交流会を開催

布おむつの会

布おむつ育児をより楽しむための活動

産後の女子力向上委員会

産後の女性の身体の回復と健康の増進を
目的とし，リハビリ・セルフケア講座や教室を開催

25

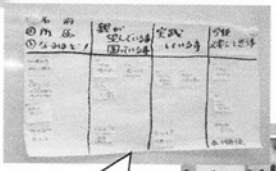
会場の様子

パネラーから

津止教授から

26

グループ討議



参加者の思いを
出して話合う

親が望んでいる事，
困っている事は？
必要だと思う事は？

27

共通認識したこと・結果

- 子育て当事者は，子育て支援者になり得る
- 子育て支援者には，コーディネーターとしての役割を担うことが求められる

28

第2回「育てにくさを感じている親への子育て支援」

2月7日(木) 13:30～16:30

13:30～13:40 開会・説明
13:40～14:40 パネラー報告
アレルギー　双子
発達障がいの子育て経験から
14:40～15:40 グループ討議
15:40～15:50 休憩
15:50～16:10 グループ発表
16:00～16:30 まとめ

29

パネラー

アレルギーネットワーク京都ぴいちゃんねっと

情報提供，食物アレルギーについてと食物アレルギーの子どもを持つ親の思いを知ってもらうための活動

双子の会

多胎児ファミリー交流会　情報交換，遠足などの企画
新聞の発行などの活動

発達に障がいのある子の親御さんから

30

共通認識したこと・結果

子育て当事者

傾聴・受容を経て，主体として自立していく

子育て支援者

思いに寄り添う姿勢　抱え込まない姿勢

地域社会

共感し，受け止めることができる環境作り

31

第3回「多文化家庭への子育て支援」

3月12日(水) 13:30～16:30

13:30～13:40 開会・説明
13:40～14:40 コーディネーター
重野 亜久里 氏
(NPO法人 多文化共生センターきょうと 理事長)
パネラー
日本に来られて生活されている外国籍の子育て経験者
14:40～15:40 グループ討議
15:40～15:50 休憩
15:50～16:10 グループ発表
16:10～16:30 まとめ　津止 正敏 氏 (立命館大学教授)

32

パネルディスカッション

パネラー

3名(ブラジル籍，中国籍の方)

コーディネーター

重野 亜久里　NPO法人多文化共生センター代表

NPO法人多文化共生センター
国籍・言語・文化や性などの違いを認め尊重しあう「多文化共生社会」の実現のための活動を行っている。

33

共通認識したこと・結果

外国籍の方の支援のあり方を考えることは，日本の支援にも通じる

子育て支援者

- 多様な文化や価値観を受け入れて柔軟に対応する姿勢
- 丁寧に話を聞き，伝える

相互理解が大切

34

第4回「父親が話す子育て・地域」

8月20日(水)　14:00 ～ 16:30

パネルディスカッション
コーディネーター　小西浩嗣さん
NPO法人 京都子どもセンター理事
帝塚山大学心理福祉学部非常勤講師

パネラー　こどもみらい館職員
「おとうさんの井戸端会議」
子育てサークルたんぽぽひろば「たんパパ」代表
「実現！パパの学園祭」
夢想幼稚園園長
「おやじあつまれ！昔も今もギャングエイジ」

グループ討議

35

会場の様子

パネラーから

熱心なグループ討議と報告

36

共通認識したこと・結果

父親支援

- 思いを引き出す配慮
- 話せる場所作り
- 参加へのきっかけ作り
- 役割を持ってもらう

37

乳幼児子育て支援研究プロジェクトの考察と今後の課題

1　子育て当事者性の尊重

- 価値観の多様性や個性の尊重
- 文化や環境の違いの尊重
- コミュニケーション力と共感力
- ニーズを酌む力

38

乳幼児子育て支援研究プロジェクトの考察と今後の課題

2　子育て当事者と子育て支援者が共に集う場の創造

- 共感と振り返りから自己肯定感・意欲の向上
- 違う視点からの話を聞く

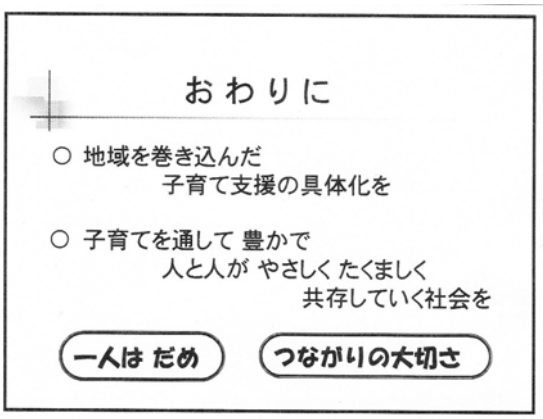
39

乳幼児子育て支援研究プロジェクトの考察と今後の課題

3　地域と結びついた子育て支援の促進

- 子育て当事者の声を届ける
- 子育て当事者のつながりを深め，支えあえる環境作り
- 地域に根ざした子育てネットワークの構築
- 子育てをキーワードに！

40


おわりに
○ 地域を巻き込んだ
子育て支援の具体化を
○ 子育てを通して 豊かで
人と人が やさしく たくましく
共存していく社会を
一人は だめ
つながりの大切さ

【地域と結ばれた事例研究プロジェクト】

１　目的

(1)　子どもと子育て家庭を取り巻く社会情勢

今日，少子長寿化，核家族化，地域コミュニティの希薄化などの進行に伴い，子どもや子育て家庭をめぐる環境が大きく変動してきているなか，「子どもを産むまで乳幼児と触れ合う機会がなかった」親や，「日常的に世間話や子育てについて話をする人が周りにいない」親，「子育てでイライラすることが多い」と感じている親が増加するなど，子育て家庭の孤立感，負担感が増大している状況がみられます。

また，子育てや子どもの将来に対する不安や悩みが，子どもを生み育てることへの喜びや楽しみを上回り，家庭の養育力の低下ともあいまって，児童虐待を増加させる要因ともなっています。

この様な社会情勢の下，地域の子育て力を再生し，社会全体で子育て家庭を支援していくことの重要性が各方面から指摘されています。

(2)　求められる保育園(所)･幼稚園の役割

園(所)は，平成 20 年 3 月に告示された保育所保育指針，幼稚園教育要領において明記されているように，子どもや子育て家庭をめぐる深刻な今日的状況を踏まえて，保育・幼児教育の専門家としての機能・役割を再認識し，人的・物的資源を広く地域の子育て支援のために還元するという使命があります。

また，小・中学校や地域諸団体と協働して，乳幼児段階からの「地域ぐるみの子育て」の機運と取組を高めていくなど，保育内容の改善充実を図りつつ，地域における子育て支援の核としての役割を担うことが強く求められています。

(3)　本プロジェクトの目的

「地域と結ばれた事例研究プロジェクト」においては，こうした認識のもと，「保育園(所)・幼稚園が地域の核となり，全ての乳幼児の育ちと子育てを社会全体で支援していくことの重要性を発信する」ことを目的として取組を進めてきました。

園(所)が，地域と連携している実態を把握するためのアンケート調査と，地域の教育関係機関や福祉関係機関と連携した保育事例や地域の文化・行事に触れる保育実践事例等の視察調査を通して，地域と結びついた保育実践が，子どもの育ちや地域の子育て支援に及ぼす効果等についての研究を行ってきました。

２　これまでの取組の概要

(1)　17 年度の取組

①　第 1 次アンケート調査の実施

園(所)と小・中学校や地域の諸団体等との関わりを量的に把握するためのアン

ンート調査を実施し，その結果を「平成 17 年度京都市子育てサポート推進チーム事業研究報告書―保幼小連携推進の在り方研究」に取りまとめて発信しました。

調査対象	京都市内の国公私立保育園(所)・幼稚園
調査項目	① 子育て支援の取組 ② 地域関係機関等との連携 ③ ボランティアの導入 ④ 地域や学校との今後の連携の在り方についての提言・意見
回 答 率	80%（373 園(所)中 299 園(所)より回答）

② 視 察 調 査

集計結果に基づき小学校区単位で効果的な取組を進めている事例の視察調査を実施しました。

③ 17 年度のアンケート調査，視察調査からの考察

ア 未就園児親子対象の子育て支援の取組状況

・ 90%以上の園(所)で子育て相談，園庭及びプール開放，子育て講座や井戸端会議形式の子育て交流会等の取組が実施されています。

イ 地域の関係機関等との連携状況

・ 園(所)の連携機関としては，小学校が，他の機関と比べて飛びぬけて多く，園(所)が，小学校との連携の重要性について大きな関心を寄せている実態が伺えます。

・ 小学校との連携内容については，「総合的な学習の時間」を活用しながら通常の保育・教育への参加・協力などが多く行われていました。また，中学校では「生き方探求チャレンジ体験」の取組，そして大学・短大とは「保育・教育実習」や「ボランティア」の取組が各園(所)で行われています。

・ 小学校から園(所)への参観は多くありますが，保育園(所)と幼稚園の相互参観は 8～9%にとどまっています。

・ ほとんどの園(所)で様々な連携機関に園(所)の行事や取組に参加や協力を求めています。

・ また，地域の行事やイベント等に参加し，子どもたちの成長を地域の人々に見守ってもらうことに，積極的に取り組んでいる園(所)が多くありました。

(3) 18 年度の取組

① 第 2 次アンケート調査の実施（内容の把握）

園(所)が地域や学校と連携している内容を，具体的に把握するためのアンケー

ト調査を実施し，また，保幼小連携についての視察調査を行い，その結果も含めて「平成 18 年度京都市子育てサポート推進チーム事業研究報告書―別冊・保幼小連携推進の在り方研究」として取りまとめ，発信しました。

調査対象	京都市内の国公私立保育園(所)・幼稚園
調査項目	① 子育て支援の取組 ② 地域関係機関等との連携 ③ 地域のイベントや行事への参加 ④ その他
回答事例	59 園(所)　71 の事例

② 視 察 調 査

地域との連携を進める第一歩として，まずは地域の小学校との連携が最も取り組みやすく，また多様な取組が進められていることから，保幼小連携についての考察を行いました。また小学校側の実態を把握するため，保幼小中連携を推進している京都市教育委員会地域教育専門主事室(現学校指導課)への聞き取り調査を実施しました。

③ 18 年度のアンケート調査，視察調査からの考察

ア 保幼小連携への期待

- 小学校からは，「5 歳児が緊張を緩和して入学を楽しみにするとともに，小学生になることへの自覚を高めるように」という願いと同時に，5 歳児の姿を観察して「4 月以降の小学校での生活に円滑に入っていけるよう，指導上の参考にしたい」との期待があります。
- 園(所)側としては，「5 歳児が，少しでもストレスを感じないで入学を迎えて欲しい」との願いがあります。
- 保育者と教師が連携の重要性を意識し実践をすることで，子ども同士の交流が深まり，園(所)，学校だけでなく連携の輪が保護者にも地域にも広がっていくことが期待されています。

イ 保幼小連携における今後の課題

- 教育の本質は保育園(所)・幼稚園も小学校も同じです。思春期までの子どもの育ちを見通し，温かく見守っていくために，保育者・教師が一体となって定期的な相互参観や会議を積極的に開催するなどして，継続的な連携システムを構築することが大切であります。
- 乳幼児期における子どもの育ちに応じた生活と遊び等の保育内容，また，

小学校での子どもの様子や指導法については，保育者・教師がまず互いに参観し合うことで子どもの姿や指導法の理解が深まると考えます。

・　定期的な連携会議を持ち，互いの保育・教育内容を伝え合う機会を持つことが大切です。

園(所)からは，育ちの土台となる 0 歳から 6 歳までの乳幼児期に，一人一人を大切に育むための保育の視点を明確にして，小学校に向けて丁寧に発信することが大切です。また，小学校は，入学後の教育目標と子どもの育ちの様子を伝えることで，両者が「育ちの連続性」に基づく課題を共有して相互理解を深めていくことが重要です。

3　平成 19～20 年度の取組

小学校以外との連携事例について研究していくため，平成 18 年度のアンケートに基づき連携事例を次の 3 つに分類し，各分類の代表的な事例，特徴的な事例と，企画推進会議研究・研修部会より紹介いただいた事例等の中から，10 ヶ園(所)への視察調査(聞き取りも含む)を行いました。

連携分類		視察園(所)の取組内容	保・幼別
①	地域の福祉施設との連携事例	障害のある人と交流	A保育園(所)
		高齢者と交流	B幼稚園
		人権の花運動に参加	C保育園(所)
②	地域の商店街，地域住民等との連携事例	商店街の人と交流	D幼稚園
		花売り屋さんごっこで交流	E幼稚園
		地域の七夕祭に参加	F幼稚園
③	地域の関係機関との連携事例	高齢者とクリスマス会	G保育園(所)
		地域の人ともちつき大会	H幼稚園
		刑務所の運動会に参加	I保育園(所)
		地域のフェスティバルに参加	J保育園(所)

(次ページ以降に視察事例の詳細を掲載)

地域の福祉施設との連携事例 １

A保育園(所)の取組 ～ 障害のある人と交流 ～

１ 取組の目的と経過

(1) 目　　的

・ 障害のある人との交流を通し，障害者理解を深める。

・ 地域の中で子ども自身が，自分のできることを考える機会にする。

(2) **連携機関**　重度障害者通所施設

(3) **取組内容**　おたのしみ会に参加し，施設利用者と一緒にゲームをしたり歌を披露したりする。

(4) **取組の経過・背景**　5 年前，保育園(所)に隣接して施設が建てられたときに交流が始まった。施設側も交流を快く受け止め継続した取組となり，現在月 2 回，互いの施設を訪問し合う交流が定例化している。

日常の交流では特別な内容を計画するのではなく，自然体で触れ合う交流を大事にしている。また車椅子介助の仕方を教えてもらい，車椅子の試乗体験も行った。

様々な行事を通しての交流も積み重ねてきており，子どもたちは交流をとても楽しみにしている。

２ おたのしみ会の様子

(1) **日　　時**　平成 20 年 1 月 11 日（金）午前 11：00～12：00

(2) **場　　所**　重度障害者通所施設ホール

(3) **参 加 者**　施設利用者と職員約 30 名
知的障害者の社会活動支援団体約 10 名
児童館幼児クラブ利用親子 15 組・職員 3 名
5 歳児 21 名・職員 3 名

(4) **取組状況**

・ 知的障害者の社会活動支援団体の紙芝居公演を観る。子どもたちは呼び掛けに大きな声で答えながら楽しそうに見ていた。

・ 子どもたちは，歌「雪」「一月一日」を元気な声で歌った。子どもたちの出演を大変喜んで，積極的に関わってこられる利用者もいた。

・ 全員でゲームを楽しむ。利用者は寝たきりの方もおられて，職員が介助しながらゲームを進めていった。子どもたちは利用者を気遣いながら，構えたりすることもなく自然体での交流を深めていた。

３　連携の成果

①　保育計画の中での位置付けを明確化

幼児期に障害のある人々と触れ合う機会を多く持つことは意義があると考え，「地域の人々との交流を通して社会性を身に付ける」という園(所)の保育目標の一環として，年間の保育計画の中に位置付けて行っている取組である。相手を気遣う心や，「どうぞ」という気持ちを培っていくことを大切にし，障害のある人々のためにできることを考える機会となるように取り組んでいる。

②　統合保育に生かす

園(所)には，障害のある子どもたちが在籍しており，この取組が様々な面で統合保育に生かされている。

③　日常の自然な交流の重視

交流を積み重ねるなかで日常的に挨拶し合ったり，手を振ったりなど，自然体で交流し合う姿が見られる。園(所)に来ていただくことにより，子どもたちにとって良い影響のある交流となっている。

④　保護者からの高い評価

家庭で子どもたちが交流会の様子を伝えたり，車椅子介助の仕方を話したりしている。親子ともに障害のある人への理解を深められると保護者からの評価も高い。

４　連携を進めていくに当たっての今後の視点

①　今後も継続して定期的に交流をしていく。

②　次年度への引継ぎを丁寧に行っていく。

園(所)長の一言

地域施設等との交流を通じ，同世代･異世代の子どもや，障害のある方，老人の方等，人との関わりの中で，互いに影響し合うことの素晴らしさを感じています。交流の日程調整が難しいこともありますが，定期的に続けることが大切であり，正に，「継続は力なり」と実感しております。交流を通じて，「人との関わりやつながりの中で私は生きているんだ」ということを知り，自分自身や他の人を大事にできる豊かな心を培って欲しいと願っています。

地域の福祉施設との連携事例 2

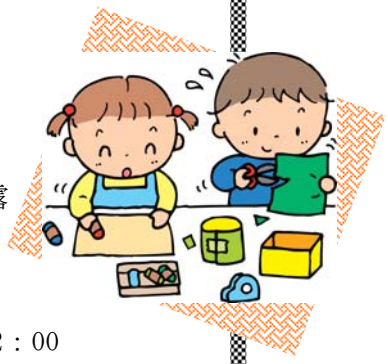
B幼稚園の取組　　～ 高齢者と交流 ～

１　取組の目的と経過

(1)　目　　的

・　高齢者を大切にする気持ちを養う。

・　人への思いやりを育む。



(2)　**連携機関**　　介護老人保健施設

(3)　**取組内容**　　高齢者の施設を訪問し，歌や合奏を披露したりプレゼント交換をして交流する。

２　高齢者との交流会の様子

(1)　**日　　時**　　平成 20 年 3 月 6 日(木)　午後 1：00～2：00

(2)　**場　　所**　　介護老人保健施設

(3)　**参 加 者**　　施設利用者約 50 名・職員 10 名

5 歳児 52 名・職員 5 名

(4)　**取組状況**

【当日まで】

・　子どもたちは，保育の中で高齢者にプレゼントする小物入れを牛乳パックで製作した。工夫しながらそれぞれ個性豊かな作品ができあがり，プレゼントする日を心待ちにしていた。

【当日】

・　当日，子どもたちは，一生懸命心をこめて作った小物入れと楽器を持って施設を訪問した。

・　ホールの舞台に上がり，子どもたちはやや緊張気味に日ごろ歌っている歌「ともだちになるために」と合奏「おもちゃのチャチャチャ」を披露した。

・　プレゼント交換では，子どもたちからは自分で作った牛乳パックの小物入れを，利用者からは布製の小袋を，プレゼントし合った。利用者はとても喜ばれ，涙ぐんでおられる人もいた。

・　日常的に高齢者と関わりのある子どもは，自然体で利用者と親しくしていた。また，普段高齢者に接する機会のない子どもは戸惑いを見せながらも，心が通い合う優しい触れ合いを喜んでいた。

３　連携の成果

① 子どもたちが地域のことや近隣の施設のことを知り，理解を深める機会となっている。

② 高齢者と子どもたちの双方に心に残る交流となっている。

４　連携を進めるに当たっての今後の視点

①　地域への発信

園の保育方針や子ども，保護者の様子等を，地域に知ってもらえるような，園からの発信が大切である。

②　交流内容の充実

連携機関との事前調整を密にして，高齢者から昔遊び等を教えてもらうなど，更に充実した内容にして，継続した取組にしていきたい。

園長の一言

園児が地域に出掛けたり，地域の方の話を聞いたり，園を地域の方々に開放したりすることにより，交流が深まってきています。そのとき，地域の方々に園の保育方針や園児・保護者の様子などを十分知ってもらえるような配慮が必要です。また，園児には，自宅付近のことしか知らない子どもも多いので，地域を知る良い機会ととらえ，地域にはこんな施設があり，こんな人たちがおられるのだということを，知らせていくことが大事だと思っています。

地域の福祉施設との連携事例 ３

C保育園(所)の取組　～ 人権の花運動に参加 ～

１　取組の目的と経過

(1)　目　　的

・　「人権の花運動」の取組に参加することで人とのつながりの大切さを知る。

・　地域の福祉施設のことを知り利用者と交流する。

(2)　**連携機関**　　京都地方法務局(以下「法務局」)　デイサービスセンター

(3)　**取組内容**　　デイサービスセンター利用高齢者との交流会で，「人権の花運動」で育てた水仙の花を利用者にプレゼントしたり一緒に歌ったりして交流する。

(4)　**取組の経過･背景**　　法務局が継続して行っている「人権の花運動」の取組への参加を申し出た。春，法務局から水仙の球根，土，プランター等を頂き，球根の植え付けや観察等の活動に取り組む。

２　デイサービスセンターでの交流会の様子

(1)　**日　　時**　　平成 20 年 3 月 5 日(水)　午後 2：00～

(2)　**場　　所**　　デイサービスセンター

(3)　**参 加 者**　　施設利用者 27 名・職員数名

一時保育利用児 1 名・職員 3 名　　5 歳児 22 名

(4)　**取組状況**

【当日まで】

・　子どもたちは，法務局から頂いた水仙の球根をプランターに植えたときからこまめに水遣りをし，観察をしながら成長を楽しみにして大切に育ててきた。栽培活動の体験を通して植物は水をあげないと枯れてしまうことや，太陽の光が大切なことをよく知っている。

・　芽が出たのを見つけたときや，つぼみができ花が初めて咲いたときにはとても喜び，次にはどのつぼみが開くかと友だち同士おしゃべりを弾ませていた。

・　花が次々咲いてくると，部屋の予定表を見てプレゼントする日を心待ちにしていた。

【当日】

・　利用者に拍手で迎えられ，向かい合って並んだ。「私たちが育てた花

です。飾ってください。」とのメッセージを伝え，やや緊張気味に二人一組で水仙の花の鉢を利用者に手渡した。「ありがとう。」と声を掛けられ，子どもたちは少し照れくさそうな表情をしていた。

・　子どもたちが「おひなさま」の歌を合唱する。顔をほころばせて聞いておられた利用者から自然と手拍子が起こり，和やかな雰囲気に包まれた。利用者の音楽療法の取組にも参加し，一緒に楽しんだ。

・　交流会の終わりに，子どもたちが「いつまでも元気でいてください。」と挨拶をすると，利用者から「また来てね。」と声を掛けられ折り紙の花をプレゼントされた。互いに手を差し出し合い握手をして別れた。

３　連携の成果

①　近隣の施設についての理解を深める

子どもたちは，高齢者との交流会で，園(所)の近くには高齢者が利用する施設があり，そこでは高齢者の人々が楽しみながら様々な取組をしているということを知ることができた。

②　子どもの社会性，自信，意欲を育むことにつながっている

子どもたちは，自分たちが時間をかけて大切に育てた花を誰かにプレゼントするという経験は初めてだった。このような経験が，子どもたちの社会性や自信，意欲等を育むことにつながっていると考える。

４　連携を進めるに当たっての今後の視点

①　保育の計画での位置付けと継続化

地域との交流を保育の中で継続的に取り組む。

②　地域への積極的な発信

地域の中で保育園(所)があって良かったと思ってもらえるように，園(所)からの発信を広げ，地域の連携を一層推進していく。

園(所)長の一言

地域との交流は，今やっていることを土台に，そのねらいを明らかにし，全職員の共通認識として続けていき，良い面を他の交流にも広げていくことが大切だと思っています。他園(所)の取組を報告会で聞くなかからは，様々な地域性を知り，もっと気軽にいろいろなところと交流できるということが，認識できました。今の子どもたちも保護者も，人との関係作りが難しくなっているので，いろんな人と触れ合い交流を持つことは，子どもの成長にとっても，大切であると思います。

地域の商店街，地域住民との連携事例 1

D幼稚園の取組　　～ 商店街の人と交流 ～

１　取組の目的と経過

(1)　目　　的

・　地域の人々と親しみ触れ合う。

・　材料の買物に行きクッキー作りへの期待を高める。

(2)　**連携機関**　　近隣の商店街

(3)　**取組内容**　　クッキー作りに必要な材料の買物に近隣の商店街に出掛ける。

(4)　**取組の経過・背景**　　幼稚園の近隣に昔からある商店街は，日頃から子どもたちが園の行き帰りによく通るところである。保育の中では散歩の時に立ち寄ったり，買物に行ったり，絵を描きに行ったりとなじみのある商店街である。最近は園での行事や催し等のポスターを貼らせてもらい，参加を誘い交流を深めている。

２　商店街での交流の様子

(1)　**日　　時**　　平成 19 年 11 月 8 日（水）午前 10：00～10：30

(2)　**場　　所**　　近隣の商店街

(3)　**参 加 者**　　商店街の人々　　4 歳児 27 名・職員

(4)　**取組状況**

【当日まで】

・　年中組のクラスで，保育の中でクッキー作りをすることになった。クッキングに必要なものを相談し，5 つのグループに分れて材料(卵・バター・小麦粉・砂糖・牛乳）の買物を分担した。

・　お店の人やお客さんに迷惑にならないように，という約束も皆で決めた。

【当日】

・　商店街に出掛け，グループごとにどの店で買おうかと商店街を行ったり来たりして，「買物か？何作るの？」と声を掛けてもらったりしていた。

・　かしわやさんに，「小さい方の箱の牛乳ありますか？」と聞くと，「牛乳はないな。あのお店で聞いてごらん。」と教えてもらったり…。

・　どのグループも代金を渡して，買った物を使い袋に入れて大事に持って帰った。卵を買ったグループは「割れんようにね。」と言ってもらって，「卵は割れたらアカンからな。重要な役なんや。」と嬉そう。翌日，卵を割ったり泡立てたり，一つ一つの活動を楽しんでクッキー作りをした。

３　連携の成果

①　温かい人との関わりの体験

近隣の商店街に出掛け，グループごとに主体的に買物をするという経験の中で，お店の人と言葉のやり取りをしたり，声を掛けてもらったりして，いつものスーパー等での買物とは違う，人との交流の温かさを感じることができた。

②　地域の人々と親近感を増す機会

商店街がすいている時間帯でもあったので，お店の人もゆったりと関わってくださった。商店街は，子どもたちが行ったり来たりするのに適当な広さで，子どもにとっては嬉しい経験となった。交流の際にはお店や一般の人の迷惑にならないよう，十分な配慮が必要である。

４　連携を進めるに当たっての今後の視点

①　連携を深める。

今後も商店街と様々な形で交流を進めていくことにより，子どもたちの人との関わりを広げ，園と地域との連携を深めていく。日常的な交流を大切にし，日頃から挨拶をするなどきめ細かなつながりを大切にすることで，更に連携が深まっていくと考える。

②　保護者への発信

日々のお便りとして発行している「ちょこっと通信」等で，その日の保育を適宜知らせるなど，保護者へのきめ細かな発信が大切である。そのような積み重ねが保育内容への理解を深めてもらうことにつながっていく。

園長の一言

子どもたちが，様々な人と触れ合うなかで，言葉や思いを掛けてもらったり，共に過ごしたり，一緒に遊んだり…そんな経験が，子どもたちの人との関わりを広げ，人と関わる力の育ち・心の育ちにつながっていきます。教師自身も，地域に関心を持ち，関わりを広げて親しんでいくなかで，地域との連携を，保育に取り入れていく工夫をしていきたいと思っています。

地域の商店街，地域住民との連携事例 2

E幼稚園の取組　～花売り屋さんごっこで交流 ～

１　取組の目的と経過

(1)　目　　的

・　花売り屋さんごっこを通じて地域の人と触れ合う。

(2)　連携機関　　老人会　女性会　作業所　小学校　近隣の人々

(3)　取組内容　　近隣の人々に花の苗をプレゼントする花売り屋さんごっこに参加してもらって交流する。

(4)　取組の経過･背景

近隣の人々に直接園に来ていただき，親近感を増す唯一の機会として大切にし，年間の教育計画に位置付け継続して取り組んでいる。

２　花売り屋さんごっこの様子

(1)　日　　時　　平成 19 年 6 月 19 日(火)午前 10：00～11：00

(2)　場　　所　　幼稚園園庭

(3)　参 加 者　　老人会　女性会　共同作業所　近隣住民
小学校育成学級児童等約 30 名
5 歳児 29 名

(4)　取組状況

【当日まで】

・　5 月中旬に苗床を作り，数種類の花や野菜の種蒔きをする。水遣りをしながら，芽が出たときの発見や驚き，苗の形や葉形の違い等に気付き，成長を楽しむ。

・　木工で立て札を作り，花の名前やどんな花が咲くのか創造した絵を描き，苗床に立てる。

・　6 月中旬，苗を 1 本ずつ苗床から黒ポリに植え替える。

・　たくさんの人に来ていただけるようにと願って，花売り屋さんの案内チラシやポスター看板等を友だちと一緒に作る。

・　子どもたち自身で，連携機関，近所(花屋・酒屋など)に出向き，案内チラシを配り参加の呼び掛けをして回る。

【当日】

・　園庭で花売り屋さんを開店する。「いらっしゃい。」「こっちはひまわりですよ。」などと呼び込みをしたり，お客さんが希望した花を袋に入れて渡したりする。

・　毎年来ていただいている人からは，「去年きれいな花が咲いたよ。」

「枝豆たくさん採れておいしかったよ。」などの感想を頂いた。
「これは何の花？」と聞かれたり，「ありがとう。」と感謝されたりして子どもたちはお客さんとの関わりを楽しむことができた。

３　連携の成果

①　子どもたちの意欲や自信を育む

地域の人々との温かい交流の体験が，子どもたちの意欲や自信を育むことにつながっている。

②　3，4 歳児の成長の目標になっている

3，4 歳児は 5 歳児の取組を見ることで，大きくなることへの憧れと見通しを持ち，遊びの中でお店屋さんごっこをする姿が見られる。

４　連携を進めるに当たっての今後の視点

①　交流が深まるための内容の充実

このような機会をとらえて，地域の人々と子どもたちとの交流が更に深まるように，親しく関わり合う場作りの工夫等，内容を充実させる。

②　保護者に参画の呼び掛け

保護者の理解を得るために，取組内容を丁寧に伝え，保護者にも参画してもらえるように働き掛ける。例えば，苗を植え替えるときには栽培活動に関心のある保護者に参加を呼び掛けていく。

③　連携機関の協力の呼び掛け

案内チラシの配布や，参加呼び掛け等について連携機関からの協力が更に得られるように働き掛けていく。

園長の一言

私たちの幼稚園は，地域とともに歩み，地域に大変お世話になっている幼稚園です。この取組では，花売り屋さんごっこの中で，子どもたちが育てた苗を，地域の方にもらっていただいています。

植物を育てることや人と関わることは，面倒なことや緊張することがたくさんあります。５月に種蒔きをして，６月に花売り屋さんごっこをするまで，植物の成長とともに歩む取組を終え，子どもたちは，達成感を味わうことができました。そして，少し頑張って経験したことを通して，心も一回り大きく成長しました。

地域の商店街，地域住民との連携事例 3

F幼稚園の取組　～ 地域の七夕祭に参加 ～

１　取組の目的と経過

(1) 目　　的

・　伝統行事に参加し地域の存在を知る

・　七夕飾りの祈祷をしてもらい皆の願いを届ける。

(2) **連携機関**　　商店街　神社　地域住民

(3) **取組内容**　　幼稚園の近くを流れる川の河川敷にて，七夕の笹飾りの奉納と笹焼きに親子で参加し地域の人々と交流する。

２　七夕祭の様子

(1) **日　　時**　　平成 20 年 7 月 8 日（火）午後 2：30～3：10

(2) **場　　所**　　河川敷

(3) **参 加 者**　　地域住民約 20 名　　園児親子 80 組・職員 5 名

(4) **取組状況**

【当日まで】

・　地元の商店街から園用の大笹を数本と，短冊を頂く。園で子どもたちは思い思いの絵を描いたり，願い事を書いたり，折り紙等で笹飾りを作ったりする。

・　商店街では観光客にも短冊に願い事を書いてもらい，地域のアピールをしている。

【当日】

・　降園後，親子で河川敷に集まってくる。

・　園長が，「皆の願い事が叶うように，きれいな元気な声でお星様に届くように歌ってください。地域の皆さんに感謝の気持ちを忘れないようにしましょう。」と，子どもたちに呼び掛ける。

　子どもたちは，「七夕」の歌を落ち着いた声で歌った。

・　神社宮司さんの祈祷が行われる。祈祷の前に宮司さんが「彦星と織姫にお供えをします。うり，カボチャ，そら豆は七夕様の好物なので必ずお供えします。それと糸，布もお供えします。」とお供えの説明をしてくださる。子どもたちは熱心に聞いていた。

・　子どもたちの手で笹を奉納する。

・　奉納された笹の山に火が入る。もくもくと上がる煙が風下にいる子どもたちの方へ流れ，ポンポンと笹が弾ける音がして，子どもたちの

大歓声が上がる。煙くて集団がばらばらになるが数人の子どもたちは，ハンカチで口を押さえながら笹が燃え尽きるまでじっと見つめていた。

3　連携の成果

①　保育計画の中での位置付けを明確にしている

地域との連携は大切であると認識しており，地元の行事にはできる限り協力をしている。毎年参加する親子が増え，恒例事業として定着してきている。

②　伝統行事の参加体験を通して地域の存在を知る

親子で地域の伝統行事に参加する体験を通して，子どもなりに普段なかなか触れ合う機会が少ない地域の人々と身近に交流し，「地域」の存在を知ることができる。

4　連携を進めるに当たっての今後の視点

地域との交流事業は単発的なもので終わりやすい。お互いの存在を自然に感じ合うためにも，肩の力を抜いて自然体の交流事業を様々な角度から，また，継続して取り組むことが大切である。

園長の一言

～　星に願いを　～

永久の昔から大切に受け継がれ続けている「七夕」という行事を，子どもたちが，幼稚園の中で仲間や先生と一緒に経験することには大きな意味があります。また，園内にとどまらず，地域の皆さんとともに，伝統行事を経験できることは，ひとときの共有だけではなく，目には見えませんが，地域における様々なつながりを後押ししてくれる貴重な機会であると感じています。このような取組が，これからも，七夕のように大切に受け継がれていくことを願います。

地域の関係機関との連携事例 1

G保育園(所)の取組 ～ 高齢者とクリスマス会 ～

１ 取組の目的と経過

(1) 目　　的

・ 在宅高齢者との親睦を深めることを通し，高齢者をいたわり尊ぶ気持ちを培う。

(2) 連携機関　　福祉委員会　女性会
社会福祉協議会　小学校

(3) 取組内容　　クリスマス会で在宅高齢者に手作りのプレゼントを贈ったり歌や合奏を披露し，一緒にケーキを食べたりして交流する。

２ クリスマス会の様子

(1) 日　　時　　平成 19 年 12 月 19 日（水）午後 1：00～2：30

(2) 場　　所　　小学校ふれあいサロン

(3) 参 加 者　　在宅高齢者約 10 名　　世話役の人々
小学生（育成学級児童，4～6 年生グリーンクラブの児童）
5 歳児 20 名・職員 3 名

(4) 取組状況

・ 小学生の歌や合奏を聞く。園児からは，「あわてんぼうのサンタクロース」の歌を披露する。参加者は目を細め手拍子をして見ておられた。

・ 参加者と子どもたちが交互に座り，一緒にクリスマスケーキを食べる。初対面なので，最初は緊張していた子どもたちだが，一緒にケーキを食べていると次第に親しく関わることができた。

・ 参加者たちは隣り合った子どもたちに話し掛けたり抱っこしたりしてとても嬉しそうであった。子どもたちもリラックスして和やかな雰囲気で会話が弾んだ。

・ 子どもたちから手作りのクリスマスリースをプレゼントすると，参加者たちはリースに見入ったり頭に乗せてみたりして喜んでおられた。

・ 帰りには手を振って別れた。子どもたちは行くときはやや緊張気味であったが，帰り道は軽やかで楽しそうだった。

３　連携の成果

子どもたちは，参加者と会話したり，写真を撮ったりして「楽しかった。」と言っていた。祖父母と一緒に暮らしている子どもが少なく，また自分の祖父母よりも高齢な人々との交流なので，年齢を聞いて驚いたりして良い経験になった。このように子どもたちの社会性を育む交流を保育の中で大切にしている。

４　連携を進めるに当たっての今後の視点

①　継続化・発展化

今後も交流は継続し，回数を増やしていく。地域に住んでいる子どもが少なく，高齢者は子どもたちとの交流をとても楽しみにしておられるので，もっと交流の回数を増やしてほしいとの声も上がっている。

②　様々な機関との連携の広がり

地域の様々な関係機関とコンタクトを取り合うことが大切である。

③　地域への発信

地域子育て支援ステーションとして地域の子育て支援の核となり様々な事業を進めていく。広報，周知が難しい現状であるが，情報発信を進める。

④　園内交流での安全確保に留意する

高齢者を招いて，昔遊びを教えていただく集いを取り組んだこともあるが，高齢者の園内移動，行き帰り途上の安全確保が不安であった。十分な安全対策が必要である。

園(所)長の一言

地域のお年寄りの方々と触れ合うことは，地域の文化に出会うことであり，縦のつながりが築けていけます。また，子どもたち自身も縦年齢の未来像を，描いていくことができます。保育園だけではできるものではないので，地域の関係機関と連携し，交流の場を作ることが大切で，そこから地域での活動が広がっていくと思います。

地域の関係機関との連携事例 2

H幼稚園の取組 ～ 地域の人ともちつき大会 ～

１ 取組の目的と経過

(1) 目 的

・ 地域の人と交流する。

・ 伝統行事を体験する。

(2) **連携機関** PTA の OB 現 PTA
地域有志（消防団・体育振興会）

(3) **取組内容** もちつき大会に参加し，保護者，地域の人とともに伝統行事を楽しみ，皆で一緒に餅を食べる。

(4) **取組の経過･背景** 地域の人や PTA，園との連携の積み重ねにより継続した取組となっている。何代も前の PTA 役員が参加されるなど，伝統的に根強い結び付きがある。

２ もちつき大会の様子

(1) **日 時** 平成 20 年 1 月 17 日（木）午前 9：00～12：00

(2) **場 所** 幼稚園園庭および遊戯室

(3) **参 加 者** PTA 役員 OB 現 PTA 役員 中学校校長他 約 30 名
園児 97 名・職員約 10 名

(4) **取組状況**

【当日まで】

・ 前日より子どもたちは餅米を洗うなど準備に参加し，もちつきへの期待を高めていた。

【当日】

・ 園庭に臼 2 台，調理台，ガス台などを設置し，蒸篭で餅米を蒸す。遊戯室では餅を丸めるコーナー，食べるコーナー，餅箱・食材を置く調理台コーナー等を設置する。

・ 順番に一人ずつ杵を持ってついていく。餅をつく前に蒸しあがった餅米を一口食べる体験もする。

・ つきあがった餅が運ばれて，子どもと保護者が次々と丸めていく。大人たちがてきぱきと段取りよく動いているので，スケジュール通りにスムーズに進行していった。

・ つきたての餅を，早速皆で会話を弾ませながらにぎやかに食べる。

・　毎年取り組んでいる行事なので，参加者が余裕を持って楽しむことができている。子どもたちも落ち着いて楽しみながら参加していた。

3　連携の成果

①　伝統行事の体験

家庭で餅をつく習慣が殆どなくなった今，昔ながらの杵で餅をついたり，丸めたりする体験ができるのは貴重なことである。保護者も杵で餅をついたり臼とりをした経験がない人が殆どである。

②　地域の人々との交流の深まり

地域の人々の協力なしではできない行事である。子どもたちの喜ぶ姿を自分の喜びとしていることが伝わってくる。子どもたちは地域の中でたくさんの人々に温かく見守られていることを知る機会となっている。

4　連携を進めるに当たっての今後の視点

①　次世代への引継ぎ

参加者が次第に高齢になっていかれるので，次世代へ引き継いでいけるように，例えば，「おやじの会」を活性化していくなどPTAを育てていくことが必要である。

より多くの人に参加してもらえるように輪を広げていくため，地域とのつながりを更に深めていく。

②　人とのつながりの継続化と広がり

地域の参加者にひらがな表記の名札をつけてもらい，保護者だけでなく子どもたちにも参加者の名前が分かるようにする。園の外で出会ったときに子どもたちから声を掛け挨拶ができるようにしていく。

園長の一言

交流は，子どもたちだけのために行うものではなく，相手にとっても価値のあるものであることが大事だと考え，互いの心が開き合い受け入れられるような関係作りを心掛けながら進めています。地域の方は，子どもたちが生き生きと伸びやかに遊ぶ姿に，目を細めたり，笑顔で話し掛けたりしてくださいます。

園の活動や園内の様子を知らせ，園を身近に感じていただき，園児を温かく見守る輪を浸透させてくださることを願っています。

地域の関係機関との連携事例 3

保育園(所)の取組 ～ 刑務所の運動会に参加 ～

１ 取組の目的と経過

(1) 目　　的

・ 受刑者の社会復帰に対する精神的支援の一環として慰問活動を行う。

(2) 連携機関　　刑務所

(3) 取組内容　　刑務所の運動会に参加しパレードや組体操を披露する。

(4) 取組の経過・背景　　保育園(所)の近隣にある刑務所への慰問は，30 年来継続している取組である。保護者の理解を得るために説明を行い，また施設慰問後の子どもたちの様子や受刑者の感想を丁寧に伝えるなどの積み重ねをすることで理解を得，園(所)の恒例行事となっている。

２ 刑務所運動会参加の様子

(1) 日　　時　　平成 19 年 10 月 4 日（木）
午前 10：30～10：50　午後 1：30～2：00

(2) 場　　所　　刑務所グランド

(3) 参 加 者　　刑務所関係者約 1000 名
5 歳児 44 名・4 歳児 55 名・職員 10 名

(4) 取組状況

【当日まで】

・ 保育園(所)の運動会が終わったあと，子どもたちはこの交流会において，運動会で行った種目を披露することを心待ちにしていた。

【当日】

・ 子どもたちは緊張の色もなく晴れ晴れとした様子で歩いて出掛けるが，建物の外観は見たことがあるものの，所内に入る時は初めてなので，やや緊張している様子であった。

・ 子どもたちは，法被姿で引き締まった表情で演技を披露する。「頑張れ。」という声援が上がる。形が決まるごとに地割れのような拍手が起こり，子どもたちは，自園(所)の運動会とは一味違う満足感や達成感，喜びを感じている様子であった。

・　園に帰って，園長から「皆よく頑張ったなあ。おにいちゃんおねえちゃんになったみたいや。」と，ほめてもらって子どもたちは誇らしげであった。子どもたちの心に強く残る体験であったようで，「いっぱいありがとうって言ってもらった。」「皆いい人やった。」と口々に話していた。

３　連携の成果

①　心の交流体験

受刑者の様子や行動から感じ取る，心の交流であるこのような体験を積み重ねることが子どもたちの自尊感情を高めていくことにつながると考える。

②　継続した交流によるつながり

きめ細かく事前打ち合わせを行って訪問することで，30 年来の継続した取組となっている。今後も継続して取り組んでいく。

③　保護者の理解，支え

保護者からは，最初のころは危惧する声も上がったが，事前，事後に子どもの様子も交えて丁寧に伝えていくことにより，理解を得るようになってきた。また，刑務所から送られてきた受刑者の感想を園だよりで伝えたり，子どもたちが帰宅して感想を話すことで保護者の理解を一層深められた。今では，恒例行事として温かく見守り激励の言葉を頂くようになっている。

４　連携を進めるに当たっての今後の視点

①　早期の日程調整

運動会シーズンでもあるので早めに日程調整して子どもたちに負担をかけないように配慮する。

②　地域への発信が大切

交流内容を発信する方法を考えていく。

園(所)長の一言

慰問を続けて久しくなりますが，子どもたちは，いつの時代も偏見を持たずに取り組んでくれます。「誰にでも間違いがあり，その事を反省して頑張っている人がいます。皆は，その人たちに元気をあげに行きます。元気をもらった人たちは，もう間違いをおこさないぞ！という強い気持ちになります。」という話とともに，彼ら（受刑者）の声援と拍手の中，「家族と同じように応援をしてくれる人たち，特別な人ではない。」と理屈でなく，心に留めてくれることを期待しています。

地域の関係機関との連携事例 4

J保育園(所)の取組～地域のフェスティバルに参加～

１　取組の目的と経過

(1)　目　　的

・　地域の様々な人々と交流する。
・　文化的な取組に触れたり参加したりする。
・　保育園(所)の取組を地域に発信する。

(2)　**連携機関**　　地域自治会　高校　中学校小学校　商店街　近隣の人々

(3)　**取組内容**　　地域ぐるみの取組「春よ来い！ふれあいフェスティバル」に絵画の出展，舞台出演をして，地域の教育機関や自治会等，様々な人々と交流する。

(4)　**取組の経過・背景**　　園(所)の夏祭りに地域の盆踊り保存会に呼び掛け，踊りを披露してもらい，子ども，保護者，職員も一緒に踊って楽しんだ。そのような様々な機会をとらえて，地域へのきめ細かな働き掛けをしたり，地域の行事にも積極的に参加しているところである。

２　ふれあいフェスティバルの様子

(1)　**日　　時**　平成 20 年 2 月 10 日（日）午前 10：00 から終日

(2)　**場　　所**　近隣のデイサービスセンター

(3)　**参 加 者**　地域住民　小･中・高校生など約 500 名
　　園児 40 名・職員 10 名

(4)　**取組状況**

・　園(所)の近隣の施設に，子どもたちは保護者とともに参加する。
・　子どもたちは出演までの間，ホールの一角に座って地域の人々と一緒に，小学生，中学生，高校生の吹奏楽演奏や歌を静かに聞き入っていた。自分たちの知っている曲になると笑顔がこぼれ，体でリズムを取ったりしていた。
・　5 歳児がピアニカ演奏と手話をつけて「さんぽ」を歌う。そして全員で年齢ごとに色違いの手染めのシャツを着て，「ソーラン節」を楽しんで踊る。子どもたちの元気に踊る姿を見て笑いと大きな手拍子が起こり会場全体が和やかで温かい雰囲気に包まれる。
・　昼休憩の間，地域の人々が準備したぜんざい等を保護者と一緒に食べ

たり，出店を利用したりして子どもたちは楽しそうに過ごしていた。

・　展示コーナーでは，地域の人々の書や手芸作品とともに子どもたちの絵画が展示され，親子で観賞していた。

3　連携の成果

①　子どもの自信を育む

地域総がかりの行事に参加して，様々な人々と触れ合い発表するという経験は，子どもたちの大きな自信に結び付いた。

②　地域への発信の機会となる

保育園(所)の取組を地域に発信する良い機会となり，連携が更に深まっている。

4　連携を進めるに当たっての今後の視点

①　継続化

保育の中で，子どもたちが取り組んできたことを，地域の人々の前で発表することは，貴重な経験となるので今後も参加していく。

②　地域に開かれた園作り

保育園(所)が地域の人々にとって身近で居心地の良い場所，情報交換の場所となるように，きめ細かに働き掛け発信していく。地域の人々と触れ合う様々な機会をとらえて保育の中に生かし，地域に開かれた保育園(所)作りを目指していく。

園(所)長の一言

保育園(所)は，地域のかけがえのない開かれた「人づくり」の施設であり，また保護者，地域の方々に支えられている施設です。保育が楽しく豊かになっていくためにも，地域の子育て支援の拠点としての活動を，更に進めていくことが大切と思っています。

いつでもどこでも，「一緒に遊ぼうね。」と，子どもや大人たちの元気な声が響き渡るような地域，その中心として，なくてはならない保育園(所)となるよう頑張っていきたいです。

4　地域と結ばれた事例研究プロジェクトの考察と今後の課題

今回本研究プロジェクトでは，園(所)の実践事例の調査研究を通して，それぞれ実践内容は違っていますが，子どもたちと地域の人々との世代を越えたつながりが，子どもの健やかな育ちにとって非常に重要であるだけでなく，子育て家庭と地域の教育力の向上と活性化に寄与していることが確認できました。

園(所)が地域と連携を結んでいくには様々な課題が見受けられますが，事例検討を通して，身近な人的物的環境をさりげなく保育に取り入れることが，子どもの育ちにとっても園(所)にとっても，地域からの温かい見守りを得，地域における園(所)の認知，存在意義，信頼を高めるものとなっているといえます。

地域に密着した共通の社会資源である園(所)が，地域全体の子育てを支援する風土作りと活性化に資する存在としての意義と役割を改めて認識し，紹介した事例や，次の「(1) 地域と結ばれた保育・教育を推進することの意義」と「(2) 今後連携を進めていく上での3つの視点」を参考に，それぞれの地域性に合わせて，更に様々な角度から実践を進めていかれることを願います。

(1)　地域と結ばれた保育・教育を推進することの意義

①　地域との様々な交流が，子どもたちの社会性や主体的に生きていく力の土台を育むことにつながっている。

子どもは，様々な環境との相互作用により発達していきます。多様な生き方・価値観に触れて学んだり，自然も含めた地域の文化に触れたりする取組が，子どもの豊かな育ちにつながっているといえます。

近年，地域コミュニティが希薄化しているなかで， 園(所)が，地域との交流を保育内容に取り入れることで，子どもたちは様々な世代や層の人々からの温かいまなざしに囲まれて育っていると感じ取る体験をしていくことができます。

②　家庭及び地域社会の子育て力の向上に寄与している。

園(所)と地域との連携は，組織としてつながることで広がり，継続化していきやすいですが，その連携を更に強固なものとしていくためには，園(所)を取り巻く近隣の人々との肩肘張らない日常的な交流を積み上げていくことが必要です。

例えば，日常の保育の中で，散歩の時に近隣の人々と挨拶を交わしたり園(所)の行事案内をこまめに配布したりして，近隣の人々や関係機関に子どもたちの様子や保育内容を伝えることが，家庭・地域の子育て力の向上や活性化につながっていきます。

地域の子育て力が向上することにより，「地域の子どもは地域で育て守ろう」という機運が高まり，セーフティーネットの広がりともなっていきます。園(所)が核となって，日常的に地域における子どもや子育て家庭を温かく見守る視線を増

やしていくことが，孤立化した子育て環境にある親子への直接的間接的な支援にもつながっています。

③ 保育園(所)・幼稚園にとって保育内容の更なる向上につながる。

また，地域との様々な交流を保育に取り込み，他分野からの知識を保育者自身が得ることを通して，更に保育の専門性を高め，保育内容そのものを振り返り，新たな視点を取り入れた保育の創造につながっていくと考えます。保育の振返りと質の向上については，改定保育所保育指針・幼稚園教育要領の主要な柱の一つです。

地域の人々に，子どもの姿や保育内容を公開し，客観的評価も受けながら，社会状況の変化に対応した柔軟な保育・教育を展開していくことが大切であると考えます。

(2) 今後連携を進めていく上での３つの視点

① 連携機関と互いに交流のねらいを確認し合い継続した連携を進めていく。

継続した取組にしていくためには，園(所)と連携機関それぞれが，交流のねらいを明確にし，事業後には互いの成果を確認し合うことが大切です。

特に，教育関係機関との連携では，互いの教育・保育内容を理解し合い，その良さを見つけて学び合い，子どもの育ちを思春期まで見通して，豊かな育ちを保障していくために，それぞれの実践に生かしていくことが大切です。

また，連携機関との早い段階からの協議と具体的な日程調整により，計画性のある連携体制が構築できると考えます。

② 保育園(所)･幼稚園内で，保育の計画での位置付けを明確にする。

保育の計画の中で子どもの育ちにつながるねらい，意義を明確にして，全職員で確認し合い，また子どもの育ちを見通して，それぞれの時期にふさわしいねらいと具体的な内容との一貫性を持たせた保育計画を立てることが重要です。

また取組の成果と課題も含めて次年度への引き継ぎをきめ細かく行うことで，地域との連携を保育の計画に位置付ける意義とねらいを，継承できると考えます。

③ 地域性を考慮しながら独自の連携の在り方を探る。

地域全体を視野に入れ，地域，園(所)それぞれの特性を取り入れながら，互いの活性化につながるように，常に双方向に連携の在り方を模索していくことが大切です。

平成 20 年 12 月８日　報告会配布資料

地域と結ばれた事例研究プロジェクト

こどもみらい館

報告者：首席主事　江木朋子

参　考

新保育所保育指針・幼稚園教育要領より

子育て支援に係る項目

⇩　⇩

保育所保育指針第６章　／　幼稚園教育要領第３章

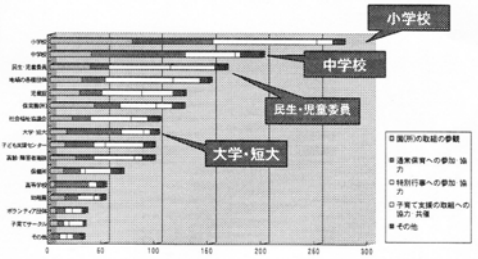
2　地域の関係機関等との連携状況

○ 連携相手トップは　「小学校」
次に　中学校　　民生・児童委員
保育・教育への参加・協力，参観

○ 園(所)の取組への参加・協力求める

○ 地域の行事やイベントへの積極的な参加：75%の園・所で取り組んでいる

園(所)の取組と連携機関等



１８年度の取組

○ 第２次アンケート調査の実施（内容の把握）

調査対象：京都市内の国公私立の保育園(所)・幼稚園

調査項目：① 子育て支援の取組
② 地域関係機関等との連携
③ 地域のイベントや行事への参加
④ その他

回答事例：５９園(所)　７１事例

○ 保幼小連携事例の実態視察
市教委地域教育専門主事室(現学校指導課)への聞き取り調査

○ 報告書発行

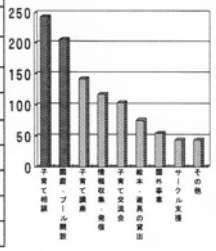
１７～１８年度の調査結果からの考察

○ 連携のキーポイントは「小学校」

地域との連携を進めていくには，まずは地域の小学校との連携が最も取り組みやすく多様な取組ができる

未就園児親子対象の子育て支援の実施項目

取組内容	実　施
子育て相談	２４３(80．３%)
園庭・プール開放	２０６ (68.8%)
子育て講座等	１４２ (47.5%)
子育て情報の収集・発信	１１８ (39.5%)
子育て交流会・井戸端会議	１０４ (34.8%)
絵本・遊具等の貸出	７６ (25.4%)
公園等の園外施設での事業	５５ (18.4%)
子育てサークルへの支援	４４ (14.7%)
その他	４４ (14.7%)



井戸端会議で親子とも仲良しに！

参　考

新保育所保育指針・幼稚園教育要領より

家庭及び地域社会との連携に係る項目

保育所保育指針

第４章１（３）－オ

子どもの生活の連続性を踏まえ，家庭や地域社会と連携して保育が展開されるよう配慮すること。その際家庭や地域の機関及び団体の協力をえて，自然，人材，行事，施設などの資源を積極的に活用し，豊かな生活体験を始め保育内容の充実が図られるよう配慮すること

幼稚園教育要領

第３章第１－１（８）

幼稚園における生活が家庭や地域社会と連続性を保ちつつ展開されるようにすること。その際地域の自然，人材，行事や公共施設などの地域の資源を積極的に活用し，幼児が豊かな生活体験を得られるようにすること

目　的

保育園（所）・幼稚園が核となり

すべての乳幼児の育ちと子育てを社会全体で支援していくことの重要性を発信する

１７年度の取組

- **第１次アンケート調査の実施（量的な把握）**

  調査対象：京都市内の国公私立の保育園（所）・幼稚園

  調査項目：① 子育て支援の取組
  ② 地域関係機関等との連携
  ③ ボランティアの導入
  ④ 地域や学校との今後の連携のあり方についての提言・意見

  回答事例：８０％【３７３園（所）中２９９園（所）より回答】

- **保幼小連携事例の視察調査**
- **報告書発行**

１　未就園児親子対象の子育て支援の取組状況

- **９０％以上の保育園（所）・幼稚園で実施**
- **４～５項目の事業を実施**

  子育て相談　園庭開放　子育て講座
  子育て交流会（井戸端会議）

○　保幼小連携への期待

- **小学校から**
  ５歳児が入学を楽しみにしてほしい
  ５歳児の観察と入学後の生活の参考
- **保育園（所）・幼稚園から**
  ５歳児の入学に対してのストレスの緩和
- **保護者や地域への広がりに期待**

小学校での給食体験

１７～１８年度の調査結果からの今後の課題

- **相互参観・連携会議の重要性**

  思春期までの子どもの育ちを見通し温かく見守っていくために

  - **保育者・教師の相互参観により子どもの姿や指導法の理解を深め合う**
  - **定期的な連携会議を持ち，互いの保育・教育内容を伝えあう**

保幼小連携のキーワード

まずは日常の交流や相互参観から出発し

積極的に

継続的に

１９～２０年度の取組

○ １７～１８年度アンケートの分類
① 地域の福祉施設との連携
② 地域の商店街，地域住民等との連携
③ 地域の関係機関との連携

○ 視察調査（聞き取りも含む）
代表的，特徴的な事例から１０ヶ園（所）を視察

○ 事例の検討・評価

地域の福祉施設との連携

Ａ保育園の取組
Ｂ幼稚園の取組
Ｃ保育園の取組

Ａ保育園の取組

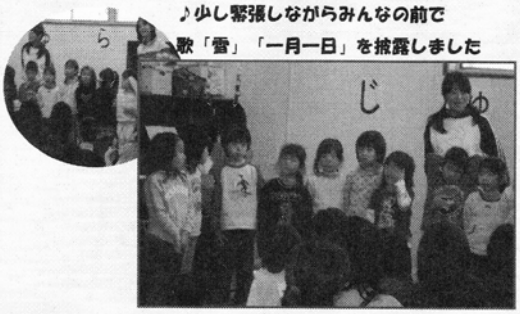
連携機関：重度障害者通所介護施設

目　　的：「おたのしみ会」に参加し障害のある人への理解を深める

地域の中で子ども自身が自分たちのできることを考える機会にする

障害のある人との交流

♪少し緊張しながらみんなの前で歌「雪」「一月一日」を披露しました



交流の積み重ねにより自然に関わりあう姿

考　察

- 保育計画の中での位置づけを明確化
  月２回交流の定例化
- 日常の自然な交流の重視
- 統合保育に活かす
- 保護者からの高い評価

今後の課題

- 継続化
- 次年度への丁寧な引継ぎ

Ｂ幼稚園の取組

連携機関：介護老人保健施設

目　　的：高齢者を大切にする気持ちを養う

人への思いやりを育む

介護老人保健施設利用者との交流

おじいちゃん，おばあちゃん
こんにちは！

♪歌と合奏をします♪

♪と～もだちになるために

♪おもちゃのチャチャチャ

考　察

- 地域・近隣施設についての理解
- 子どもと高齢者の心に残る交流
- 継続した取組

今後の課題

- 地域への発信
- きめ細やかな事前調整
- 交流内容の充実
  昔遊びを教えてもらう取組等…

C保育園の取組

連携機関 ： 法務局　デイサービスセンター

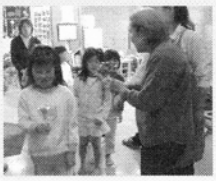
目　　的 ： 人権の花運動の取組に参加し人とのつながりの大切さを知る

地域の施設を知り利用者と交流する

デイサービスセンターとの交流

私たちが育てた水仙の花です
飾ってください

折り紙の花のお返し



歌のプレゼント

♪ひなまつり♪

考　察

- 近隣の施設についての理解
- 子どもの社会性・自信・意欲を育む

今後の課題

- 継続化
- 地域への発信

地域の商店街，地域住民との連携

D幼稚園の取組
E幼稚園の取組
F幼稚園の取組

D幼稚園の取組

連携機関：近隣の商店街

目　　的：地域の人々と親しみ触れ合う

クッキー作りの材料を買いに行き期待を高める

買い物を通して商店街の人々と交流

お店の人々とのふれあい

考　察

- 温かい人とのかかわりの体験
- 地域の人々と親近感を増す機会

今後の課題

- 連携を深める
  日常のきめ細やかな関わりを大切に
- 保護者への発信

Ｅ幼稚園の取組

連携機関：老人会　女性会　作業所
　　小学校　近隣住民

目　　的：花売りやさんごっこを通じて
　　地域の人々と触れ合う

花売り屋さんごっこを通じて地域の人と交流

開　店

考　察

- 子どもの意欲･自信を育む
- ３～４歳児の成長の目標

今後の課題

- 交流が深まるための内容の検討
- 保護者の参画の呼びかけ
- 連携機関の協力の呼びかけ

Ｆ幼稚園の取組

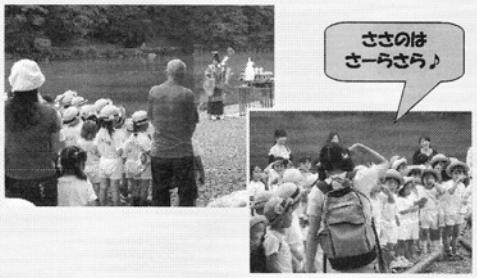
連携機関：商店街　神社　近隣住民

目　　的：地域の行事に協力する

伝統行事に参加し地域の存在を知る

七夕笹飾りの祈祷をしてもらいみんなの願いを届ける

七夕祭りに参加して地域の人々と交流



伝統行事の体験

笹飾りの奉納

笹焼き

考　察

- 保育計画の中での位置づけを明確化
  事業として定着
- 伝統行事の参加体験を通して地域の存在を知る

今後の課題

- 地域と自然体の交流
- 継続化

地域の関係機関との連携

G保育園の取組
H幼稚園の取組
I保育園の取組
J保育園の取組

G保育園の取組

連携機関：社会福祉協議会　福祉委員会
婦人会　　小学校

目　　的：在宅の高齢者との交流を通して高齢者をいたわる気持ち，尊ぶ気持ちを養う

高齢者とクリスマス会で交流

♪楽しくおしゃべり♪

考　察

- 高齢者と接するよい機会
- 子どもの社会性を育む

今後の課題

- 地域への発信
- 継続化・発展化
- 様々な機関との連携の広がり

Ｈ幼稚園の取組

連携機関：現PTA　PTAのOB
　　消防団　体育振興会

目　　的：伝統行事を体験する

　　地域の人々と交流する

地域の人と一緒におもちつき大会

むしたもち米を
ひとくち

伝統行事の体験

おもちをまるめて

みんなで食べました

考　察

- 取組の継続化
  伝統的な結びつき
- 地域の温かい見守りを知る機会
- 伝統行事の体験

今後の課題

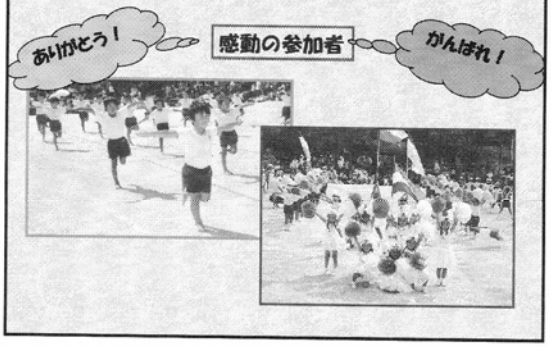
- 次世代への引継ぎ
- 人とのつながりの継続化と広がり
- 地域への発信

Ｉ保育園の取組

連携機関：刑務所

目　　的：受刑者への精神的支援

近隣の刑務所の運動会で演技！



がんばった子どもたち！

考　察

- 心の交流体験→自尊感情を高める
- 継続化によるつながり
  ３０年来の継続した取組
- 保護者の理解・支え

今後の課題

- 早めの日程調整
- 地域への発信

J保育園の取組

連携機関：地域自治会　小学校　中学校
高等学校　　商店街

目　　的：地域の様々な人々と交流する

文化的な取組に参加する

園の取組を地域に発信する

地域総がかりのフェスティバルに参加

手話と歌で「さんぽ」♪

地域の人々や文化とのふれあい

おぜんざいおいしー！

作品展に絵を出展

考　察

- 子どもの自信を育む
- 地域への発信の機会
  様々な連携の深まりにつながる

今後の課題

- 継続化
- 地域に開かれた園作り
  きめ細かな働きかけ

実践事例を通した研究プロジェクトの考察

○ 子どもの生きる力の土台を育む
多様な生き方・価値観，地域の自然・文化に触れて学ぶ

○ 家庭・地域の教育力の向上に寄与
地域の子は地域で育て守ろう

○ 園(所)の保育内容の更なる向上につながる
保育の質の向上

今後の課題

○ 継続した連携に
早めの日程調整
互いの目的を明確に一成果と課題の確認

○ 保育計画での位置づけの明確化
全職員で確認しあう
次年度への丁寧な引継ぎ

○ 地域性を考慮して独自性のある連携を
互いの活性化につながるように

【就学前教育研究プロジェクト】

１　目的

本研究プロジェクトは,「子どもをめぐる社会的環境の著しい変化の中で，生涯にわたる人間形成の基礎となる就学前の教育・保育の相互理解を図り，小学校への滑らかな移行に向けて，遊びを中心とした生活の中での学びについて調査，考察し，その成果を広く発信する」ことを目指し，保育園(所)・幼稚園，私立・市立・国立の垣根を越えて，保育士・幼稚園教諭等が集い，平成 17 年 2 月に発足しました。

この間，第 1 次及び第 2 次レポートを発信するとともに，平成 19 年度からは，本研究プロジェクトの目的を「子どもをめぐる社会的環境の著しい変化の中で，生涯にわたる人間形成の基礎となる乳幼児期の教育・保育の相互理解を図り，小学校への滑らかな移行に向けて，遊びを中心とした生活の中での学びについて調査し，乳幼児期にこそ大切に育んでいきたいもの，そのために保育者が何を大切にしていくかについて，子どもの姿を通して考察する」に改めました。(下線：当初の目的からの変更箇所を示す)

これは,「就学前」という表現が，0 歳から 6 歳までの育ちではなく，小学校入学前ととらえられがちであったことと，考察対象を明確にするための変更です。

２　これまでの取組の概要

(1)　第 1 期第 1 次（平成 16 年度，17 年度）

民営保育園，市営保育所，私立幼稚園，市立幼稚園，国立幼稚園，計 13 人により発足。「遊びの中の学びの芽」をテーマに事例を持ち寄っての話し合いとともに，公開保育や視察を行い，そのまとめを第 1 次レポートとして発信しました。

確認事項

- 国公私立，園(所)と現場の環境や生活の実態には違いがあるが，幼児期に大切にしたいことや育てたいと願っていることは同じである。
- 記録を取り，考察していくなかで，子どもの思いや育ち，学びが見えてくる。子どもの姿から，生活を通して「遊びの中の学び」がある。

(2)　第 1 期第 2 次（平成 18 年度）

「幼児期につけておきたい力」をテーマに事例を持ち寄り，話し合いを行い，そのまとめを第 2 次レポートとして発信しました。

確認事項

- 子どもが経験を通して自ら気付き行動していく力を培う。
  保育者は

① ねらいを持った意図した環境作りを行い，子どもの気付きを待ち，変化に気付ける。
② 子ども同士で育ち合える仲間関係を築くクラスを作る。
③ 保護者へ保育者として何を大切にしているのかを伝える。

(3) 第 2 期(平成 19 年度)

メンバーを入れ替え 11 人で，第 1 期での確認事項を保育実践に返していくため，「『幼児期につけておきたい力』を育むにはどのような環境や保育者の援助が必要か」をテーマに，事例や公開保育を基に話し合いを行い，具体的な援助や環境についての研究を進めました。

確認事項

・ 「このようにすれば子どもはこう動く」という技術的なことではなく，「子どもの心を育む」という視点に立った環境構成であり援助でなければならない。
・ 就学前を小学校入学前ととらえるのではなく，0 歳からの連続した育ちに目を向けることが大切である。

(4) 第 2 期（平成 20 年度）

メンバーが 3 人入れ替わったが，19 年度の確認事項のうえに立って，「子どもの心の育ち」に焦点を当て，事例を基に話し合いを行い，研究をより深めていくこととしました。

３　平成 20 年度における事例研究の方法

(1)　平成 19 年度までの方法

平成 19 年度までは，保育記録や保護者へのおたよりなど形式を問わずに，1 回ごとに各メンバーがテーマに沿った内容の事例を持ち寄り，その場で内容を説明し話し合ってきました。

この方法だと，「その時期に沿った内容であり，提案した保育者も新鮮で熱い思いを持って語ることができることから，具体性があり膨らみと広がりのある話し合いができる」との利点がありますが，「その場で初めて内容を聞くため，テーマに深く切り込むことが難しく，話し合いの観点が絞りにくい」ことから，平成 20 年度からは協議方法を変更しました。

(2)　平成 20 年度における方法

① 最初に全員が事例を持ち寄り，あらかじめ全ての事例をじっくりと読み込んでおきました。また，持ち寄った事例については，話し合う観点が焦点化するよう「基本的生活習慣」「人との関わり」「生命の大切さに気付く」の 3 場面に分類しました。

② 事例についてはエピソードとして子どもや保育者の言動を順を追って記述することに統一しました。同時に「なぜこの事例を取り上げたのか」「子どもの背景」「子どもの姿と保育者の関わり」「子どもと保育者の心の動き」の 4 点が伝わるよう描くことに努めました。

③ より活発な意見交換を行うため，一つの事例を全員で討議するのではなく，少人数のグループに分かれ，1 場面につき 1 グループごとに違う事例を討議しました。その後には，各グループから討議内容を報告する全体討議の場を設け，「基本的生活習慣」「人との関わり」「生命の大切さに気付く」の各々において，共通して大切にしていることとその事例ならではの視点を確認し合いました。

④ エピソード記述をより深く読み取るために，独自に考案した討議シート（参考 P. 92）を活用しながら分析しました。

〈参考：平成 20 年度の討議内容〉

	主な内容
1 回目	20 年度のテーマを「子どもの心の育ち」に決定
2 回目	「子どもの心の育ち」に気付いたエピソードを持ち寄り，骨子説明及び協議
3 回目	基本的生活習慣の場面のエピソードを通してグループ協議 （P. 88～89 に 1 例を紹介）
4 回目	人との関わりの場面のエピソードを通してグループ協議 （P. 90～91 に 1 例を紹介）

5 回目	生命の大切さに気付く場面のエピソードを通してグループ協議
6 回目	3 回のグループ協議のまとめ及び 20 年度のまとめ
7 回目	報告会の内容検討

４　平成 19，20 年度を通して見えてきた保育の視点

(1)　子どもへの関わりについて

①　子どもの心が育っていくためには，まずは保育者や園(所)への安心感を育み，信頼関係を築いていくことが重要

子どもが表している現象を湧き出させている内面に問い掛け，そこに働き掛けることで，子どもも安心し心の安定が図られていくと思われます。保育者が子どもの心を受け止め，その心に保育者の思いを返していくことを積み重ねていくことで，子どもと保育者の間に信頼関係を築いていけるような保育を営んでいかねばなりません。

そのためにはまず，子どもが表している現象だけに目がいき，知らず知らずのうちに子どもの心に届かない援助となってはいないか，本気で子どもの心に気付こうとしているのか，常に自問していくことが大切です。

②　子ども一人一人を理解し，プラスの面に目を向けることが重要

子どもの姿をとらえるときに，担任はどうしても「どうしてこんなことをするのか。」「もっとこうなって欲しい。」という思いが先に立ち，マイナス面に目がいきがちです。行動だけを見てレッテルを貼ってしまうのではなく，どのような状況でそのようなことをしているのかや，そうしてしまうのかを一歩引いて客観的に見たり，他の保育者とその子どもの姿を語り合ったりすることで，また違った側面を見ることができます。

このように，子どもを多面的にとらえ，プラスの面に目を向けて接していくことで，自ずと保育者の関わり方が変わり，子どもの見せる姿も変わっていきます。

一方，保育者がこの子どもは何でも自分でできるというイメージを持ってしまい，本当は甘えたい自分を出せずにいることが，保育の中では多々あるのではないでしょうか。子どもが背伸びをすることなく，あるがままの姿を保育者に見せ，保育者もそれをそのまま受け止める関係を築くことが大切です。

③　一人一人の育ちを十分に見極め，その子どもの心の育ちを考えた保育を営んでいくことが重要

子どもは好きな保育者の思いに添おうと高い要求に無理してでも答えていこ

うとします。保育者が，結果だけを求め，訓練的にさせることにより，子どもが「もうできたししない。」と思うのか，楽しい環境の中で「やってみよう。」と自らが関わり，できたことを保育者や友だちに認められ「もう 1 回やってみたい。」「次にも挑戦したい。」と思うのかとでは，子どもの中に育っていくものが違ってきます。

0 歳児は 0 歳児なりの，5 歳児は 5 歳児なりの時間を過ごし成長していくことが重要であり，保育者の願いが一人歩きするのではなく，その子どもには今どのような育ちが必要なのかをしっかりと理解，分析し，一人一人に添った次への援助を導き出すことが大切です。

④ 子どもが園内外の様々な体験を通して，自ら考えられるようにすることが重要

エピソードの中にも，「自分が使っているおもちゃを他の人に貸してあげるのはいや，だけど一緒に遊びたい。」，カマキリに餌としてバッタを与えることに対して「バッタがかわいそう。」「でも生きた虫をあげないとカマキリは死んでしまう。」等，子どもは様々なことに悩み葛藤しています。また，クモが，虫を捕まえる様子に感動したり，「どうしてクモは糸にくっつかないのかな。」と疑問を持ったりしています。「友だちには優しくしましょう。」「命は大切です。」「クモとはこのような生物です。」と知識だけを伝えても，「そんなん知ってる。」と感動や興味関心は小さくなってしまうのではないでしょうか。

子どもは，様々な物や人と関わるなかで，感動したり疑問に思ったり悩んだりしています。その場で正しい答えを導き出したり，言葉で表現したりできなくとも，子どもが心を動かし試行錯誤することによって，自分の中で折り合いを付けたり，自分なりの考えを持ったり，感じたりする実体験をたくさん積み重ねるなかで，様々な経験が相互に結び付き，知的好奇心や規範意識，生命を大切にする気持ち等が芽生え，育まれていきます。

その際，園内だけではなく，園外の自然の中で遊んだり地域の人と触れ合ったりする機会を持つことにより，子どもの体験にも幅が広がります。家庭や地域の中での生活・自然体験が減ってきている今，園(所)でも積極的に取り入れていくことが求められています。

(2) 保護者への関わりについて

① 保護者が安心感を持ち，保育者や保育園(所)・幼稚園に対する信頼関係を築くことが重要

子どもと同様に，保護者に対しても，そのあるがままを受け止めていくことで，保護者も受け止めてもらえたという安心感を深め，信頼感を持って，園(所)

側の思いに耳を傾けるようになると思われます。

園(所)の様子が分からないことで，保護者は不安になったり，不信感を持ったりしがちです。保護者に子どもの様子を伝えるときに，担当保育者だからこそ知り得る園(所)での遊びや友だちとのやりとりなど具体的な子どもの姿や保育者の思いを伝えていくことが大切です。保護者が安定し，保育者に信頼感を持ってくれることが，子どもの安定や子どもから保育者への信頼感にもつながります。

② 保護者とともに子どもを育てていこうという姿勢が重要

保護者に園(所)の取組内容について理解してもらうことは大切です。しかし，それを受け入れてくれない保護者に対して，園(所)が「こうあるべき」という方針を前面に押し出し，なんとかしてこちらに近付けようとするのではなく，園(所)からも近付いていく方法を再度探ったり，相談を持ち掛けたりすることで，共に考えていこうとする姿勢を示すことが大切です。

(3) 組織的な振返り

① 子どもの心の育ちや意欲，取り組む姿勢に目を向けて保育を見直すことが重要

「子どもが喜んでいる。」「楽しかった。」「こんなことができるようになった。」と保育を流してしまうのではなく，その中でどのような育ちがあったのか，子どもの心の育ちや意欲，取り組む姿勢などの視点から日々の保育を見直すことが大切です。

一人一人に応じた保育をいかに実行していくのかが重要であり，保育計画においては，0 歳から 6 歳までの長期的な発達の見通しと，より具体的な子どもの生活に即した週・日ごとの振返りが必要です。

② 園内で十分に話し合いを重ね，保育の目標を同じくすることが重要

日々の出来事における保育者の言動が子どもに大きく影響を与えます。何気ない一言で，気持ちがつながったり，反対にそれまで築いてきた信頼関係が壊れてしまったりもします。子どもの育ちにとって何が大切なのかを常に心に置き，保護者にもその思いを伝え，同じ気持ちで接していってもらえるように努めていくことが大切です。

その際，子どもや保護者に対して，園(所)内の保育者の言動がまちまちであっては子どもも保護者も混乱してしまいます。保育の目標については，園(所)内で十分に話し合いを重ね，共通理解した上で各保育者の個性や人間性を生かした保育を行いながら，保育目標の達成を目指していくことが大切です。

５　就学前教育研究プロジェクトの考察と今後の課題

(1)　保育園(所)・幼稚園の枠を越えた相互理解と共同研究

本研究プロジェクトの発足当初，保育園(所)と幼稚園とでは，同じ言葉であってもとらえ方の違いや誤解が見られました。例えば，「『生活』は，保育園(所)では，家庭にいる時間も含めて 24 時間を指すが，幼稚園では在園する時間だけを指しているのではないか。」「幼稚園での『教育』は，小学校のように教室に入って一斉にドリルをしているようにとらえていた。」という意見もありました。

しかし，保育園(所)・幼稚園，公私の枠を越えて，保育者が共に子どもの姿を通して保育について話を重ねることで，こうした違いや誤解を乗り越えながら，共に子どもの心を大切にした保育をし，これまで述べてきたように子どもの中に育てたいと願っていることは同じであることが共通理解できました。

今改めて，0 歳から 6 歳までの連続性のうえに立ってとらえていく大切さを思います。本研究プロジェクトの名称が「就学前教育」であったため，発足当初「小学校入学前の 5 歳児を対象とした研究をするのかな。」というとらえ方もありましたが，「就学前教育」は小学校入学に向けた準備ではなく，小学校に入学するまでの 0 歳から 6 歳までの育ちと見ていくことが大切です。

例えば，幼稚園では 3 歳児からの入園となっています。乳児の姿についても見てきたことで，「子どもがどのような発達の筋道を通ってきているのか」「乳児期を家庭で過ごしてきている幼児が，今マイナス面で表している姿はどこに課題があるのか」「保護者の不安の元はどこにあるのか」等を学ぶことができました。幼稚園教育要領においても，生活との連続性の大切さが明示され，入園までの子どもの発達や家庭での過ごし方を配慮して保育を展開することがこれまで以上に求められています。保育園(所)に入園(所)する場合と幼稚園に入園する場合とでは，子どもの育ちや保護者のニーズ等に違いはありますが，0 歳からの子どもの育ちを知ることはとても重要です。

保育園(所)のエピソードやパワーポイントによる発表からは「子どもの年齢が小さい分，生活面の援助がとても丁寧で細やかなことや保護者との関わりがより密であることを感じる。」，また，幼稚園のエピソードや公開保育からは「子どもの遊びのとらえ方や遊びを中心とした保育の環境や援助の深さを感じる。」等，互いの良さに刺激をもらい，自園(所)の保育を振り返り，本研究プロジェクトでの学びを実際の保育において実践している園(所)もあります。

また，保育園(所)の 1 歳児と幼稚園の 3 歳児等，年齢は違っていても，初めて保護者から離れて集団生活を過ごす際の子どもの心の動きや子どもが保育者と信頼関係を築いていく過程には共通したものが見られました。保護者についても同様のことがいえます。入園(所)の年齢は違っていても，初めて社会に出る子どもと保護者の不安や葛藤を十分に受け止め，配慮していく大切さを感じました。

このように，保育園(所)・幼稚園，公私の枠を越えて，保育を共に考えることにより，お互いの特質を知り，認め合い，刺激し合い，学び合うことにより，子ども理解が深まり，保育者としての資質の向上・保育の充実につながる第一歩を踏み出せたのではないでしょうか。今後更に，各園(所)内での研究をより充実させ，互いに学び合える機会の設定等に取り組んでいくことが大切です。その際には，園(所)の保育士・教諭が，公開保育で実際の子どもの姿や保育者の関わりを見合ったり，エピソード記述を通し話し合ったりすることで，互いの保育・教育内容や保育・指導方法の違いと共通点について，より具体的に理解を深めていくことが必要です。

もちろん，就学以降も同様に，小学校教諭が，0 歳から 6 歳までの子どもの育ちを知っていくことで，小学校への滑らかな接続につながるものと思われます。そのためにも，小学校教諭を交えた相互理解の場と機会を広げていくことが重要です。

(2) エピソードを通した相互研鑽

様々な保育者が集まり討議するためには，取り上げる事例が焦点化されテーマに迫れることが重要です。本研究プロジェクトでは，20 年度，より深く話し合えるようにとエピソード記述の形式で事例を持ち寄り，討議シートを用いて話し合いをしてきました。そうすることにより，一つ一つの言葉掛けや関わりの中にある保育者の子どもに対する願いを意識化したり，子どもが表している姿の裏に隠された子どもの本当の思いを探ったりすることができました。

討議シートを持ち帰って実践した園(所)からは，「話し合いの焦点が具体的になることで，若年の保育者が活発に意見を出す姿が見られ，それを認めていくことで若年保育者の自信につながった。」「それまでの事例検討会では一方的な報告だけで終わっていたが，子どもの心の育ちを通してお互いに意見を出し合うことにより，保育者間の気持ちが共有できチームワークが高まった。」等が報告されています。保育者自身が自尊感情を持ち，保育をすることに喜びや楽しさを感じること，園(所)内の保育者が互いに認め合い協力し合い高め合って保育をしていくことへもつながっていくのではないでしょうか。

このようにして，自分で描くことにより，自らの保育を振り返り，また，それを基に他の保育者（園(所)内で，あるいは本研究プロジェクトのように他の園(所)の保育者とも）と討議することにより，様々な視点から子どもの見方や保育の環境，保育者の援助等について見直し，次への保育へ返していくことが，保育者としての資質の向上・保育の充実につながるものと思われます。

６　就学前教育研究プロジェクトに参加して　（第２期メンバー五十音順）

＊＊＊＊　今井みどり　京都市壬生保育所（市営保育所）平成 19，20 年度　＊＊＊＊

第 1 期からの取組の流れを受けて，第 2 期からの就学前教育研究プロジェクトに参加させていただき，多くの学びを得ることができたように思います。

「幼児期につけておきたい力」を育むために必要な環境や保育者の援助を中心とした研究内容の流れから，今年度は「心の土台の大切さ」の下に子どもの心の育ちについて，乳幼児期の保育の重要性や保育園(所)，幼稚園から出されたエピソードを基に具体的に話し合い，意見を出し合えたことがとても大きな学びになったのではないかと思われます。

「就学前」を入学前の幼児期としてのみとらえるのではなく「教育的配慮を素地として，0 歳児からの乳児期の丁寧な子育ての積み重ねの上に成り立った，幼児期の育ち」と見ていくという観点は今年度において保育園(所)と幼稚園の相互理解並びに協同研究を更に深めるという経緯に至った視点であったのではないかと思います。

実際にエピソード検討を進めていくなかで，保育環境や保育のスタイルなど各々の相違はあるもののエピソードを読み取るなかで保育の在りようを知り，それについて意見を出す。それは日々違う現場で保育に当たるそれぞれの保育観や経験を重ね合わせ，かんがみた思いや考えであり，その中で保育を客観的にとらえ読み深めることで，子どもや保育者自身が何を感じたのか，また保育者自身がどういう思いや願いを持って保育に取り組んでいるのかを焦点化し深く意識し合えたものとなったと確信することができました。検討内容も基本的生活習慣において，また保護者への関わりに対して，命の大切さ等テーマを絞り，議論を重ねることで保育の質を高めることにつながっていったのではないかと思います。

保幼小の連携が益々重視される時代の中で，このような教育機関の枠組みを越えての共同研究，共同研鑽ができる機会を数多くの保育者が持てることで今後の幼児教育がより豊かになることを願ってやみません。2 年間このような研究の場に参加させていただいたことに深く感謝したいと思います。

＊＊＊＊＊＊　柴田実恵　淀白鳥保育園（民営保育園）平成 19，20 年度　＊＊＊＊＊＊

前任者より「素晴らしい研究プロジェクトがある。画期的でこういう研究プロジェクトが常日ごろから必要だと感じていた。」と毎回熱い報告を聞きながら，「へぇーそうなんだ。」とかなり他人事だった私に，2 年前「次の担当は柴田先生やってください。」と指名され「はい。」と返事をしたものの心の中では，「ムリ！」と叫んでいました。1 回目の集まりが近付き気持ちを奮い立たせて参加させていただきました。そうそうたるメンバーに怖気付きながらも自己紹介をし，話題にも少し声を発し…こんなことでやっていけるのかなと不安い

っぱいで帰路に着いたのを思い出します。最初はこんなに後ろ向きだった私ですが，こどもみらい館の先生や一緒に参加されている先生方に温かく援助していただき，振り返ってみれば，本当に素晴らしい研究プロジェクトに参加させていただいたんだと心より感謝しています。

特に良かったのは，この研究プロジェクトの中でベースになったエピソード記述を書くうえで自分なりにかなり勉強できたこと，普段何気なく通り過ぎてしまう保育のワンシーンをとらえて保育者同士で意見交換することでワンシーンがワンシーンではなくなり，より中身の濃く深い保育へと移っていくことを実感できたことは，正に研究プロジェクトのおかげです。

研究プロジェクト自体は終了しますが，日々の保育は続きます。私が学んだことを実際の保育に生かして子どもたちに貢献していきたいと思います。こういう機会を与えてくださったこどもみらい館の先生，淀白鳥保育園の園長先生，本当にありがとうございました。

＊＊　関川直子　あけぼの保育園（民営保育園）平成 16，17，18，19，20 年度　＊＊

発足当初から参加させていただいて，たくさんのものを得ることができました。当初は「協同の学び」「科学する心」等のキーワードが出るなど，カリキュラム的な話だったように思います。子どもの気付きや環境作りが話題になっていました。幼保の違いなく面白い実践をたくさん紹介していただきました。

回を重ねるごとに，いつの間にか，話の中心は子どもたちの心の育ちや心の動きと，保育者の関わりや視点になっていきました。それぞれの現場で一番気になっているのが子どもたちの心のことだからだと思います。たくさんの事例が出るなかでも一つの実践について様々な視点で掘り下げ，いろいろな角度から見ていくことで必ずといっていいほど新たな発見がありました。心の育ちの話の中で保育園(所)の 1 歳児と幼稚園の 3 歳児の共通点を見つけたりと，幼稚園と保育園(所)の先生方が共に話し合うからこそ得るものもありました。保育園(所)，幼稚園，公立，民間それぞれに参加されている先生方が確かな視点を持っておられたこともこの研究プロジェクトを実り多いものにしたと思います。話し合いも，話題を出しやすいよう工夫をしてくださったこともありますが，あえて型通りに決めてしまわず自由に意見を出したことでかえって毎回なにかしら収穫があるという「不思議」な展開になっていました。それがこの研究プロジェクトの素敵なところだと思います。

今でも印象に残っているのは「就学前につけたい力とは」という話題の時のことです。「力」とは何か，の前につけたいのは「力」なのか，という議論になったのです。これには参加者皆でひっかかり，悩みながらも答えが出ない話し合いをしました。園(所)で過ごしていただけでは毎日の忙しさの中でこういうことに引っ掛かって話をするということはなかったと思います。けれども実はすごく大切なことなんだと思います。きれいに整理された内容ではなかったかもしれませんが意味のある場，それがこの研究プロジェクトです。

＊＊＊＊＊＊＊＊　髙濱朋子　南殿幼稚園（私立幼稚園）平成 20 年度　＊＊＊＊＊＊＊＊

この研究プロジェクトに参加して，心の育ちについて幼稚園・保育園(所)の先生方と話すことができる貴重な機会でした。エピソードを記録し，討議シートを用いての話し合いをすることで，参加者の話し合う観点が共通理解でき，短時間なのにとても深いところまで話し合うことができ学ぶことが多くありました。

私は，保育経験を積んできて自分なりの保育観が定まってきて，型にはまっていないつもりでも当たり前に思っていることがそうではなかったり，いつの間にか自分の枠，自園での枠にとらわれていることに気が付きました。公立・私立の幼稚園・保育園(所)の先生方の意見や他に考えられる関わり等を話し合うなかで，視点を変えて保育を考えるヒントを得ることができ，その時子どもの何を育てたいかということから人的・物的環境を考え保育計画を立てることが大切だと見直すことができました。

子どもの育ちの基盤になっているものはやはり心であり，子ども自ら毎日の生活から学び取っていくことだと思います。それには子どもがたくさん体験し，そこからいろいろな感情を味わい，子どもの思いに気付けるよう保育者自身も感動する心を持ち続けたいと思いました。また，子どもに育てたいと願っていることが，自分自身も日々の生活の中で行動できているか，自分の姿勢を子どもに見せているという気持ちを持って振り返り，保育の中で私自身も学んでいきたいと思いました。

具体的なエピソードがあることでとても分かりやすく，深い話し合いができ，とても勉強になりました。ありがとうございました。

＊＊＊＊＊　田中玲子　佛教大学付属幼稚園（私立幼稚園）平成 19 年度　＊＊＊＊＊

平成 19 年度の 1 年間でしたが，研究プロジェクトに参加させていただき，ありがとうございました。

本園では，人事異動（転勤）がありません。園内に指導を仰ぐ先輩もいない年齢となり，いろいろと悩みが多く，煮詰まるような思いをしていましたが，本研究プロジェクトに参加し，幼稚園だけではなく，保育園(所)の先生方とも一緒に学ばせていただける機会を得，多様なご意見を頂くことができました。

特に，「2 歳児慣らし保育」の実践記録を発表させていただいたときには，保育園(所)の先生方から，2 歳児の生活や発達段階，育ちの特徴等，丁寧にお話ししていただきました。本から得る知識ではない，生の声に「明日から生かしていこう！」と保育を振り返り，気持ちを引き締めました。活字にした一つの事例を繰り返し，多面的に振り返ることで，初めは気付かなかったことに気付き，頂いた御意見を持ち帰り，再考することでまた異なる気

付きが生まれることを実感しました。「エピソード記録の取り方」についても試行錯誤していましたので，多くのことを学ばせていただきました。

京都教育大学附属幼稚園の見学をさせていただいたことも，強く印象に残っています。大きな研修会以外で，他園(所)の公開保育に参加させていただける機会は皆無に等しく，保育内容だけでなく，環境構成や時間の流れについても大いに刺激を受けました。

多様な出会いの中で学んでいけるこのような研究プロジェクトで，また一緒に学ばせていただく機会があれば嬉しいです。

＊　谷晴子　京都市立伏見南浜幼稚園（市立幼稚園）平成 16，17，18，19，20 年度　＊

第 1 期，第 2 期と続けて参加してきました。発足当初は，国公私立の幼稚園・保育園(所)が集まっての研究ということで，互いの生活を知り理解することから始まりました。生活の形態や環境が違っても，毎回のエピソードや話し合いを通して「今子どもたちに何を願って生活しているか」を考察するなかで，幼児期に大切にしたいことや育てたいことは同じなんだなということが分かりました。同時にメンバー同士の理解も深まり，夜にも何度か飲食を共にして盛り上がったのを懐かしく思います。

子どもの思いや姿から「遊びの中の学び」について探ってみようということになりました。遊びの大切さとその中で学んでいることをどのように読み取っていくかが，研究プロジェクトを通して私自身にも課題になりました。そこで，遊びや生活の中で学んでいることや幼児期につけておきたい力は何かを基に毎回テーマを決め事例を持ち寄り話し合ったのですが，つけておきたい力で細かく挙げた項目に共通する環境構成の大切さ，特に子どもたち一人一人と保育者との信頼関係を築くことの大切さを改めて実感しました。

第 2 期は，年齢ごとの事例の考察から 0 歳からの育ちの連続性や 0 歳からが就学前教育であることを再確認して，「心の育ち」について事例を持ち寄りました。事例の形式を統一したり，小グループで討議シートを基に話し合ったりしたことはとても勉強になりました。これは園内でも早速熱く伝えました。今後も活用したいと思っています。

期間中は日々の忙しさから欠席することや事例を準備できなかったこともあり反省することも多いのですが，幼保の枠を越えて同じ場で保育について語り合う貴重な経験ができて感謝しています。毎回丁寧にまとめてくださったこどもみらい館の先生方ありがとうございました。この研究が私の中で続き，発信していけたらと思いつつ保育の喜びを感じています。

＊＊＊＊　仲敬子　泉山幼稚園（私立幼稚園）平成 16，17，18，19，20 年度　＊＊＊＊

第 1 期から参加させていただき，いくつもの過程を経てたどり着いた第 2 期では，「子どもの心の育ち」に焦点を当て話し合ってきました。その中で利用してきた討議シートでは，「保育者の願いと関わり」「子ども（保護者）の心の動き」という，両者それぞれの側から内面をのぞくことができ，互いの思いのずれや，見えていなかった子どもの思いに気付くことができました。

また，一つのエピソードを基に，当事者の発言に対して周りの者が意見するのでなく，エピソードから読み取れることを一人一人が自分のこととしてとらえ，それぞれの視点からの意見を交わすことで，つい問題視しがちなエピソードの中の子どもの心の中を違う面からのぞき，保育者自身の思い込みに気付くことができました。そして，討議の中でのいくつもの「気付き」を自分自身の保育へと返していくことは，保育を顧みる良い機会となりました。

就学前教育として，「遊びの中の学びの芽」というテーマで始まり，10 項目の「幼児期につけておきたい力」について話し合ったこともありました。でも，話し合いの先に行き着くところは，いつも同じで，「子どもの心を育む」ことが一番根っこにあり，そのために私たち保育者は，「気付き，体験，感動，仲間関係，受け止める」というキーワードを常に心に留めておくことの大切さを改めて感じました。5 年の間，話し合いの方法にも工夫を重ね，いろんな立場の先生方の御意見をたくさん聞かせていただき，学び多き研究の期間を持つことができました。

こどもみらい館の就学前教育研究プロジェクトの事務局の方々，そして互いに意見を交し合った先生方，今まで本当にありがとうございました。皆様に与えていただいた貴重な勉強の場で得たことをまず自園にて実践し，学びの場を広げていきたいと思います。

＊＊　鍋島惠美　京都教育大学附属幼稚園（国立幼稚園）平成 16，17，18，19 年度　＊＊

「就学前教育研究プロジェクト」研究員の公募は，当時の社会状況に表れた問題と深く結びついて私の視野に飛び込んできました。そして，何より，乳幼児期の教育に携わる保育園(所)，幼稚園，私学，国公立の垣根を越えた呼び掛けが魅力でした。

0 歳から集団保育に入っていく子どもと，その子を受け入れていく保育士との心の結ばれ方，子ども集団の中にいるからこそ身に付いていく関係性を保育士の方が目を輝かせ実践報告されることは，私の未知の世界であり感動でした。その一方で，お互いの施設見学は，保育観を具体的に分かち合えるときとなりました。「認定こども園」が話題になると同時の施設見学（滋賀県）は，取組の実情や現場の方の思いも伺え，また一つ保育の視野が広が

り貴重な体験となりました。保幼，行政のつながりを感じた一年次でした。

二年次になり，研究のテーマが絞られてきました。私たちが考える「幼児期につけておきたい力」について思いつくままカードに書き込み，それを集約していくといくつかの力に分類することができました。話し合って出てきたキーワードが，「気付き，体験，感動，仲間関係，受け止める」という，幼児教育の在りようそのものに返ってきたことの重要さに身震いしました。

三年次になり，私は，当園の同僚に研究の場を譲りそばから見つめてきました。教育要領・保育指針が改訂になり小学校との連携が掲げられ教育が大きく変わるときです。今一度「就学前教育」という言葉を熟知し，教育の基礎を培う「乳幼児の養護と教育」に研究の視点を置くことが大切だと思います。

＊＊＊＊＊＊＊　西野夕子　光華幼稚園（私立幼稚園）平成 19 年度　＊＊＊＊＊＊＊

「就学前教育研究プロジェクト」に参加させていただいたことで，公立・私立，幼稚園・保育園(所)のそれぞれの先生方との出会いがありました。研究を重ねていくなかで，保育についていろいろな話し合いができたことは大変勉強になりました。

毎回，事例を持ち寄り，子どもの姿と保育者の関わり方について，子どもたちがどのように育っているか等話し合っていきました。各園の先生方が持ち寄られる事例には，いろんな場面のエピソードがありました。自分なら，こういうときどんな言葉掛けと関わり方をしていたか考えたり，自由討論していくなかで，子どもの心の変化や子どもたちへの関わりなど，「こうだったのでは？」と思えたりすることがありました。

また，事例の作成については，背景や理由等を分かりやすく記入していくこと等，自分自身も記録の取り方を学ぶことができました。事例を持っていき発表した後は，先生方から意見を聞き，「こんな関わりもできたのでは…」「子どもの心の動きはどうだったのか…」等，いろいろな角度から見つめ直して考えることができました。

事例研究をするに当たっては，子どもの行動の意味や背景を知り，子どもたちの遊びや行動をしっかりと見つめること，幅広い視野を持ち，より多くの目で子どもを観察すること，そして，教員間で話し合いを持つことが大切です。いろいろな角度から分析することができるので，保育の内容について交流することはとても意義のあることだと思います。

他園(所)の先生方と研究する就学前教育研究プロジェクトに参加させていただき，本当にありがとうございました。

＊＊＊＊　村田眞里子　京都教育大学附属幼稚園（国立幼稚園）平成 20 年度　＊＊＊＊

教職に就いてずいぶんの年月を重ねてきました。ずっと同じ幼稚園で仕事をしてきて，その間いろいろな教職員と出会い，刺激も受け，保育に対する考え方や，生き方につながる人となりにも触れたようにも思います。しかし，第 2 期就学前教育研究プロジェクトに参加させていただく機会を得たことは，私の保育における世界を広げるチャレンジだったように思います。

そうは見えないようなのですが，新しいことには引っ込み思案ですし，できればひっそりと隠れていたいぐらい…，というところもありますので，初めは本当にドキドキで，1 年間やっていけるだろうかと心配でした。子どもたちの「心の育ちを感じる」エピソードを持ち寄るときには，もっとあるはずなのに…，記録はあってもどうしてエピソードに書けないのだろうと，情けなくもなったことを今，思い出します。

しかし参加してエピソードを基に話し合いを重ねるごとに，私はどう書いたら事例らしく見えるだろうかと，人から見て格好の良い事例を求めていたのかもしれないと感じるようになりました。本当に書いておきたかった子どもたちのすごいところ，ハッと気付かされたところ，可愛いなあと思ったところ…，プルンとかブルンでもいい，私の心の糸が震えた場面を感じたままに書くことに戻ってみよう，そんなことに改めて気付かされました。

一つの事例を深く読み込んで，エピソードに書かれていない部分に，実は大事な意味が含まれていることにも気付きました。それが事例として残しておこうと思った初発の動機なのかもしれないとも思いました。何人もの先生と率直に疑問や意見を交流させていったからこそ得た気付きでした。それにこだわって書いていくことを，これからの私の課題として取り組んでいきたいと思います。

＊＊＊＊　向瀬麻由佳　京都市立明徳幼稚園（市立幼稚園）平成 19，20 年度　＊＊＊＊

私は 2 年間就学前教育プロジェクトに参加させていただきました。最初は幼稚園・保育園(所)，公立・私立の先生が一同に集まっているということについて「みんなそれぞれ保育の時間帯も形態も違うのに話し合いができるのだろうか？」と不安に感じていました。

しかし，エピソードを通して話をしていくうちに自分が今まで知り得なかったことを知ることができたり，それぞれの先生方が子どもたちがより豊かに生きていくために育てたいと思っている心（根本）は同じなのだということにも気が付くことができました。また，他の先生方の話を聞いたり自分の意見を述べたりすることによって考え方や価値観の違いを知り，自分の保育を振り返ることもできました。

また，今年度はエピソードを通して話し合うときの討議シートの活用という新しい方法

を通して観点を絞った話し合いができたように思います。「自分だったらどうするか。」「この子は本当にそう感じていたのか。」「どうして自分はそう思ったのか。」等一つ一つを突き詰めて考えていくことにもつながりました。この研究プロジェクト内にとどまらず，園内での研修などにも生かしていきたいと思っています。

最後に，様々な先生方との出会いと，共に勉強できる貴重な機会を頂いたことに深く感謝いたします。

＊＊＊＊＊＊＊　村川友美　御室幼稚園（私立幼稚園）平成 20 年度　＊＊＊＊＊＊＊

研究プロジェクトに参加させていただきありがとうございました。

今年度初めての参加ということもあり，まず今までの流れをつかむのが精一杯で，スタート当初は戸惑いが大きくありました。またテーマも「心の育ちを考える」という大きなもので，自分がそこに入り意見ができるのかという不安もありました。

しかし，参加してみると身近な事例から話し合いを進め，様々な立場からの先生方と意見をかわし合うことができ，大変貴重な経験ができたと感じています。他の研究会では同じ立場の先生方のみとなりますが，この研究プロジェクトでは，公立や私立を問わず，また保育園(所)・幼稚園の垣根を越えて話し合う場が持たれ，大変有意義に感じました。

事例を話し合ううちに，保育園(所)・幼稚園各々の良さを再確認するとともに，互いに刺激し合う部分も多くありました。また何よりも，子どもたちと日々生活するに当たり，根本的な悩みや考え方は一緒なんだという共通理解ができたことが，参加したなかで一番嬉しく思うことでした。保育するなかで，答えはなかなか出ないものですが，各々の思うことや悩みを話し合い，子どもたちに対してどうあるべきかを考えることが，何よりも心の育ちにつながるのではないでしょうか。

就学前を 5 歳児のみととらえず, 0～5 歳全般とし, 小学校につなげるためだけではなく，より良く育つためにどうするかということをこの研究プロジェクトで改めて見直し，学ばせていただきました。自園にそれを持ち帰り，また日々悩みながらそれを見つけていきたいと思います。またこの研究プロジェクトの内容が，広く特に小学校の先生方の耳にも届けば，より一層この研究の意義があがることと思います。

短い期間ではありましたが，本当にありがとうございました。

＊＊＊＊　森田歩　洛陽保育園（民営保育園）平成 16，17，18，19，20 年度　＊＊＊＊

本研究プロジェクト発足時より参加して，この 5 年間で多くのものを学び得ることができました。幼・保，公・私の違いから交流を始め，子どもの姿を通して遊びの中に学びの芽があることを互いに認識し合いました。

第 1 期で学び得たことを基に第 2 期では実践的な面から更に研究を深めていき，実際保育をしていくうえでの子どもにとっての環境や保育者の援助の仕方，それがどのように子どもに影響しているのか（していたか），それにより子どもの心の変化はどうであったか，またどのような力としてついていったのか等意見交換することでこれまで漠然としていたことが，よりはっきりと見えてきました。子どもが自ら気付き，おもしろいと思えることをとことんできる環境，工夫等保育のヒントも多く得ることができました。また大人との信頼関係が根元にしっかりあることで，子どもは自分らしさを表現でき，保育者側も子どもの変化に気付き成長を感じることができる，子どもとの共感関係を大事に保育をしていくことが大切であると再認識できました。

20 年度に入り，メンバーの入れ替わりはありましたが，「心の育ち」をテーマとして更に研究を深めることができました。

0 歳児からの連続した育ちに目を向け，言葉にできない小さな心の声を保育者が受け止め，子どもに返していくことの大事さ，家庭とは違う大人との安心感の中で育つことへの配慮，工夫等，討議シートを活用することでより明確になってきました。「子どもへの関わり」「保護者への関わり」「保育の振返り」と項目ごとに互いに意見を出すことで，新たな視点が見えてきたり，それまで悩んでいたことの解決の糸口が見えてきたりとプラス面を多く吸収することができました。

こうした会合に参加して得たことを機に今後，京都の保育の発展に向けて自身の力を大きく広めていければと思います。当初からテーマとしてあげられた「かけがえのない子どもの成長を見守るために」様々な園(所)の保育者と出会え，互いに学び合えたことは貴重かつ大変意義深いものでありました。

＊＊＊＊　守友富士子　京都市鏡山保育所（市営保育所）平成 19，20 年度　＊＊＊＊＊

2 年間この研究プロジェクトに参加させていただき，国公立・私立の保育園(所)・幼稚園の垣根を越えて，乳幼児期に大切にしたいことについて検討し合えたことはとても意義のあることでした。

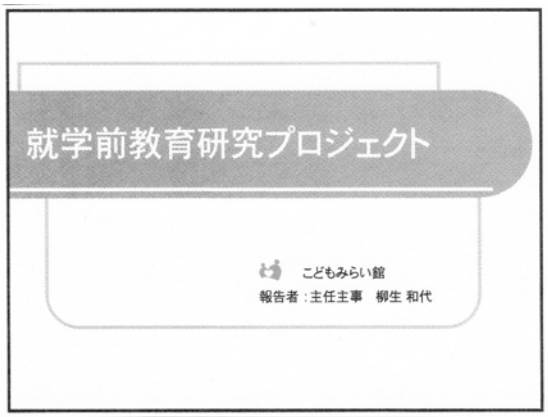
１年目は，他の保育者の一つ一つの事例の読取り方や深い洞察に感心し，エピソードの検討を通して多くの学びがあることを教えていただきました。また，事例検討だけでなく，

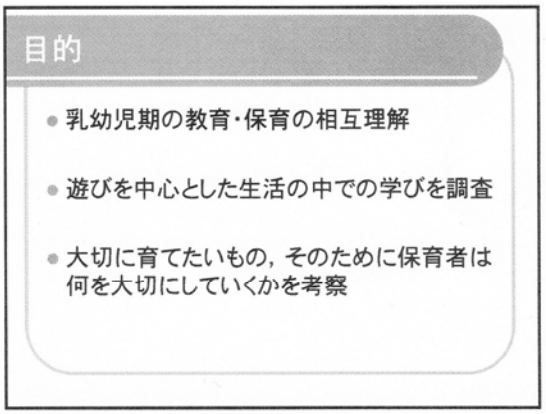
乳幼児期の保育についてパワーポイントでの実践報告や，幼稚園の公開保育に参加することで，子どもの育ちにとって人的環境や物的環境を整えることと援助の仕方の重要性について肌で感じ，学ぶことができました。

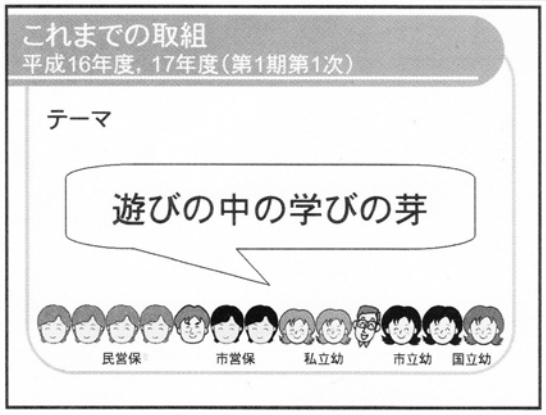
2 年目は，幼児期につけておきたい力の土台として「子どもの心の育ち」に焦点を当て，事例検討を進めました。4～5 人の小グループに分かれ討議シートを用いながら討議をするという方法になり，子どもの心の動きや，保育者の関わり方等についてより深く考えるようになり，お互いの意見を聞きながら気付くことがたくさんありました。

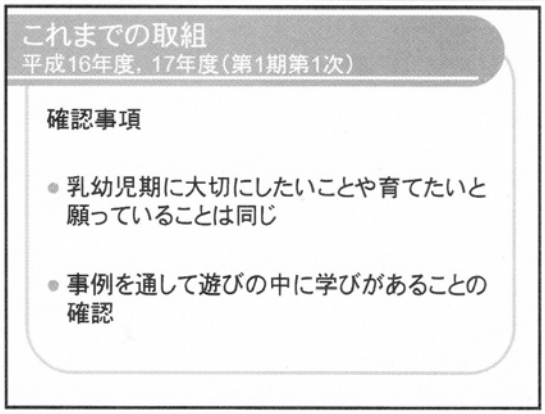
この研究プロジェクトとして，就学前を小学校入学前ととらえるのではなく，0 歳からの連続した育ちととらえ確認し合った意義は大きいと思います。保育園(所)，幼稚園の垣根を越えた熱心な討議があればこその成果だと思います。乳幼児期からの心の育ちに目を向け，一人一人の子どもを受け止め，保育者との信頼関係を築き，丁寧な関わりの中で自己肯定感を育み，仲間と一緒に生きていく力を育てることをこれからも大切にし，実践していきたいと思います。

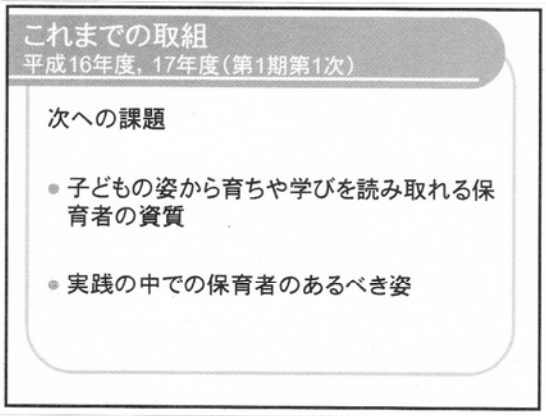
平成 20 年 12 月８日　報告会配布資料（エピソードと討議シート含む）

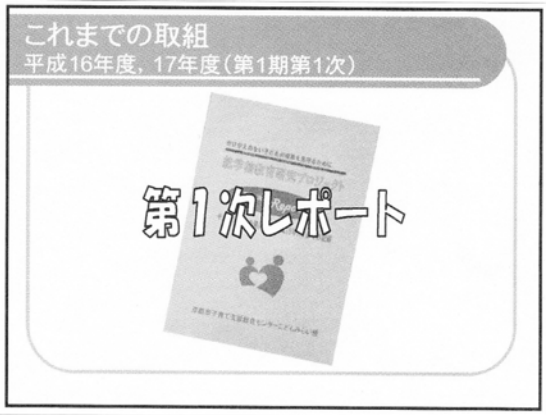


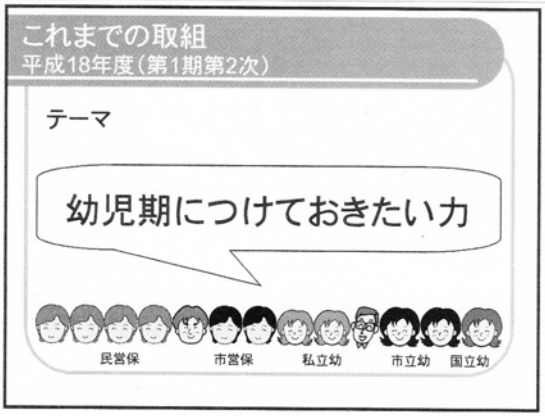


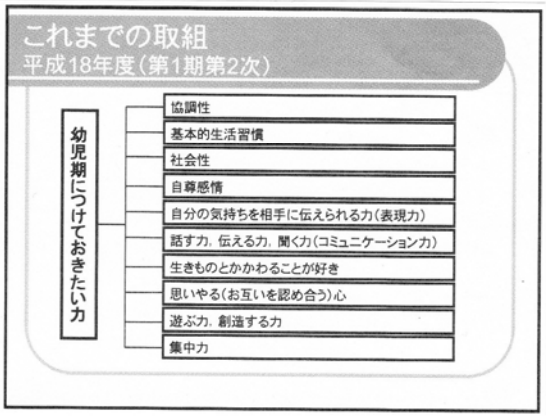












これまでの取組
平成18年度（第1期第2次）

確認事項
つけておきたい力

経験を通し
自ら気付き
行動し
子ども自らが
つけていく

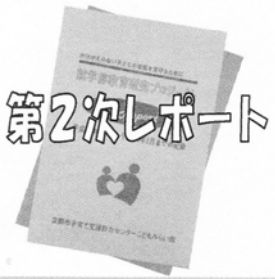
- ねらいをもった意図した環境づくり
- 気付きを待ち変化に気付く
- 仲間関係を築く
- 保護者へ何が大切か伝える

これまでの取組
平成18年度（第1期第2次）

次への課題

- 確認事項の行動提起

これまでの取組
平成18年度（第1期第2次）



これまでの取組
平成19年度（第2期）

テーマ

「幼児期につけておきたい力」を育むためには，どのような環境や保育者の援助が必要か

これまでの取組
平成19年度（第2期）

確認事項

- 「子どもの心を育む」視点に立った環境構成や援助
- 就学前 → 0歳からの連続した育ち

20年度の取組

テーマ

子どもの心の育ち

20年度の取組

これまでの方法の利点と課題
- 事例は形式を問わない
- 当日持ち合う

利点	課題
・新鮮で熱く語れる ・話し合いは楽しく膨らみ広がる	・観点が絞りにくい ・テーマに深く切り込んでいきにくい

20年度の取組

方法の工夫
- 事例を最初に持ち寄り，事前に読んでおく
  - 「基本的生活習慣」の場面で
  - 「人とのかかわり」の場面で
  - 「生命の大切さに気付く」場面で

20年度の取組

方法の工夫
- 事例を最初に持ち寄り，事前に読んでおく
- 事例をエピソード記述で描く
  - 「なぜこの事例を取り上げたのか」
  - 「子どもの背景」
  - 「子どもの姿と保育者のかかわり」
  - 「子どもと保育者の心の動き」

20年度の取組

方法の工夫
- 事例を最初に持ち寄り，事前に読んでおく
- 事例をエピソード記述で描く
- グループに分かれての討議
- 討議シートの使用

20年度の取組

討議シート

現状分析		他に考えられるかかわり	
保育者の願いとかかわり	子ども(保護者)の心の動き	保育者の願いとかかわり	子ども(保護者)の心の動き
変化があったこと		エピソードから見えてくる大切な視点	
子ども(保護者)の変化	保育者の心の動き		

20年度の取組

A先生のエピソード記述
- 場面：人とのかかわり

  グループに分かれて保育室の壁面に飾るアジサイを紙で作る
- 取り上げた理由

  子ども同士で話し合い，グループ活動を進めていくことができた

20年度の取組

A先生のエピソード記述の討議シート

現状分析		他に考えられるかかわり	
保育者の願いとかかわり	子ども(保護者)の心の動き	保育者の願いとかかわり	子ども(保護者)の心の動き
変化があったこと		エピソードから見えてくる大切な視点	
子ども(保護者)の変化	保育者の心の動き		

20年度の取組

A先生のエピソード記述の討議シート

現状分析	
保育者の願いとかかわり	子どもの心の動き
・ 自分たちで進めてほしいので，子どもたちにまかせよう。 ・ 自分の思いを出してほしい。 ・ 困っている友達に気付き，助け合ってほしい。	・ C児が伸び伸びと意見を言っていた。 ・ G児が友達に助けてもらいホッとしている。 ・ できたものに愛着をもっている。

20年度の取組

A先生のエピソード記述の討議シート

現状分析		他に考えられるかかわり	
保育者の願いとかかわり	子ども(保護者)の心の動き	保育者の願いとかかわり	子ども(保護者)の心の動き
変化があったこと		エピソードから見えてくる大切な視点	
子ども(保護者)の変化	保育者の心の動き		

20年度の取組

A先生のエピソード記述の討議シート

他に考えられるかかわり	
保育者の願いとかかわり	子どもの心の動き
・ グループの人数・メンバーの工夫。 ・ ねらいに添った活動内容。	・ 今まで以上に自分を出しやすい。 ・ 新たな友達関係が広がる。 ・ やり遂げた達成感や満足感が得られる。

20年度の取組

A先生のエピソード記述の討議シート

現状分析		他に考えられるかかわり	
保育者の願いとかかわり	子ども(保護者)の心の動き	保育者の願いとかかわり	子ども(保護者)の心の動き

変化があったこと		エピソードから見えてくる大切な視点
子ども(保護者)の変化	保育者の心の動き	

20年度の取組

A先生のエピソード記述の討議シート

変化があったこと	
子どもの変化	保育者の心の動き
・ 製作が得意なG児が動き出さない。 ・ 友達の誘いかけにより，G児がやり始めた。	・ G児の評価が気になる一面の発見。今後の課題。

20年度の取組

A先生のエピソード記述の討議シート

現状分析		他に考えられるかかわり	
保育者の願いとかかわり	子ども(保護者)の心の動き	保育者の願いとかかわり	子ども(保護者)の心の動き

変化があったこと		エピソードから見えてくる大切な視点
子ども(保護者)の変化	保育者の心の動き	

20年度の取組

A先生のエピソード記述の討議シート

エピソードから見えてくる大切な視点
・ どこまで子どもにまかせ，どこから援助するかの見極めの大切さ。 ・ グループ構成，教材，材料など環境構成の見直しの大切さ。 ・ 子どもに何を育てるかを根底とした環境構成と援助の大切さ。 ・ 他の保育者と話し合い，改めて自分の保育を見直す大切さ。

20年度の取組

B先生のエピソード記述

- 場面：基本的生活習慣

  子育ての方法について強く自分の思いをもっておられる保護者とのやりとり

- 取り上げた理由

  保護者との信頼関係を築いていく過程や子どもが安心して園(所)で過ごすことことについて改めて考えることができた

20年度の取組

B先生のエピソード記述の討議シート

現状分析		他に考えられるかかわり	
保育者の願いとかかわり	子ども(保護者)の心の動き	保育者の願いとかかわり	子ども(保護者)の心の動き

変化があったこと		エピソードから見えてくる大切な視点
子ども(保護者)の変化	保育者の心の動き	

20年度の取組

B先生のエピソード記述の討議シート

現状分析	
保育者の願いとかかわり	保護者の心の動き
・ 園(所)側の考えを伝えたい。 ・ まずは，信頼関係を築く。 ・ 保護者の思いを受け止める。 ・ 園(所)内で話し合い，受け入れる。	・ 自分の子育ての方法をそのまま園(所)でもしてほしい。 ・ 受け入れてもらっていない。 ・ 受け止めてもらえた。 ・ 子どもが変わる → 母の笑顔

20年度の取組

B先生のエピソード記述の討議シート

現状分析		他に考えられるかかわり	
保育者の願いとかかわり	子ども(保護者)の心の動き	保育者の願いとかかわり	子ども(保護者)の心の動き

変化があったこと		エピソードから見えてくる大切な視点
子ども(保護者)の変化	保育者の心の動き	

20年度の取組

B先生のエピソード記述の討議シート

他に考えられるかかわり	
保育者の願いとかかわり	保護者の心の動き
・ 入園(所)説明会の段階で，まずは受け入れる。 ・ 他の方法を保護者と一緒に考える。	・ 受け入れてもらえたことで，安心する。

20年度の取組

B先生のエピソード記述の討議シート

現状分析		他に考えられるかかわり	
保育者の願いとかかわり	子ども(保護者)の心の動き	保育者の願いとかかわり	子ども(保護者)の心の動き
変化があったこと		エピソードから見えてくる大切な視点	
子ども(保護者)の変化	保育者の心の動き		

20年度の取組

B先生のエピソード記述の討議シート

変化があったこと	
保護者の変化	保育者の心の動き
・ 目を見て話をしてくれる。	・ まずは，保護者の思いを受け止める。 ・ 園(所)内で話し合い，園(所)のねらいも伝えながら返していく。 ・ 答えを与えるのではなく，一緒に考える。

20年度の取組

B先生のエピソード記述の討議シート

現状分析		他に考えられるかかわり	
保育者の願いとかかわり	子ども(保護者)の心の動き	保育者の願いとかかわり	子ども(保護者)の心の動き
変化があったこと		エピソードから見えてくる大切な視点	
子ども(保護者)の変化	保育者の心の動き		

20年度の取組

B先生のエピソード記述の討議シート

エピソードから見えてくる大切な視点
・ 思いを一旦受け止める。言葉の背景を読む。 ・ 「子どもの育ち」を根底にして考える。 ・ 共に考えていく姿勢をもつ。 ・ 子どもが育っている様子を丁寧に伝える。 ・ 他の保育者から様々な情報，アドバイスをもらう。

20年度の取組

討議シートの効果

- 話し合う観点の焦点化
- 子ども(保護者)の心の動きの読み取り
- 保育者の願いの意識化
- 視点をかえた環境構成や援助の提案

20年度の考察と今後の課題

エピソード記述と討議を通して見えてきた保育の視点

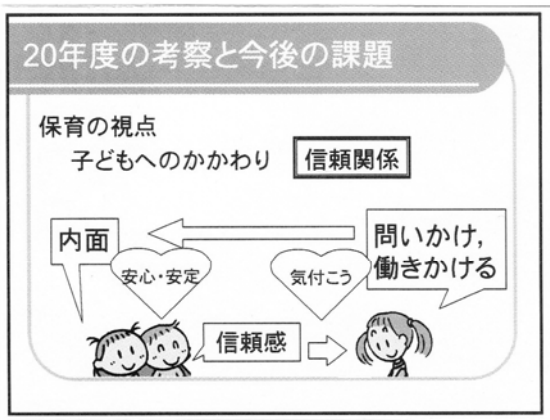
- 子どもへのかかわり
- 保護者へのかかわり
- 組織的な振り返り

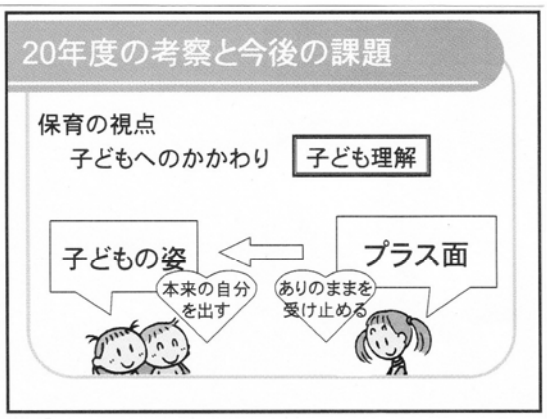
20年度の考察と今後の課題

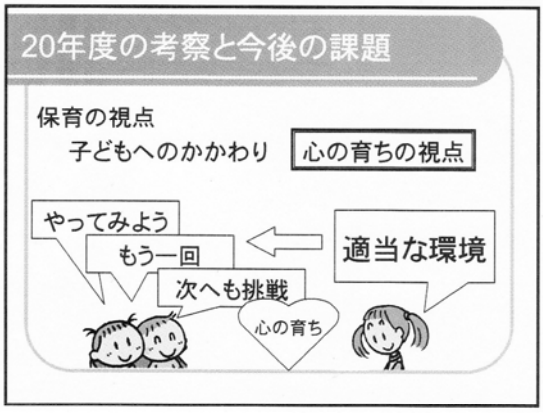
保育の視点

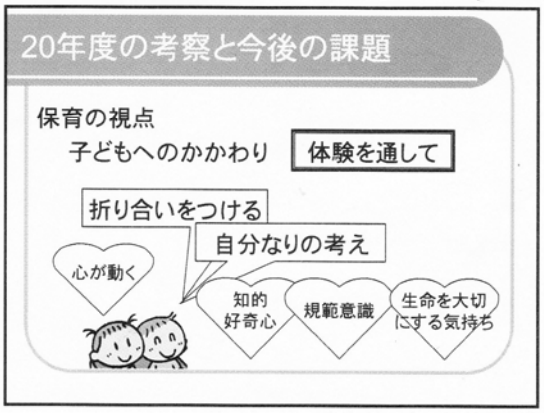
子どもへのかかわり

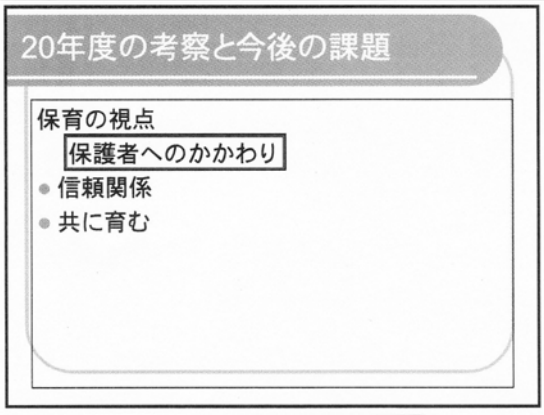
- 信頼関係
- 子ども理解
- 心の育ちの視点
- 体験を通して

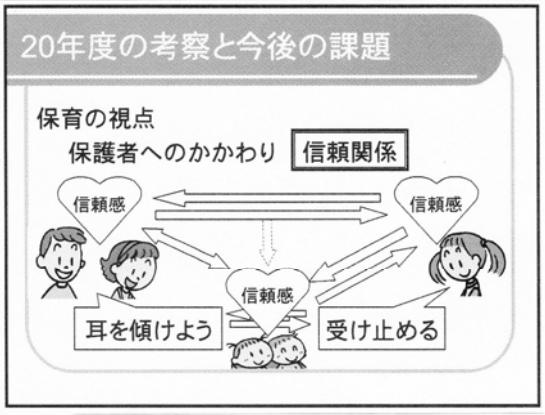

20年度の考察と今後の課題
保育の視点
子どもへのかかわり
信頼関係
内面
安心・安定
気付こう
問いかけ，働きかける
信頼感

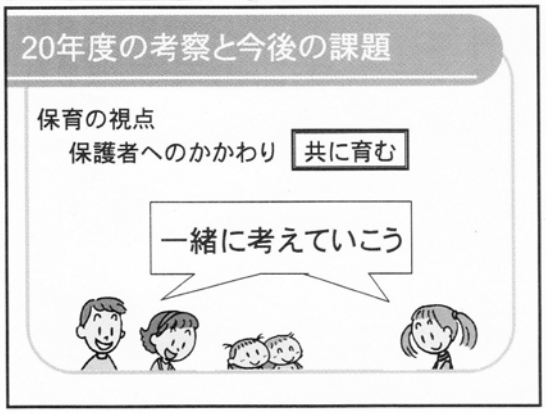

20年度の考察と今後の課題
保育の視点
子どもへのかかわり
子ども理解
子どもの姿
本来の自分を出す
プラス面
ありのままを受け止める

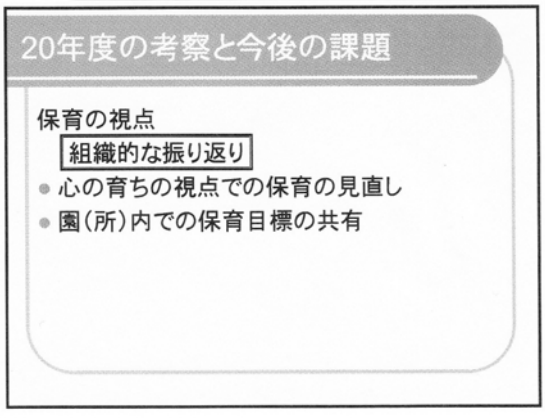

20年度の考察と今後の課題
保育の視点
子どもへのかかわり
心の育ちの視点
やってみよう
もう一回
次へも挑戦
心の育ち
適当な環境

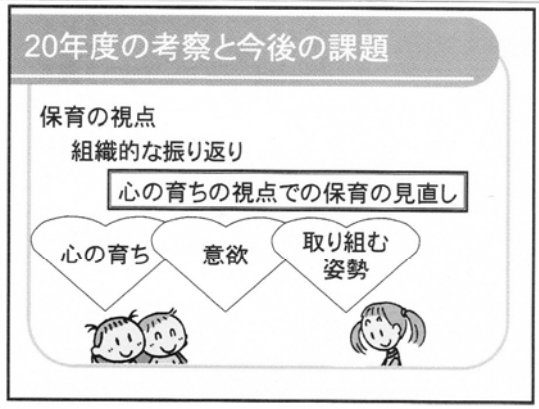

20年度の考察と今後の課題
保育の視点
子どもへのかかわり
体験を通して
折り合いをつける
自分なりの考え
心が動く
知的好奇心
規範意識
生命を大切にする気持ち

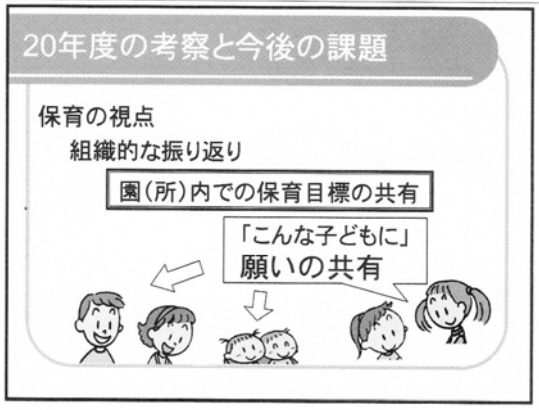

20年度の考察と今後の課題
保育の視点
保護者へのかかわり
信頼関係
共に育む

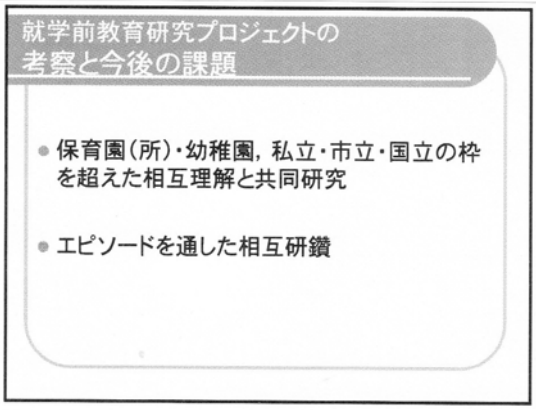

20年度の考察と今後の課題
保育の視点
保護者へのかかわり
信頼関係
信頼感
信頼感
信頼感
耳を傾けよう
受け止める


20年度の考察と今後の課題
保育の視点
保護者へのかかわり
共に育む
一緒に考えていこう

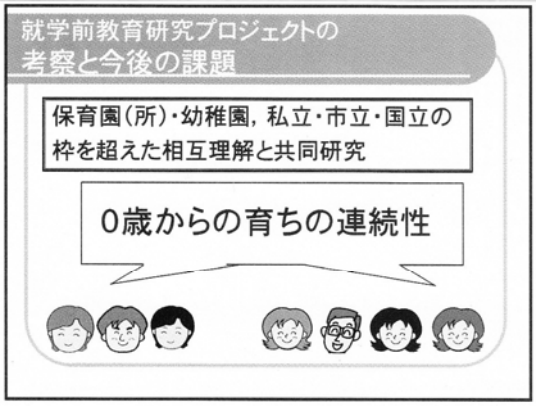

20年度の考察と今後の課題
保育の視点
組織的な振り返り
心の育ちの視点での保育の見直し
園（所）内での保育目標の共有

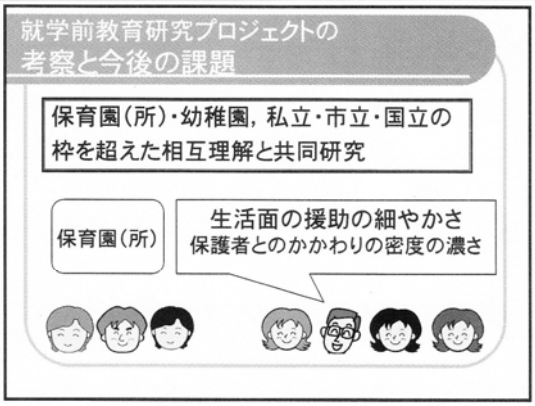

20年度の考察と今後の課題
保育の視点
組織的な振り返り
心の育ちの視点での保育の見直し
心の育ち
意欲
取り組む姿勢


20年度の考察と今後の課題
保育の視点
組織的な振り返り
園(所)内での保育目標の共有
「こんな子どもに」
願いの共有

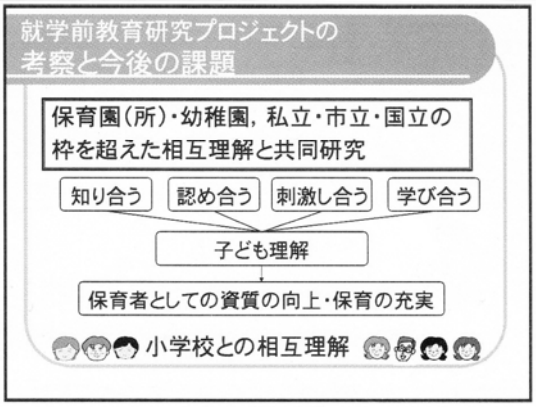

就学前教育研究プロジェクトの
考察と今後の課題
保育園(所)・幼稚園，私立・市立・国立の枠を超えた相互理解と共同研究
エピソードを通した相互研鑽

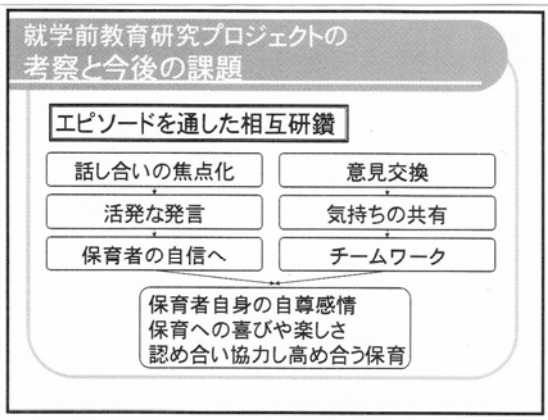
就学前教育研究プロジェクトの
考察と今後の課題
保育園(所)・幼稚園，私立・市立・国立の枠を超えた相互理解と共同研究
育てたいことは一緒

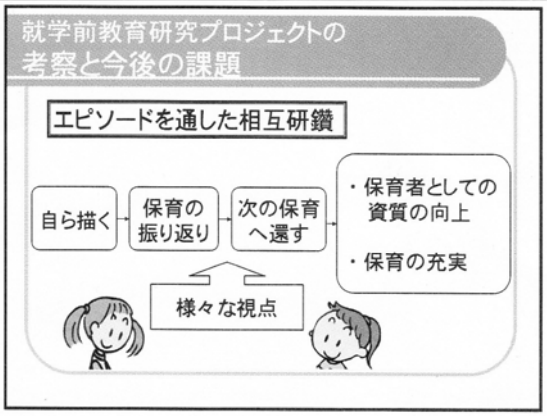

就学前教育研究プロジェクトの
考察と今後の課題
保育園(所)・幼稚園，私立・市立・国立の枠を超えた相互理解と共同研究
0歳からの育ちの連続性


就学前教育研究プロジェクトの
考察と今後の課題
保育園(所)・幼稚園，私立・市立・国立の枠を超えた相互理解と共同研究
保育園(所)
生活面の援助の細やかさ
保護者とのかかわりの密度の濃さ

就学前教育研究プロジェクトの
考察と今後の課題
保育園(所)・幼稚園，私立・市立・国立の枠を超えた相互理解と共同研究
遊びの捉え方，遊びを中心とした環境・援助の深さ
幼稚園


就学前教育研究プロジェクトの
考察と今後の課題
保育園(所)・幼稚園，私立・市立・国立の枠を超えた相互理解と共同研究
知り合う
認め合う
刺激し合う
学び合う
子ども理解
保育者としての資質の向上・保育の充実
小学校との相互理解


就学前教育研究プロジェクトの
考察と今後の課題
エピソードを通した相互研鑽
話し合いの焦点化
意見交換
活発な発言
気持ちの共有
保育者の自信へ
チームワーク
保育者自身の自尊感情
保育への喜びや楽しさ
認め合い協力し高め合う保育


就学前教育研究プロジェクトの
考察と今後の課題
エピソードを通した相互研鑽
自ら描く
保育の
振り返り
次の保育
へ還す
・保育者としての
資質の向上
・保育の充実
様々な視点

最後に
かけがえのない子どもの
成長を見守るために

A先生のエピソード記述

① エピソードを取りあげた理由

子ども同士での話し合いで，今まではそれぞれが主張するだけでなかなかまとまらないことが多かった。時間がかかり，友だちの考えを聞いてどうしたらよいかを考えるように仲介していった。

今回も，他のグループよりも時間はかかったが子どもたちだけで相談し決めることができ，成長を感じた。

② 対象の子どもの背景

年長児18名（男児7名，女児11名）のクラス。6人のグループが3つある。

4月5月，グループの友だちと相談するときに自分の考えは出し合うが，友だちの意見を聞いたり受け入れたりできず，なかなか決まらない姿がある。解決策を皆で考え出せるようになって欲しい。

<4月5月の話し合いの姿>

- C児（男児）　・・・・小学校3年生の兄がいる。自分の考えや思ったことを話す。話し合いをなんとか早く決めたいという気持ちはある。仲の良いD児を含めて2，3人の考えは聞こうとする。
- D児（男児）　・・・・小学校2年生の姉がいる。自分の考えを通るように繰り返し主張する。
- E児（女児）　・・・・1歳の妹がいる。自分の意見をはっきり言う。
- F児（女児）　・・・・一人っ子。仲の良い女児と相談して意見を言うことが多い。
- G児（女児）　・・・・中学校1年生と小学校5年生の姉がいる。自分の考えはあるが，話し合いがまとまらないと困惑する。
- H児（男児）　・・・・あまり自分の考えを話さない。友だちと遊ぶときも相手の意見を受け入れることが多い。

<願い>

それぞれの考えを持ち，友だちの気持ちも知って，皆で納得して話し合えるようになって欲しい。

③ エピソード

壁面製作のアジサイを作っている。折り紙で一人一人作った花を，グループで画用紙を半分に折ってアジサイの土台を作り，花を貼り付けようとしている。どのような形にするか誰が描いて切るかなど相談している。

G児	画用紙の前で鉛筆を持ってアジサイを描こうとしているがなかなか描き始めない。
C児とD児	描きたいと話し，次誰が描くか2人で話している。
C児	「こっち（C児）とこっち（D児）でしよう！」と指差しながら話す。
D児	「じゃあ，これ（G児）とこれ（D児）とこれ（C児）でやったらいいやん。」
C児	G児に「ふわふわしたのでいいやん。」
G児	「・・・」（どんな形を描いたらよいかわからず迷っている）
G児	「どうしたらいいかわからへん…」
E児	他のグループは話し合いが決まり，作り出しているのを見て「もうやろう。」
H児	「やるぞー！」
D児	「ほんなら，上描いて。ボク下描くわ。」
C児	「わかった。」G児から紙と鉛筆を受け取り描き始め
D児	C児が上半分描き，下の方も描き始めたのを見て，「ちょっとー，下ボクが描くって言ったやん。貸して。」
C児	「あぁ，そやった。はい。（と言って紙を渡す）」描き始める。
E児	「できた？切ろうか？」
F児	「切ろうか？」女児2人で紙を持ち，両側から切り始める。
C児	「ほんなら，オレこっちから切るわ。」
D児	「じゃあ，オレ代表で切るわ。」空いているところを男児2人も入って切り始める。
C児	「Hくんも1回くらいやったら？」
H児	空いているところから切り始める。
H児	「なんかここ難しいな。」

④ 考察

- 今回は話し合いをするなかで，他のグループの話し合いが終わり作り始める様子を見て，自分たちもそろそろ決めようという気持ちが持てたようだった。目に見える形での時間の経過を感じやすかったのだと思う。
- G児は自分で作りたくてもどうしてよいか分からず悩む様子があった。本人が悩みながらも自分の力でできるように助言をしたほうがよかったのか悩む。しかし，友だちに代わりにやってもらったことで自分たちのグループのアジサイができ喜んでいた。
- H児は友だちの意見は聞き入れることが多いが，あまり話し合いに主体的に参加することが少ない。もう少し保育者の働き掛けをしたほうがよかったのか。最後にC児がH児にも参加するように声を掛けたことで，一緒に取り組むことができた。

就学前教育研究プロジェクト

【保育者の関わりと心の育ち】　エピソード：人との関わりの場面（A先生・幼稚園5歳児）

討議シートA

<table>
<tr><th colspan="2">現状分析（ポイントとなる場面を焦点化する）
子ども（保護者）の思いに寄り添って</th><th colspan="2">他に考えられる関わり</th></tr>
<tr><td>保育者の願いと関わり
・ 子どもたちで相談するなかで，皆の意見を受け入れながら進めて欲しいため，あえて口出ししなかった。
・ C児がいつも保育者に同意を求める様子が気になっていたので，今回は同意を求めず自分たちの力でやってみて欲しい。
・ グループの中で困っている子どもに対して優しい気持ちを持ち，気付いて欲しい。
・ グループ内での揉め事は，皆で作りあげる体験として貴重なので，「良かったね」と受け止めていきたい。</td><td>子ども（保護者）の心の動き
・ C児は担任の様子を気にしながら意見を言っていたが，担任がそ知らぬ顔をしているのを見て，比較的伸び伸びと意見を言っていた。
・ G児はどのようにやってよいか分からなかったが，「グループの友だちが助けてくれて良かった。」とホッとしていた。
・ できあがってからアジサイの下に個々の名前を書いたり，どこに貼りたいかを皆で言いにきたりした。グループで仕上げたことが嬉しく，また揉めた分，作品への愛着が深まった。
・ 4月，5月は，自分の意見を好き勝手に言い，その意見を担任に訴えるという状況だったので，今回は少し相手の意見も聞けるようになってきた。</td><td>保育者の願いと関わり
・ 遊びの中で仲良し(気心が知れている)グループで製作をしてみると，意見が出せたり聞いたりできたかもしれない。
・ それぞれの活用・場面に応じて，仲良しグループや違うタイプのグループ等のメンバーの工夫をすると変わってくる。
・ 揉め事をあえて避けるのではなく，揉め事も大切な要素となる。
・ 人数をもっと少なくすれば自分を出しにくい子どもも意見を言わざるを得なくなる。
・ あえて仲良しグループでは組んでいない。
・ できあがりに型があるものではなく，もっと自由性のあるものの方が，お互いを出し合える。</td><td>子ども（保護者）の心の動き
・ 日頃からざっくばらんに話せているので，相手の意見も聞きやすい。
・ 得意分野では，普段意見を出さない子どもも力を発揮していけたりする。
・ 揉めながら皆で決めたことで達成感・満足感が得られる。
・ H児も積極的に参加できたかもしれない。
・ 最初は気を遣っているが，他の場面で仲良く遊んだりしている。</td></tr>
<tr><th colspan="2">変化があったこと（なぜ変化したか）</th><th colspan="2">エピソードから見えてくる大切な視点</th></tr>
<tr><td>子ども（保護者）の変化
・ G児は困っていたが，他の子どもに助けてもらえたことで安心できた。
・ G児は，個人製作は得意だが，グループ製作になると他人の反応がすごく気になる。
・ C児は，周りの反応を探る。</td><td>保育者の心の動き
・ G児は，初めてのことに対しても1番にはしない。製作は得意でやってみたい気持ちは強かったが，他の子どもに夕駄目出しされるのが嫌だった。</td><td colspan="2">・ どの程度まで保育者がレールを敷くべきなのか悩む。
・ 子ども同士の話し合いの人数も考慮する必要がある。
・ 同じタイプの子どもが集まることで，また違う部分で自身につながったり安心できたりする。
・ グループ作りに対して，自分の考えに幅があると思っていたが，他の意見を聞くと，別の見方ができて良い。
・ 提供したテーマが「アジサイ」で型にはまっているので，泥や粘土などで結果の形にこだわらないものであれば思いもぶつけやすい。
・ 子どもに何を育てたいのかという目的をはっきりさせてグループ作りをしていく必要がある。
・ グループ作りの視点，人数，テーマ，素材等について考えを深めることができた。</td></tr>
</table>

B先生のエピソード記述

＜背景＞

○ **クラスの状況**

0歳児5名（継続児1名，4月入園(所)4名）を2名の保育士が担任しており，一人一人の子どもに丁寧に関わることで信頼関係を築き，乳児で大切な生活習慣を自然に身に付けていくため，担当制を導入している。

○ **入園(所)時の本児の状況**

4月入所のI児は，第1子であり，5月で1歳になる。

入園(所)時は，保育園(所)に慣れないため睡眠が十分にとれず，また，食事やおむつ交換時は大泣きして拒否したり，保育士に抱っこされることを嫌がり一日中泣いたりしている。園庭に出ると落ち着くのか泣き止むが，言葉掛けをしても目が合うことがない。入園(所)後，約2週間で保育園(所)に慣れてきたためか，泣くことも少なくなり，室内で落ち着いて過ごせるようになり探索遊びを始めるが，おもちゃを投げたり，噛んだりする行動が多い。

○ **入園(所)時の母の状況**

昨年度から，保育園(所)の子育て支援事業に母子で参加。近くのマンションに夫とI児の3人暮らし。母は自分の思いが強く，保育士の話をなかなか聞き入れてもらいにくい。

I児の送迎は，慣らし保育中は母が行っていたが，以降は南区に住まわれている母方の祖母が主にされており，また，家族の食事の支度も殆ど毎日，祖母がされている。母は，発達に合わせた離乳食に対しては反発的で「食事は大きくなったら食べられるようになる」という主張があり，本年4月（保育園(所)で離乳食が始まる）まで，主として母乳（一部粉ミルク），初期の形態の離乳食で育っている。

＜母とのエピソード：「こだわりのピーンスターク」＞

入園(所)時，哺乳瓶の乳首の形状等を確認したときに，使っているのは「ピーンスターク」とのことであったが，保育園(所)ではピジョンの乳首しか置いていなかったため，了承いただいた。しかしながら，慣らし保育において初めて離乳食と授乳（粉ミルク）を試みたが，全く口に含まなかったため，迎え時に母に伝えたところ，哺乳瓶と残っている離乳食を見て，I児の方に向かって「こんな乳首イヤやな。こんな硬いもの食べられへん。」ときつい口調で言われた。続いて，「明日，ピーンスタークの乳首を家から持ってくる。」と言われたが，即断できなかったため「Iちゃんにとって一番いい方法を考えますので，少し時間を下さい。」と伝えた。その後，家庭で使われている乳首を保育園(所)で購入することが可能となったが，I児の母へは再度，意思確認を行ったうえで対応することとした。

その翌日の迎え時にピーンスタークの乳首を実際に持ってこられ，再度，保育園(所)で使っていたヌークやピジョンなどの乳首を勧めてみたが，「そんなん全部あかん。」と取り付くしまがなかった。「購入するまで少し時間が掛かるので，それまでお母さんから預かっている，その乳首を使わせてください。」と話したところ，初めて母の硬い表情が和らぎ，「そんなん何時でもいいよ。」と弾むような口調で言われた。

その翌日に母から預かった乳首を使ったところ，I児はミルクをよく飲み，離乳食（野菜のやわらか煮など初めての固形状の離乳食）についても完食したので，迎え時にその旨を母に伝えたところ，保育士に対しては何のコメントもなかったが，I児に向かって「やっぱりこれが良かったんやんなあ。」と話し掛け，そのときに初めて母の笑顔を見た。

その翌日から，I児は，保育士が見守るなか，自らおもちゃで遊び始めるなど，泣かずに室内で過ごせる時間が見られるようになり，また母においては，保育士の目を見て，話をしてくれるようになった。

＜考察＞

0歳児クラスの担当保育士として，当初，保護者から出される個々の要望の受け入れに迷いがあった。理由は，

① 母乳で育っている乳児は保育園(所)の乳首に慣れないことが多く，I児も次第に飲めるようになるのではないか。

② I児の母の要求であった「こだわりの乳首」を受け入れてしまうと，他の保護者からも同じように要望があれば，個々に対応しなければならなくなる。

③ 乳首以外にも，いろいろと思いが強い要求が多い保護者である。

の3点である。

「ピーンスタークの乳首」だけでなく，「離乳食の進め方」等保護者の思い（保護者としてのこだわり？）を受け入れることは，私にとって悩ましく，難しい問題であった。しかしながら，今回の事例は，母との信頼関係を築くきっかけとなっただけでなく，I児が安心して保育園(所)で過ごせるきっかけにもなったと思う。

また，0歳児の保育をしていくなかで，保育園(所)において家庭と同じ環境を作っていくことは，子どもの情緒を安定させるうえで重要なことであり，そのことを改めて気付かせてくれた。

就学前教育研究プロジェクト

【保育者の関わりと心の育ち】　エピソード：基本的生活習慣の場面（B先生・保育園(所)0歳児）

討議シートB

<table>
<tr><th colspan="2">現状分析（ポイントとなる場面を焦点化する）
子ども（保護者）の思いに寄り添って</th><th colspan="2">他に考えられる関わり</th></tr>
<tr><td>保育者の願いと関わり
・　保育園(所)のやり方があるということを分かって欲しい。
・　園(所)のものでも試せるようにしていきたい。
・　母親との信頼関係をまずは一番に。ビーンスタークの乳首を購入する。
・　ミルクは乳児にとって，命に関わること。飲まないということは小さな体にとっては大変なこと。全く飲まないままではだめ。様々な試しの結果，受け入れることに。
・　子どもと保護者の関係がとても密着している。子どもが変わってくると，親も変わってくる。</td><td>子ども（保護者）の心の動き
・　入園(所)前から様々な要求があった。
・　素直には受け入れられない。子どもも慣れていないから園(所)への不信感。
・　家のものを使って欲しい!!家のと違うからダメなんだ。
・　ほんの少し壁が薄くなる。自分の思いを理解してもらえたという思い。I児の安心感もあり，ミルクを飲めた。
・　母親の心が開くと，子どもも変化してきて，安定してミルク・離乳食も完食→母の笑顔</td><td>保育者の願いと関わり
・　0歳の入園(所)説明会で，哺乳瓶の乳首については「何を使っていますか？」と3種類程を提示し，「この中のものを使ってみますか？これではダメですか？」などと提示する。「どうしてもこれを使いたい。」という人には個別に対応している。
・　凍らせた母乳をスプーンで一口ずつ与え，味を知ってから少しずつ哺乳瓶の乳首に慣れていけるようにするなど工夫をしている。</td><td>子ども（保護者）の心の動き
・　自分の思い，考えを受け入れてもらえている。最初に聞くことで安心できる。</td></tr>
<tr><th colspan="2">変化があったこと（なぜ変化したか）</th><th colspan="2">エピソードから見えてくる大切な視点</th></tr>
<tr><td>子ども（保護者）の変化
・　目を見て話をしてくれるようになっている。</td><td>保育者の心の動き
・　一方的に言われたときに，「また言いに来た。」という感情的な思いになってしまうが，冷静になってみると見えてくることがあると思う。
・　エピソードを書いたときに，この人に対しては一歩引いて話をすれば，寄り添ってくれるんだということに気付く。
・　関係を築きにくい保護者に対して，「～だから～です。」としっかりと根拠を話す。
・　保護者の思いを一旦受け入れてから返す。保護者は，様々なことを思って言いにきているのだからワンクッション置く。他の職員の考えも取り入れていく。即答することだけにならないように。
・　答えを出すのではなく，保護者に相談を投げ掛けるような感じにする。</td><td colspan="2">・　思いを一旦受け止める。言葉の裏に隠された真意を読む。
・　気持ちを受け止めることは大切だが，要求をすべて受け入れるのではなく，子どもの育ちのために一緒に考えていく。
・　決定したことだけを一方的に言うのではなく，投げ掛けたり相談を持ち掛けたりするなど，共に考えていく姿勢を持つ。
・　子どもの育っている様子，良い育ちを丁寧に（「楽しく遊んでいました。」という報告は誰でもできる。担任のみが知るその子の姿を）伝えていくことで，信頼関係ができ，子どもも親も，そして保育者も育っていくことができる。
・　他の職員から様々な情報，アドバイスをもらう。違う方向からの視点をもらえる。</td></tr>
</table>

就学前教育研究プロジェクト

【保育者の関わりと心の育ち】　エピソード：　の場面

平成　年　月　日（ ）

討議シート

現状分析（ポイントとなる場面を焦点化する） 子ども（保護者）の思いに寄り添って		他に考えられる関わり	
保育者の願いと関わり	子ども（保護者）の心の動き	保育者の願いと関わり	子ども（保護者）の心の動き
変化があったこと（なぜ変化したか）		エピソードから見えてくる大切な視点	
子ども（保護者）の変化	保育者の心の動き		

第3　研究プロジェクトのまとめ

第３　研究プロジェクトのまとめ

１　研究プロジェクト報告会の総括

(1)　報告会の目的

昨年 12 月 8 日に，市内の保育士・幼稚園教諭をはじめ，子育て支援団体の方や京都市以外の行政関係者等 100 名を超える参加者を得て，「研究プロジェクト報告会」を開催いたしました。

この「報告会」を開催したのは，各研究プロジェクトとも発足以来５年が経ちこれまでの取組を取りまとめる節目を迎えていたこともありますが，平成 21 年度はこどもみらい館が開館 10 周年となり，新たな研究活動を検討していくうえで，保育園(所)・幼稚園はもとより，子育て支援に携わる多方面の方々からの御意見を頂きたかったからであります。

また，各研究プロジェクトは，前述したとおり，それぞれの進捗状況に応じて，報告書やレポート，パンフレット等の形で，研究成果やまとめを発信してきましたが，それは紙面発表の域を出ていない謂わば一方通行の発信であり，保育士や幼稚園教諭等に対面することで，生のご意見を得ることができると考えたからであります。

(2)　報告会までの経過

「研究プロジェクトの発足」で記述したとおり，こどもみらい館における研究は「共同機構」としての取組であります。従って，報告内容も，こどもみらい館単独ではなく，各研究プロジェクトに参加する委員等の総意であると同時に，「共同機構」としての意見を反映したものでなければなりません。

このため，各研究プロジェクトにおける議論とともに，こどもみらい館企画推進会議（研究・研修部会含む）からの意見を頂くなかで，報告内容を取りまとめていきました。

例えば，平成 20 年 10 月 2 日の企画推進会議においては，「乳幼児子育て支援研究プロジェクト」に対して「外国籍市民の方への子育て支援に関わる姿勢」についての御意見を頂き，次に「地域と結ばれた事例研究プロジェクト」には，「平成 18 年度までの考察との関係性や継続性をもっと明らかにした報告にすべき」との御意見を頂きました。最後に「就学前教育研究プロジェクト」に対しては，「自然体験の重要性」「子どもの心の安定に対する保育士の視線」等，保育の本質に迫る御意見を頂きました。

(3)　報告会の成果

以上のように様々な方から，時間を惜しむことなく貴重な御意見を頂きながら，報告内容を取りまとめ，また，当日さながらの予行演習を 2 回行うなどして，12 月 8 日を迎えることになりました。

報告会には，時間の関係もあり，各研究プロジェクトとも数名の方からの発言しか得ることができませんでしたが，参加者の 6 割以上からアンケートを提出していただきました。その 9 割以上の方から「とても満足・やや満足」との回答を得ると同時に，「自らの保育を見直していきたい。」「明日からの保育に生かしていきたい。」と，この報告会で伝えたかったことを受け止めていただいていることや，参加者の意欲の向上を示す御意見を多数頂いています。

２　3 つの研究プロジェクトの総括

(1)　「実践」に結び付く「先取・先進」の研究活動

こどもみらい館の「研究機能」について，こどもみらい館の基本理念である「京都市幼児教育センター（仮称）基本構想策定委員会答申（平成 8 年 8 月，以下「答申」）」は，「教育・保育内容の向上を図り（中略）実践に結び付ける視点に立ち，調査・研究を行うことが重要」であると述べています。

前述したように「報告会」の参加者の多くの方から，「満足」との回答や保育の充実に向けた意欲の向上を示す意見を得ることができたのは，3 つの研究プロジェクトが，常に「答申」で示された「実践に結び付く」ことを基軸に据え，5 年間の研究活動を進めてきた成果であると考えております。

また，昨年 3 月に告示された改定「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」において，「保育園(所)と幼稚園の相互理解と保育の質の向上」「全ての子育て家庭への支援や地域の子育て力の向上」を推進することが，これまで以上に強く園(所)に求められています。

3 つの研究プロジェクトが「考察と今後の課題」として発信した「保育の視点」「保幼の切磋琢磨」「子育て支援の 3 つの視点」「多様な地域連携事例と 3 つの視点」等においては，こうした園(所)が担うべき役割について，少なくない示唆を提示することができたことも，アンケートの結果に結び付いていると考えております。

同時に，このことは，3 つの研究プロジェクトが，各研究プロジェクトに参画いただいた方々や「共同機構」の各分野の関係者と一体となって，それぞれの特色を発揮しながら常に先を見据えた先取・先進の研究を行ってきたことを示すものであると考えております。

(2)　到達点と今後の研究活動の展望

・　**「就学前教育研究プロジェクト」**においては，保育園(所)・幼稚園の保育者による共同研究が，「知り合う」「認め合う」「刺激し合う」「学び合う」ことを通して，「子ども理解」と「保育者としての資質の向上・保育の充実」に大きく寄与することを明らかにすることができました。

このことは，「幼稚園と保育園(所)等が共通するテーマについて共同して研究を行うことを志向」するという「答申」で示された，こどもみらい館の研究機能の特色となる「研究スタイル」でもあり，今後は，個人としての参画だけでなく，「保育園(所)・幼稚園」が組織として共同で研究を進めるスタイルも模索していきたいと考えております。

・ **「乳幼児子育て支援研究プロジェクト」**においては，今後の子育て支援の課題を明らかにしましたが，その中でも「子育て当事者の価値観の尊重」や「子育て当事者が子育て支援者になり得るための支援の重要性」の視点は，保育者が日々の保護者との関わりの中で常に堅持していかねばならない視点でもあります。

こうした観点から，今後においては，**「就学前教育研究プロジェクト」**において明らかになった「保育の視点の一つである保護者との関わり」を深めていくことも含め，保育者の保護者支援の在り方についても研究を深められればと考えております。

・ **「地域と結ばれた事例研究プロジェクト」**では，小学校や地域諸団体，地域の施設等との具体的な連携事例だけでなく，年間保育計画への位置付けや連携機関との成果・課題の確認等，園(所)が今後地域との連携を深めていくための羅針盤ともいえる視点を明らかにすることができました。

こうした到達点と**「乳幼児子育て支援研究プロジェクト」**における「子育て当事者と地域との結び付き」「地域における子育て当事者同士の結び付き」を深めるという今後の課題を踏まえ，地域の子育て支援の中核施設として園(所)の果たす新たな役割についての研究を進めていければと考えております。

(3) 結びに

こどもみらい館は，保育園(所)・幼稚園，私立・国公立の垣根を越え，また，福祉や医療分野の関係者と一体となり，「共同機構」として「子育て支援都市・京都」の充実・発展を目指し，相談・研究・研修・情報発信等の多彩な取組を進めることを目的に，平成 11 年 12 月に開館し，平成 21 年度に開館 10 周年を迎えます。

この間，子どもたちと子育て家庭をめぐる環境は好転するどころかむしろ悪化する状況にあると言っても過言ではなく，改定された「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」で示されているように，園(所)に求められる責務は強まり，担うべき役割は多様化しています。

こうした状況の下，こどもみらい館は，保育者の専門性の更なる向上と，保育・教育内容の充実，地域の子育て力の向上を目指し，前述した「到達点と今後の研究活動の展望」をふまえ，「共同機構」として新たな研究事業を展開してまいりますので，引き続き一層の御支援と御協力を賜りますようお願いいたします。

〔参考〕研究プロジェクト報告会の次第と参加アンケート（抜粋）

(1) 日時

開催日　平成 20 年 12 月 8 日（月）

会　場　京都市子育て支援総合センターこどもみらい館

次第・発表者

13：30～13：35　こどもみらい館長あいさつ

13：35～14：30　乳幼児子育て支援研究プロジェクトの発表・質疑等

報告者：主任主事　林　麻里

14：40～15：40　地域と結ばれた事例研究プロジェクトの発表・質疑等

報告者：首席主事　江木朋子

15：50～16：50　就学前教育研究プロジェクトの発表・質疑等

報告者：主任主事　柳生和代

(2) 参加者アンケート（抜粋）

【乳幼児子育て支援研究プロジェクト】

○　支援される側から支援する側へという発想が新鮮で感銘を受けました。当事者の力を生かすことをもっと考えていかねばならないと思いました。

○　子育て当事者の視点で考え，地域の子育て力を育てることの大切さを認識しました。

○　ほっこり子育てリーフレット作り，特に 5 言語による子育てヒント集の作成は大変意義があることと思いました。このような活動を通して子育てにおける互いの価値観の違いを認め合うことにつながると思いました。

○　リーフレットはほっとする一言が盛り込まれていて，母親の声からできあがっていることが分かりました。

○　ワークショップやパネルディスカッションの声や具体的な経過がもっと聞きたかったです。

【地域と結ばれた事例研究プロジェクト】

○　地域との関わりに積極的に取り組み，子どもたちの人格形成に関わる大切な心を育んでいきたいと前向きな気持ちになりました。

○　「今後の課題」がはっきりしていてよかった。地域とのつながりが親育て子育てであるのではとしみじみと感じます。

○　いろんな関係機関との連携の事例報告がたくさんあり，自園が地域との連携や保幼小連携を進めていくうえでモデルになる内容でとても参考になりました。

○　それぞれの保育園(所)・幼稚園がその地域でできることをさりげなく活動されていることが良かったと思いました。互いに良い影響を与え合う意味のある活動

だと思います。

○　小学校との連携は，学校側の歩み寄りも必要だと思いました。

○　できればもう一歩地域との連携の中の一つの姿を通しての深い討議の展開があればとも思いました。連携となると，もっと互いのこと（ねらいなども含む）をしっかり理解し，成り立っていくものではないかと思います。研究としてはもっと深め何のために？そこで何が育つ？という視点も必要かと思います。

【就学前教育研究プロジェクト】

○　就学前教育と聞くと，5 歳児と思っていましたが，0 歳から入学までの育ちの連続性の大切さを改めて感じました。また，子どもの気持ちやいろいろな力，保育者の関わり方，保護者への対応・伝え方等，もう一度自分の保育を振り返ることができ良かったです。

○　このプロジェクトの中で，保育園(所)・幼稚園の枠を越え，子どもにとって何が大切か一致したということは，保育所保育指針・幼稚園教育要領の先をいく研究だと思いました。

○　エピソード記述と討議シートを使うことにより，自分の保育や子どもの思いが見えてくるのがよく分かりました。日々流しているかもしれない保育を整理して考えていくことの重要性が分かったような気がします。

○　討議シート，観点に絞ったエピソードの記述を基にした討議への提案は，焦点が不鮮明になりがちな協議方法への良いアドバイスになりました。

○　保育園(所)や幼稚園でのエピソードを基に子ども理解，保護者との信頼関係を十分とれているのかを検討・協議されていることが分かり，保育者の保育に対する熱意が十分感じられた。

○　「就学前」という視点なら，この取組が小学校教育とどのようにつながったのかを検証する必要があったのではないかと思います。

【こどもみらい館の研究テーマ】

○　長いスパンで一人の親子を追い，親の子育てとその子の育ち，その子が集団の中に入るときにはどう関係しているのか，等を深める研究ができれば面白いかと思います。

○　エピソード記述の研究に興味があります。

○　テーマの継続と深まりを期待します。

こどもみらい館研究・研修関係発行物一覧

年度	分類	名　　称
12	研修	平成 12 年度　共同機構研修会講義要録
13	研修	平成 13 年度　共同機構研修会講義要録
14	研修	平成 14 年度　共同機構研修会講義要録
15	研修	平成 15 年度　共同機構研修会講義要録
16	研修	平成 16 年度　共同機構研修会講義要録
17	研究	就学前教育研究プロジェクト　第 1 次レポート 平成 17 年度　京都市子育てサポート推進チーム事業　研究報告書 〔別冊〕連続公開講座講演録
18	研究	ほっこり子育てリーフレット 「授乳編」「トイレトレーニング編」「イライラしたとき編」 「0,1,2 歳の遊び編－お外で－」「0,1,2 歳の遊び編－室内で－」 5 言語で紹介する　京都発　子育てヒント集 就学前教育研究プロジェクト　第 2 次レポート 平成 18 年度　京都市子育てサポート推進チーム事業　研究報告書 〔別冊〕保幼小連携推進のあり方研究 〔別冊〕連続講座講演録
	研修	平成 17・18 年度　共同機構研修会講義要録
19	研修	平成 19 年度　連続講座講演録
20	研究	京都発　子育てヒント集 「ハングル版」「英語版」「中国語版」「タガログ語版」 平成 20 年度　こどもみらい館研究プロジェクト報告書　－平成 16 年度～20 年度－
	研修	平成 19・20 年度　共同機構研修会講義要録 平成 20 年度　連続講座講演録

こどもみらい館研究プロジェクト報告冊子

発行日　平成 21 年 3 月
発行者　京都市子育て支援総合センター　こどもみらい館
〒604-0883　京都市中京区間之町通竹屋町下る楠町 601 番地の 1
電話　(075) 254-5001
FAX　(075) 212-9909
URL　http://www.kodomomirai.or.jp